

第 1 部

芸能実演家編

I. 調査集計結果の概観

日々研鑽を積み、技能向上のために研究、トレーニングを欠かさない。

収入は、世間で羨まれているほど高収入の人は少なく、必要経費の個人負担は少なくない。

実演芸術をとりまく仕事環境は、決していいとは言えない。

けれども、自分の能力や才能を発揮するために仕事をし、自分の仕事には高いプライドを持っている……今回の調査から明らかになった実演家像です。

過去の調査と比較をすると、社会の変化とともに変わってきた部分もあります。

また今回は初めて地域別集計を試み、地域によって異なる意識、要望が読みとれる部分もあります。

第9回調査の概観をここに提示します。

■ 中高年齢層の占める割合の増加—回答者の属性分析から

芸能実演家の回答者の年齢構成は、平均年齢が54.0歳、50歳以上で59.6%を占めるに至っています。5年前の第8回調査では平均年齢51.5歳、50歳以上が53.7%、10年前の第7回調査では平均年齢51.8歳、50歳以上が53.5%であったのと比較して、ここに至って中高年齢層の割合が増加しています。

平均年齢2.2ポイント増の要因は、ひとつには第8回調査の対象に年齢層の若いモデルエージェンシーに所属する実演家が多く含まれ平均年齢を押し下げる要因になっていたのに、今回はモデルに集中して対象抽出されていないことがあげられます。さらに8ジャンル別のこれまでの調査の傾向から、平均年齢が比較

的に若い「洋舞」の実演家が占める割合が低めであることと、逆に高齢でも活躍し続ける「邦楽」の回答率が上昇して邦楽実演家の占める割合が若干上がっていることが平均年齢を押し上げているのではないかと考えられます。しかし、ジャンル別の平均年齢の推移を見ていくと、「洋楽」が50.0歳から47.5歳に微減、「洋舞」が48.0歳から47.8歳に微減、あとのジャンルはすべて増加していて、全体的に年齢層があがっている傾向は否めません。参考までに第7回調査の8ジャンル別の平均年齢との比較においては、演芸（57.1歳から52.3歳に平均年齢低下）を除いて、すべてのジャンルで平均年齢があがっています。

ジャンル別の特徴としては、日本古来の芸能分野、すなわち「邦楽」、「邦舞」、「伝統演劇」は60歳以上の割合が高く、特に「邦舞」においては70歳以上で現役である実演家が40.8%となっているのが目立ちます。一方、「洋楽」「洋舞」は、50歳未満の割合が高い傾向がありますが、「洋舞」においても、50歳未満の割合は第8回では50.8%であったのに対し、今回は45.9%にとどまっています。

参入してくる若年層の数を上回るほど、実演家のリタイアがなく、生涯現役で活動し続ける実演家が多いという特徴が浮かび上がっています。

■ ジャンルと仕事の内容—教える仕事に携わる人が過半数

携わっている分野を複数回答で求めたところ、最も多かったのが「放送（テレビ、ラジオ）・スタジオ録音、スタジオ録画」の19.5%で、次いで「現代演劇・メディア」（13.5%）、「オーケストラ」（13.2%）、「能楽」（11.5%）、「日本舞踊」（10.6%）でしたが、ほかは全て10%未満で分散傾向にあります。しかし、最も比重の大きいものの回答1つに限定すると、「放送（テレビ、ラジオ）・スタ

ジオ録音、スタジオ録画」は2.8%にとどまり、10%を超えているのは「オーケストラ」（10.8%）、「能楽」（10.7%）だけになります。

「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇・メディア」「洋舞」「演芸」「演出・制作等」の8ジャンルの内訳をみると、「洋楽」「現代演劇」は最も比重の大きい分野が多岐にわたっています。（問 A-1(a)、(b)）

現在、仕事でしていることを複

数回答で求めたところ、「教える、指導する」が58.4%と6割近くにのぼり、次いで「楽器を演奏する」（32.8%）、「歌・唄・謡をうたう、語る」が25.5%、「踊る・舞う」が25.3%と続いています。最も比重の大きいものに絞るだけでも、「教える、指導する」が最多で21.1%、「楽器を演奏する」が19.1%、「劇やドラマを演ずる」が13.2%となっています。（問 A-2(a),(b)）

■ 実演家のキャリア形成

【芸歴】 芸歴、活動年数の平均は37.0年。出演料、報酬を得るようになってからの平均年数は26.6年でした。(第8回調査では、それぞれ33.0年、24.1年)。ジャンル別にみると、「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋舞」で活動歴「41年から50年」の層が最も割合が大きく、「洋楽」と「演出・制作等」が「31年から40年」が最も多く、「現代演劇・メディア」と「演芸」では「21年から30年」が最も多くなっています。(問A-4(a),(b))

【動機】 現在の仕事をするようになった動機を複数回答で求めたところ「とにかくやりたくて」が最も多く42.2%となっています。次いで「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が33.3%。ほかの理由はいずれも2割未満です。

しかし、ジャンル別に見てみると、動機にはばらつきがあります。

「演芸」は、「とにかくやりたくて」が62.0%と突出しており、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」も41.7%と、意欲と自信が強い動機となっています。

しかし、環境が大きな要因となっていると推察されるジャンルがあります。

「伝統演劇」では、「その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから」が30.4%と最も多く、次いで「とにかくやりたくて」25.0%、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が22.8%となっています。

「邦楽」「邦舞」では「世襲ではないが、家庭環境で自然に入った」がそれぞれ34.3%、26.8%と最も多く、次いで「とにかくやりたくて」(26.9%、25.4%)となっています。

「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」では、「親・兄弟その他に勧められて」が

いずれも16%前後で、ほかのジャンルより高めなのをみると、伝統芸能の分野は家庭や周囲の環境や周囲の人の勧めが重要な要因になっていることが見てとれます。

「洋楽」で最も多いのは、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」で55.0%。「とにかくやりたくて」は49.8%で、全体の傾向とは順位が逆転しており、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が24.5%、「オーディションを受けて合格したから」が18.1%と、自他ともに才能を認めることが重要な要因になっていると推察されます。

「現代演劇・メディア」は、「とにかくやりたくて」が59.5%、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が39.7%と「演芸」と傾向が似ていますが、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が24.5%と、全体平均より高い割合となっています。

「洋舞」は「とにかくやりたくて」が54.2%と、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が31.3%で、あとはそのほかの選択肢に分散しています。

「小さい頃から芸能活動のための教育を受けたから」の選択肢で、「邦舞」23.2%、「洋舞」19.1%が高めで、小さい頃からの稽古、訓練が大きな意味をもつジャンルであるのが伺われます。(問A-3(a),(b))

【技能の習得】 どのように今の活動分野の技能を身に着けたかを複数回答で求めたところ、最も多かったのが「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が42.6%で、次いで「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が32.9%、「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」が22.3%、「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身

に着けた」が20.8%となっています。

この中で最も重要だったと思うものの1つに絞り込むと、こちらも1位、2位は「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」(31.4%)と「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」(14.0%)ですが、3位は「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」(12.4%)でした。

ジャンル別に見てみると、それぞれの技能の習得の道筋に特徴があるのが伺われます。

「演芸」は「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が70.6%と突出していて、ほかの選択肢の比率が小さいのに対し、「現代演劇・メディア」は、最も多いのは「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」が46.4%で、次いで「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」で23.8%です。

「洋楽」は「その分野の専門の大学院、大学、短大で教育を受けた」が33.7%、次いで「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が20.5%となっています。

「洋舞」は「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が43.5%で最も多くなっています。「邦舞」は、「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」と「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」がともに38.7%と並んでいます。(問A-5(a),(b))

活動の状況について

■ ライブ出演、教授業、メディア出演の割合一日数、収入の面から

芸能実演家の仕事の場合は、舞台などのライブの公演への出演、メディアへの出演・撮影・録音、教える仕事の3つに大別されます。出演、収録には、それぞれに稽古、リハーサル等があるほか、個々人で研鑽をつむことも欠かせません。

昨年1年間に行った活動について複数回答で求めたところ、最も多かったのは「舞台、コンサート、ライブ、ショー、イベントなどへの出演」76.9%で、「舞台等への出演のための稽古（リハーサル、移動日を含む）」68.2%、「教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）」63.1%の順です。

これを日数ベースで見ると順位が変わります。全ジャンルの平均活動日数で最も多いのは「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」

が151.0日で、次いで「教える仕事」が102.5日です。舞台などへの出演は60.4日で、そのための稽古が84.7日となっています。

これを8ジャンルごとに見ていくと、舞台などへの出演が最も多くなっているのは「演芸」で、平均値が123.5日。次に多いのが「伝統芸能」で81.6日です。そのための稽古、リハーサル等に費やしている日数が一番多いのが「洋舞」（144.1日）で、次いで「洋楽」（107.5日）です。

「教える仕事」が多いのが、「洋舞」（189.5日）、「邦舞」（147.7日）です。

「映画・放送・メディアへの出演」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で54.7日です。（B-2(a)、(b)）

昨年1年間に「芸能以外の仕事をしていない」と回答した人は過半数を超えていて、過去の調査と比べてもあまり変化はありません。（B-4）

これを、収入源の面から見てみます。全ジャンルを総合すると「舞台出演」からが最も多く31.6%、「教える仕事」が25.5%で続きます。芸能以外からの収入も少なくありません。「年金、不動産、その他の事業経営」からの収入は全体で11.7%、「それ以外の収入」は13.9%となっています。

ジャンル別にみると、「舞台出演」が最も多いのは「演芸」（67.4%）、次いで「伝統芸能」（43.6%）と、日数ベースと同じ傾向です。「教える仕事」が多いのが「洋舞」（56.1%）、「邦舞」（50.1%）です。「映画・放送・メディアへの出演」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で24.1%です。（問B-8）

■ 景況感

仕事の機会について2～3年前との比較でいうと、いずれの仕事も「変わらない」が多数派ですが、「舞台」「メディア」への出演が減ったと感じている傾向が強く、「教える仕事」で増加していると感じている人の割合が比較的高いです。

ジャンル別にみると、「舞台」中

心の「演芸」では、舞台などへ出演が「大幅に減った」と回答している人の割合が最も高く、主たる活動で減少傾向を感じている状況があります。

「メディアへの出演」が中心の「現代演劇・メディア」では、「メディアへの出演」が大幅に減ったと感じ

ている傾向が強く出ています。（問B-3）

「教える仕事」が中心の「洋舞」「邦舞」では、景況感が逆で、「邦舞」では減ったと感じている傾向があるのに対し、「洋舞」では増えたと感じている傾向の方が勝っています。

（問B-3）

■ 教える仕事の状況

実演家の6割近くが携わっている「教える仕事」ですが、その教授業の場はさまざまです。

継続的に教えていて「学校や教室、養成機関に勤めて教えている」は51.7%、「自分で教室を主宰して

弟子をとっている」が67.0%で、「不定期でときどき体験指導などを依頼される」が36.9%でした。「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」では、自分で弟子をとる割合が圧倒的に高く、「洋楽」「洋舞」では、学校等に雇われてい

る場合と、自分で生徒をとる割合は拮抗しており、「現代演劇・メディア」と「演芸」では「学校等に勤めて」の方が多くなっています。

生徒・弟子の数では、「学校や教室、養成機関等」で継続的に教えている

生徒数は平均値で47.7人。第8回調査結果(46.5人)から微増です。ジャンル別でみると、「邦楽」「洋舞」「演芸」で増加しています。「自分で教室を主宰して」教えている生徒・弟子の数は平均で23.1人。第8回調査は26.5人でしたから若干の減少です。ジャンル別にみると、増えているのは「邦舞」だけで、ほかは

減少していました。第8回の調査対象とは異なるので、増減の傾向は同一実演家が教える生徒・弟子の増減傾向を現しているものではありませんが、問B-3で見た「2～3年前と比べて」実演家が感じている増減の傾向とはやや異なっていました。(問B-5)

実演家が教える仕事を依頼され

る場、主体について問うている設問では、第8回と分布はほぼ一緒ですが、「小中高校」が17.0%から25.6%に、「民間企業や個人主宰の音楽教室、バレエ教室」が19.4%から23.3%というように増加傾向が見られました。(問B-6)

■ 収入と費用の負担

芸能実演家の昨年1年間の個人収入は、「300万円未満」までの所得層で5割程度を占めています。前回調査と比較すると、最も多い層が前回は「100万から200万円未満」だったのが、「200万から300万円未満」にシフトしました。第8回との比較でいうと、低所得層は減少していますが、高い所得層の割合にそれほど変動は見られません。

年齢別に分布をみると、40～49歳の中堅では「500～600万円未満」の割合が最も高くなっており、若年層と比べると年齢に応じて徐々に収入があがっているのが見てとれます。過去の調査との比較を年齢層別の平均所得の推移で比べてみると、リーマンショックの影響があったと推察される第8回より上回る傾向にあります(ただし「40歳から49歳」で若干低くなっています)、経済全体が今より好況だったと思われる15年前の第6回時よりはいずれの年齢層でも下回っています。とりわけ60歳以上の平均収入が4回の調査のうち下から2番目と低く、高齢者層の収入低下の傾向が強くなっています。(問B-7(a))

芸能実演家の所得水準は、収入だけでなく必要経費の割合も影響するため、第9回調査では、総収入に対する必要経費の割合について問いました。その結果、「給与所得だけで

確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない」と回答した割合が23.3%と最も多くなっていました。(問B-7(b))

収入の形式についてみると「仕事に応じて支払われる報酬」が「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」を上回っていて、月給、年俸など予め決められた報酬を得ていない人の割合が高いです。(問B-9)

にもかかわらず、問B-7(b)で「所得控除の対象になった必要経費はない」という回答が多すぎるのではないかと、回答者の他設問での回答を調べてみると、「月給などの予め決められた報酬」は受け取っていないけれども確定申告はしていないと回答している人が含まれているようです。今回は、確定申告をしている人の割合を掴んでいませんが、実演家の確定申告の状況については、今後より丁寧な調査が必要と思われます。

個人負担となっている仕事上の必要経費について複数回答で問うた設問では、多い順に「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」「交通費」「整髪料、化粧品」「通信費」「接待費・交際費」「身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出」と並び、第8回と比較して上位6位までは変動ありませんでした。

ジャンル別にみると、芸能実演家

が個人で舞踊会、演奏会、独演会など発表の機会を持ち、そのための個人負担が大きいと推察されるのが「邦舞」「邦楽」です。「会場の使用料」に加え「ノルマのチケットの売れ残りの自己負担」が大きいことから、発表機会の観客集めが難しく実演家の負担になっているジャンルです。「演芸」「洋楽」「邦舞」「邦楽」は「チラシ、プログラムの印刷費」が比較的多くなっています。

一方、公演の費用は主催する所属集団・組織で負担するとみられるジャンル「現代演劇・メディア」では「会場の使用料」「チラシ等印刷費」の負担割合が少なく、チケット売れ残りの負担の割合も低めになっています。「洋舞」は「邦舞」「邦楽」よりは個人負担の割合は少ないですが、チケットの自己負担は2割以上あります。

「共演者に対する出演料、謝礼」については「邦楽」(31.4%)を筆頭に、「邦舞」(27.5%)、「演芸」(27.0%)、「洋楽」(24.5%)、「伝統演劇」(23.2%)、「洋舞」(20.6%)と続き、実演家が伴奏者などの実演家に対して支払う立場にあるというのも特徴的といえます。(問C-2)

芸能実演家の仕事環境について

■ 仕事上でのケガ、病気と治療負担、補償

昨年1年間に、医師の治療が必要となった仕事上のケガと病気の経験率はそれぞれ9.0%、17.0%で、ケガの発生場所は半数近くが稽古場で起きています。治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が圧倒的

に多く、ケガの発生での労災適用は7.6%にとどまっています。治療費以外の補償では、「何もない」がほとんどで、「見舞金程度」が若干あるにとどまり、休業補償がうけられないのが実態です。仕事由来のケ

ガ、病気であっても自己負担で補償もないという状況は前回までの調査結果と変わっていません。(問C-3,4,5)

■ 仕事上の問題点

芸能実演家が感じている仕事上の問題点を複数回答で問うたところ、最も多いのが「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」(31.2%)で、次いで「仕事が単発で継続して仕事がない」(27.0%)。その次に「報酬その他についての交渉力が弱い」(25.6%)があがっています。ジャンルによって傾向に違いがありますが、実演家が抱えている問題点は多岐にわたっています。一方、今回、「問題があるとは感じていない」という

選択肢も追加したところ、18.6%の回答があり、特に問題を感じていない層も存在することがわかりました。(問C-1)

契約関係について、放送番組等に出演する場合について契約書の有無を問うたところ、「全く契約書は交わしていない」が16.3%、「マネージャーに任せているので自分では確認していない」10.7%となっており、「必ず契約書は交わしている」は4.9%にとどまっています。(問

B-10)

実演家が有する著作隣接権についての認識を問うたところ、「知っている」37.6%、「聞いたことはあるが、よく分からない」30.6%、「知らない」25.8%で、著作隣接権に由来する権利の委任状況について「権利処理を行う団体に委任している」は30.8%で、「所属事務所等に任せているので自分ではよくわからない」が16.9%、「何もしていない」が44.4%となっていました。(問B-11、12)

■ よりよい活動が続けていくために

実演家としての技術・技能を向上させるためのサポートとして何が必要か、選択肢の中から3つまで選ぶ問では、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」「芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること」「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助があること」の3つが上位に並び、この傾向は第8回調査と変わっていません。

日頃から、仕事に関わらず「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」に費やす時間が多く、自己負担の費用の中で「会場費」が少なからずある状況を見ると、必然的にこ

のようなサポートを強く要望することが頷けます。(問D-2)

安心して活動していくための必要条件として3つまで選択する問では、「発表や公演、出演の機会が多くあること」「報酬額や就労時間など仕事の条件がよくなること」「文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること」が上位3つを占めていて、これも第8回調査結果と同様です。(問D-3)

万一の場合や老後に対しての備えとして、実演家がどう対応しているか複数回答で問うた設問では、「生命保険や損害保険などに加入している」と「国民年金に加入している」がそれぞれ約6割ありますが、

「備えをする経済的余裕がない」が18.9%あるなど、十分な備えがあるとは言えない状況です。第8回調査との比較でいうと、「余裕がない」は2.1ポイント減少し、保険加入や貯蓄などの備えの回答も少しずつ増えていることから、5年前よりは万一に備えるゆとりが出てきたのか、あるいは老後への危機感が高まっていることの表れと推察されます。(問E-7)

仕事や生活に対する考え方

■ プライドを持ち、できる限り今の仕事を続けたい

芸能実演家全体でみると、仕事に対する考え方を問う質問では、「自分の仕事にプライドを持っている」「今の仕事をできる限り続けたい」は9割前後が肯定しており、8割弱が「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている‘本業’の仕事」であると考えています。

「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができている」に至っては、肯定的な回答の割合が6割強です。

その一方、仕事の量は十分とは考えていない人の割合の方が高く、「ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持ってい

る」では、6割弱が否定的な回答となっていて、将来に不安を覚えている状況です。

働く目的について問うたところ、「自分の才能や能力を発揮するために働く」と答えた者の割合が37.4%と最も高く、次いで「生きがいをみつけるために働く」が24.9%、「お金を得るために働く」が20.3%です。

同じ質問がなされている国民生活に関する世論調査（平成26年6月）の回答では、「お金を得るために働く」と答えた割合が51.0%、「生きがいをみつけるために働く」と答えた者の割合が21.3%、「社会の一員として、務めを果たすために働く」と答えた者の割合が14.7%、「自分

の才能や能力を発揮するために働く」と答えた者の割合が8.8%となっています。世間一般に比べて、実演家は自らの才能を活かすことや生きがいが目的となっているという違いが明確に出ています。（問 D-1(b)）

地域別集計結果

■ 関東、近畿、沖縄の地域性

第9回調査では、居住都道府県の回答を得て、地域別集計が可能になりました。今回は、「関東地方」「近畿地方」「沖縄県」「その他の地方」の4地域に分けて分析しました。

沖縄県では、「邦楽」と「邦舞」がそれぞれ半数近くを占めていて、「近畿地方」では、日本古来の芸能である「邦楽」「伝統演劇」「演芸」に従事している人の割合が「関東地方」より高くなっています。

仕事の状況では、「メディア出演」が「関東地方」で他の地方より高くなっています。「その他の地方」では、「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆」や「企画・プロデュース・制作」「教える仕事」の割合が他地域より高くなっています。

「教える仕事」では、「沖縄県」では自ら教室を主宰する割合が高く、不定期の指導依頼は少ないです。「関東地方」と「近畿地方」の動向にあまり違いはありません。

収入については、「関東地方」より「近畿地方」「沖縄県」の方が低所得者層の割合が多くなっています。一方、個人負担となっている仕

事上の必要経費は、「関東地方」は高めで、「交通費」「通信費」「接待費・交際費」「身体ケア、ケガ・病気の予防」では「近畿地方」より10ポイント前後高くなっています。

仕事に対する考え方や目的意識について、「関東地方」「近畿地方」は、全国平均と傾向はほぼ変わりません。しかし「仕事の量は十分である」ということについて、「その他の地方」は肯定的に捉えている傾向が見られます。

「仕事上の問題点」では地域差が若干あります。

「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」は、「関東地方」では最も問題視されている項目ですが、「沖縄県」ではさほど多くの方が問題視しておらず、「問題があるとは感じていない」が最も回答が多く29.9%でした。

芸能実演家としての技術・技能を向上させるための必要条件についてみると、全国集計では「稽古、練習のための場所が確保、提供されること」「芸能や映画等の作品を発表、公開できる場の確保・充実」「研修

奨励金」が1位、2位、3位ですが、「関東地方」「近畿地方」「沖縄県」「その他の地方」で、いずれも1位、2位、3位の順位が異なります。

安心して活動できるための必要条件については、各地方とも、1,2,3位はほぼ同じで、「発表や公演、出演の機会が多くあること」「報酬や就労時間など仕事の条件がよくなること」「文化芸術に対する国や自治体の公的支援の充実」が高い割合となっています。4位以下をみると、「近畿地方」と「その他の地方」では、公共劇場等が文化拠点として機能することの必要性をあげる人の割合が高く、「沖縄県」では、研修への支援、練習場の確保、学校での芸能の教育の機会が十分に組み込まれることを要望する人の割合が他地域よりも高くなっています。

今回、地域別分析を部分的に試みてみましたが、このように地域ごとに若干異なる現状があることを踏まえ、きめ細やかな文化政策の策定とその実現が望まれます。

II. 調査設計・調査回答者について

■ 調査設計

	第9回
調査対象者	日本芸能実演家団体協議会の正会員団体を構成する個人
調査方法	郵送法（一部団体発送）
抽出方法	団体名簿による割当法*
調査期間	2014年8月1日（金）～8月31日（日）
発送数	6,941
総回収数**	1,615
有効回収数	1,603
有効回収率	23.1%
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

* 正会員団体を8つの分野に分類し、同一設問ではあるが用紙の色を8種用意し、分野ごとに色をわけて送付。

** 総回収数は白票など無効票を含めた回収数。

< 参考 > 調査設計

	第8回
調査対象者	日本芸能実演家団体協議会の正会員団体を構成する個人
調査方法	郵送法（一部団体発送）
抽出方法	団体名簿による割当法
調査期間	2009年7月10日（金）～8月8日（土）
発送数	5,860
総回収数	1,361
有効回収数	1,353
有効回収率	23.1%
調査協力機関	株式会社インテージ

■ 調査対象の抽出方法の一部変更について

第9回実態調査も、基本的にはこれまでの調査方法を踏まえ、無作為に抽出された実演家、スタッフを調査対象としていますが、抽出母体については一部変更を行っています。本調査は、原則として芸団協正会員団体を構成する実演家、スタッフを、所属団体ごとに「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇」「洋舞」「演芸」「その他」の8ジャンルの分野にわけ、それぞれ少なくとも

100人以上の回答が得られるように抽出数を割り出してきました。

これまで「現代演劇」部門では、芸団協正会員団体のうち現代演劇部門にかかわる協会にサンプル数を割り当てていましたが、今回は、一般社団法人映像実演権利者合同機構（PRE）に協力をあおぎ、正会員傘下の実演家だけでなく、映像実演にかかわる実演家として同機構に権利委任をしている実演家およそ4万

余名から無作為抽出するのを基本としました。ただし正会員傘下には、PREに委任をせず舞台だけで活動している劇団等もあるので、一部、劇団経由で送付し、舞台と映像の両方の分野を網羅する「現代演劇・メディア」部門として扱うことにしました。これにともない、前回は「その他」部門で調査対象となっていた日本モデルエージェンシー協会（芸団協加盟は2002年）は、PREに委

任しているモデルがほとんどであることから、「現代演劇・メディア」部門に含めました（一部、PREに委任していないモデルが多く所属するモデルエージェンシーには調査票を送付し、事務所経由で実演家に調査協力依頼をしています）。したがって、第8回調査では「その他」のカテゴリーにモデルが多く含まれていましたが、第9回の「その他」の部門には含まれていません。今回は、演出と劇団等の製作、オーケストラ、バレエ団の事務局を対象として設問票を送付しました。属性が異なるので、「その他」部門については第8回と第9回の単純比較はできないことにご留意ください。

上述のように「現代演劇・メディア」部門として変更を加えた理由は、芸団協では会員団体への所属の有無にかかわらず、実演家の著作権隣接権にかかる徴収分配業務を行っているので、その範囲の実演家の実態把握を試みるべきではないかという観点からでした。また、音楽部門についても同様の考え方から、一般社団法人演奏家権利処理合同機構（MPN）を通じての抽出も検討しま

したが、MPNに委任している実演家より、洋楽部門の会員団体に所属している実演家の方が範囲が広いということで、従来どおり音楽分野については会員団体ごとに調査対象を抽出することとしました。

変更の理由は、もうひとつあります。

個人情報保護法（2005年施行）の浸透により、所属する実演家等の名簿を公表しない方針をとる団体が増え、個々の実演家への送付先情報を入手するのが困難になりつつあります。PREからの協力は、多くが実演家のご自宅ではなく所属事務所等を登録しているため、宛名の提供に理解が得やすかったことがあります。ただし、その反面、所属事務所の移動や引退等の変更が反映されていなかったり、所属事務所の芸団協の調査に対する認知が進んでいなかったと推察され、調査票の受取拒否の返送率が高くなっていました。結果として「現代演劇・メディア」ジャンルは、会員団体経由の追加発送を行い、従来どおりの回答数を得るに至りました。

他分野の協会等においても、送付

方法は変化しています。各役員会等で芸団協調査への協力を検討していただき、了承が得られ名簿提供いただいた団体もありますが、名簿の提供はできないけれども必要な通数の発送に協力するという形での発送が増えました。個人情報保護法施行以前は、全団体から名簿のご提供をいただき、名寄せをして重複を避けて抽出し一括送付作業をしていましたが、名寄せはできなくなりました。そのため設問票を2通受け取る方がいたかもしれません。発送作業は、団体ごとに異なる対応をしたため煩雑となり日数がかかりました。各団体の事務局のご協力がなければ、実演家、スタッフ合わせて8000通を超える調査票の送付は不可能でした。このような時代になっても40年にわたって継続され会員団体の皆様に認知されている調査として実施できたことに、歴史の積み重ねを感じました。本調査の意義をご理解くださり、手間を惜しまずご協力くださった多数の方々に、改めて御礼申し上げます。

■ ジャンル別回収率

	第9回			
	発送数	総回収数	有効回収数	有効回収率
TOTAL	6,941	1,615	1,603	23.1%
A 邦楽	885	251	245	27.7%
B 伝統演劇	710	225	224	31.5%
C 邦舞	1,050	143	142	13.5%
D 洋楽	800	249	249	31.1%
E 現代演劇・メディア	1,606	253	252	15.7%
F 洋舞	623	131	131	21.0%
G 演芸	645	165	163	25.3%
H その他（演出・制作等）	622	198	197	31.7%

* 「E 現代演劇・メディア」には、これまでの現代演劇部門の正会員団体傘下の実演家のほかに、加盟外の映像実演に関わる実演家が対象に含まれています。

* 「H その他（演出・制作等）」は、前回の「その他」での対象と異なるので、比較には注意を要します。

<参考>
第8回 ジャンル別回収率

	第8回			
	発送数	総回収数	有効回収数	有効回収率
TOATL	5,860	1,361	1,353	23.1%
A 邦楽	760	158	154	20.3%
B 伝統演劇	700	200	200	28.6%
C 邦舞	900	137	137	15.2%
D 洋楽	700	176	176	25.1%
E 現代演劇	800	206	205	25.6%
F 洋舞	700	144	144	20.6%
G 演芸	600	164	162	27.0%
H その他	700	176	175	25.0%

先に触れたように、「現代演劇・メディア」においては、初めてPREの名簿から抽出した実演家に送付したので、前回よりも有効回収率は低くなりました。しかし、追加発送の効果があり、前回を上回る有効回答数が得られています。今後は、PREに委任している実演家および所属事務所等に対する本調査の

認知度を高めたり、抽出対象についても過去一定期間に著作権隣接権の分配を受けた実績のある実演家に限るなどして、映像の分野で仕事をしている実演家からの回収率アップのための工夫が必要と思われます。

「邦舞」は、前回も唯一有効回収率が10%台と、8分野の中で最も低い率でしたが、今回はさらに1.6

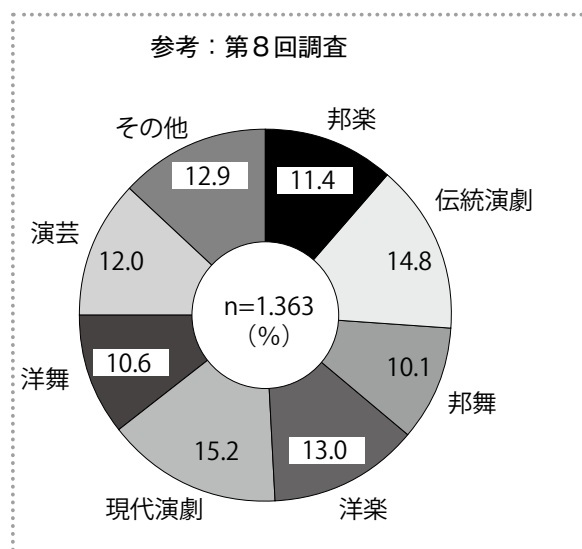
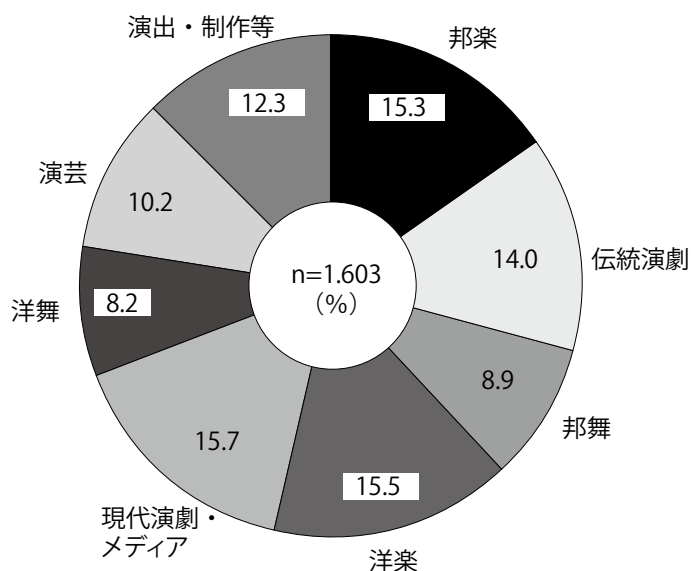
ポイント下がって、13.5%と最も低い有効回収率でした。

一方、伝統演劇は31.5%、邦楽が27.7%と高い回収率の分野もあり、結果として実演家全体では前回と同じく23.1%の有効回収率となっています。

■ 回答者のジャンル構成比について

8つのジャンルの回答者数がすべて100を超えるようにと抽出を行っており、割合がほぼ同じになるのが理想です。従来、「邦舞」「邦楽」「洋舞」は、回収率が低めなので発送数を調整するのですが、第9回では、「洋舞」(8.2%)、「邦舞」(8.9%)の割合が前回より低くなりました。「洋舞」は会員外への調査協力要請が間に合わなかったため、送付数を増やせませんでした。回収率は若干あがっています。「邦舞」は、日本舞踊協会会員以外にも沖縄地域の舞踊家の発送数を増やしましたが、回収率は伸びませんでした。今回は第8回との比較では「邦楽」で回収率が上がり、「現代演劇・メディア」(15.7%)と「洋楽」(15.5%)に次いで割合が高くなりました。

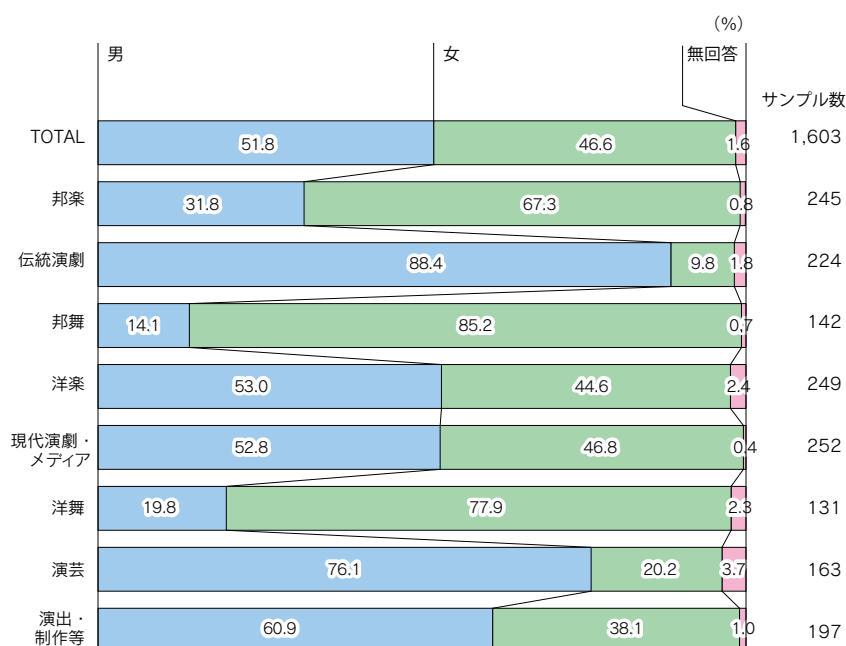
※調査票発送段階で、あらかじめ左図の8つのジャンルに分類しています(巻末参照)。そのためA-1(b)「たずさわっている分野のうち最も比重の大きいもの」(p.133)の回答と若干異なる場合があります。



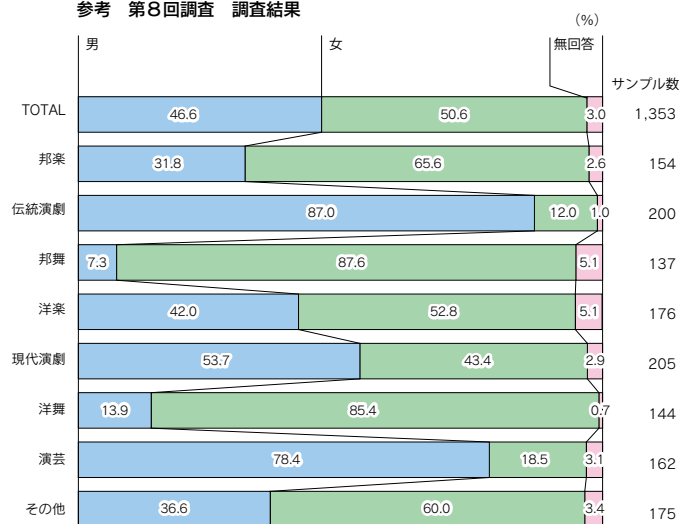
■ E-1 性別

男女の構成比は、男性が51.8%、女性が46.6%と、男性が若干上回っています。第8回調査では男性が46.4%、女性が50.6%で、女性のほうが若干割合が高かったのですが、第9回調査では男女比が逆転しています。これは、既述のとおり前回は、「その他」で日本モデルエージェンシー協会の傘下の実演家を調査対象としており、モデルには女性が多いため、結果的に女性が多く対象となっていたと考えられます。また今回は、前ページにあるように、女性が多い分野である「洋舞」「邦舞」の分野の実演家の占める割合が下がったことから、全体として女性の割合が下がったと考えられます。

問 E-1 性別



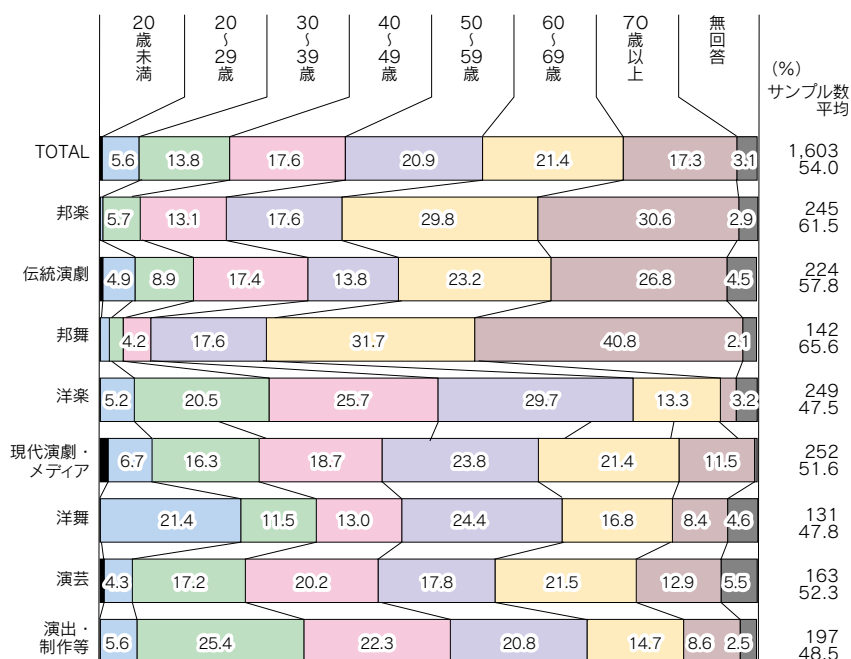
参考 第8回調査 調査結果



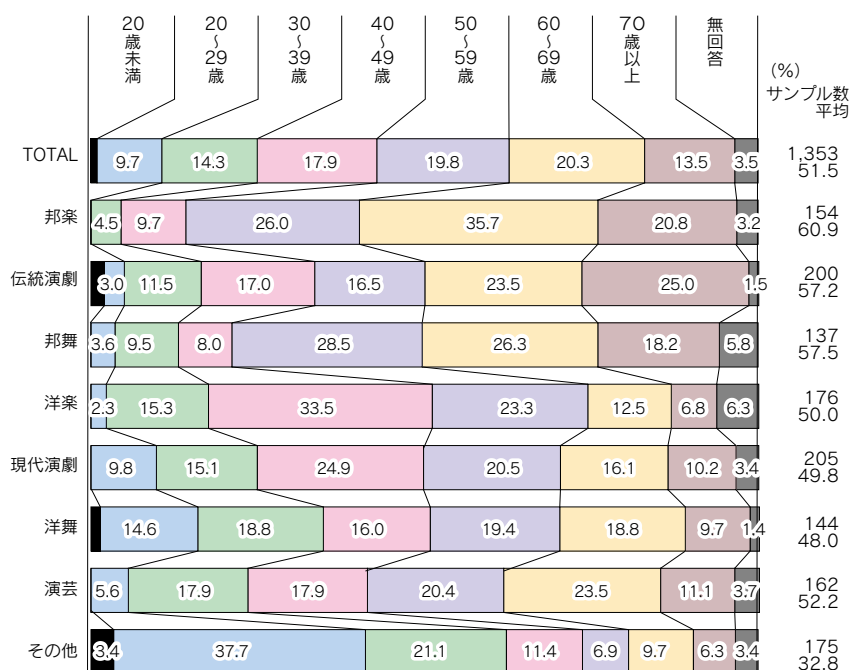
■ E-1 年齢

平均年齢は54.0歳、最も多い年齢層は「60～69歳」(21.4%)です。第8回調査に比べて回答者の平均年齢は2.5歳上がっており、特に「邦舞」で平均年齢が8.1あがっているのが目立ちます。第8回で年齢層が比較的若かったモデルを多く含んでいた「その他」と、今回の「その他(演出・制作等)」で対象が変化したことにより、年齢層を押し下げる要因がなくなったことも影響していると考えられます。

年齢層では第8回との比較すると「60～69歳」「70歳以上」の割合が、ともに高くなっています。



参考 第8回調査 調査結果

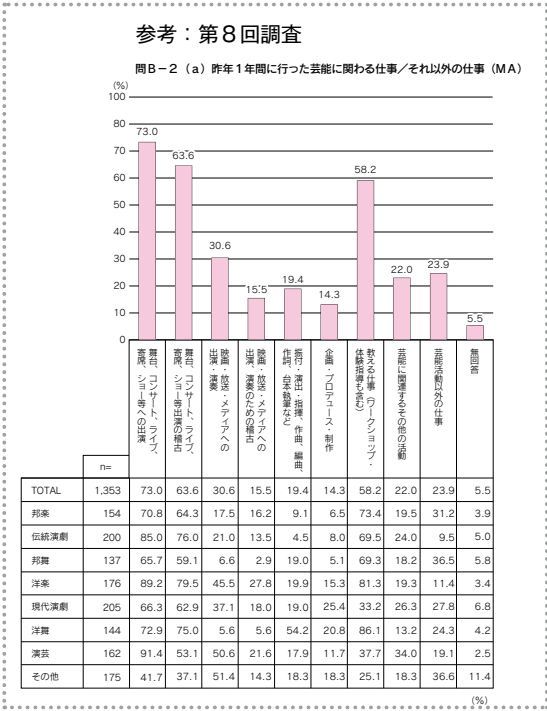
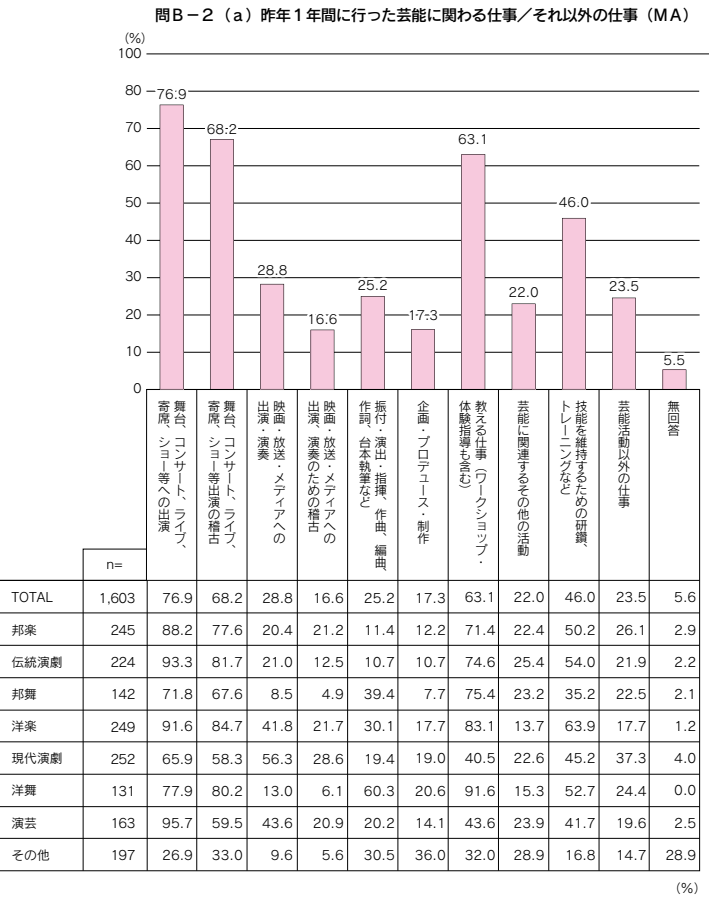


Ⅲ. 分析結果詳細

以下には、テーマごとに、各設問の回答集計結果を示していきます。「B-1」「C-2」というのは設問の記号です。(MA)と表示しているのは、複数回答を可とした設問です。なお設問票のサンプルと回答の集計は巻末(p.132～159頁)に示してあります。

(1) 経済状況・景況感について

B-2 (a) 昨年1年間に行った活動 (MA)



* グラフが間違っておりました。お詫びいたして、正しいものに差し替えさせていただきます。

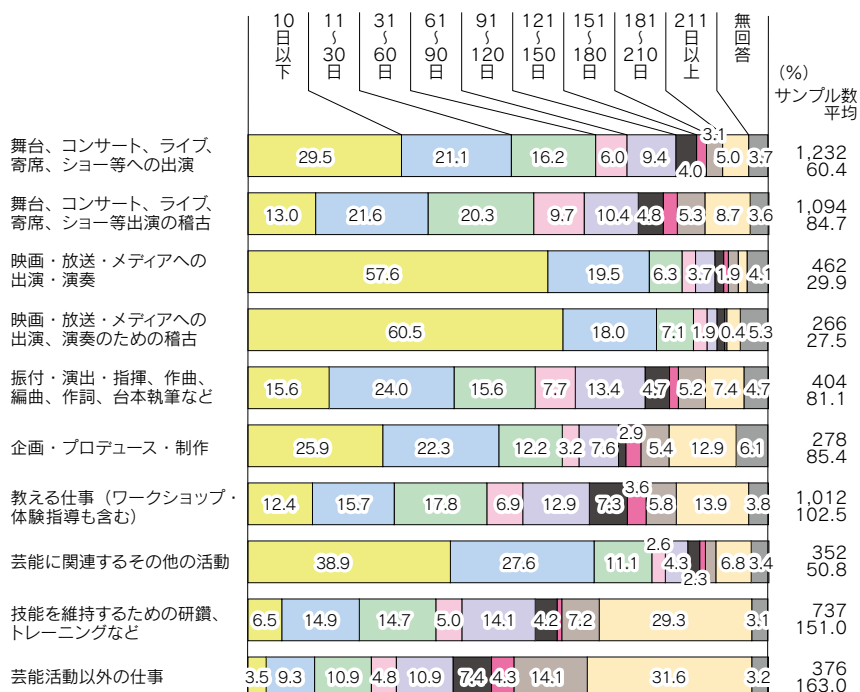
B-2 (b)

昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動にたずさわった人】

昨年1年間に費やした活動日数で、平均活動日数が最も多い活動は「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」で151.0日、最も少ない活動は「映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古」で27.5日です。一方、「芸能活動以外の仕事」は163.0日です。

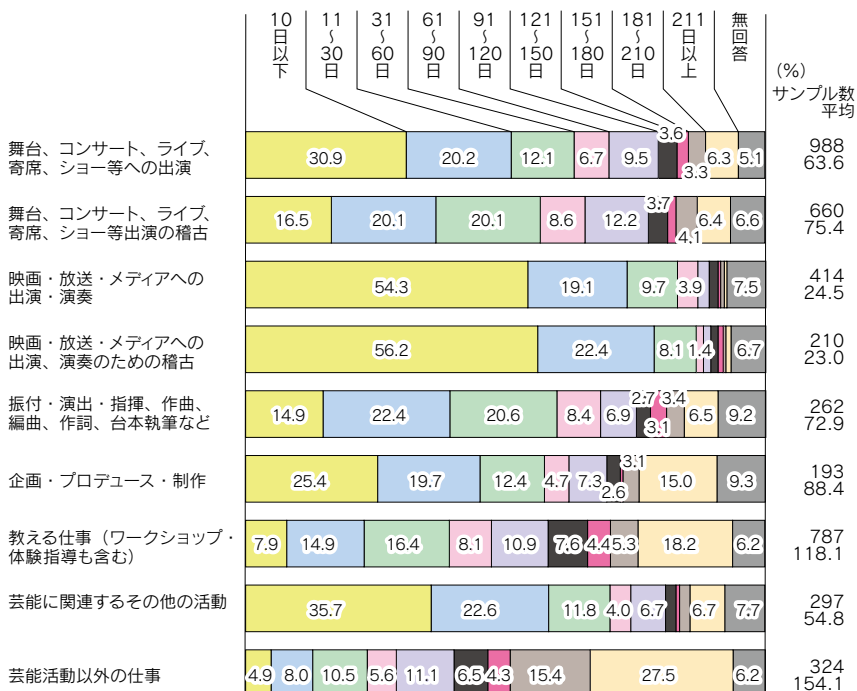
第8回調査と比べると、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古」「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」は平均活動日数が増え、逆に「教える仕事」は減っています。

問B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動に携わった人】



参考：第8回調査

問B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動に携わった人】

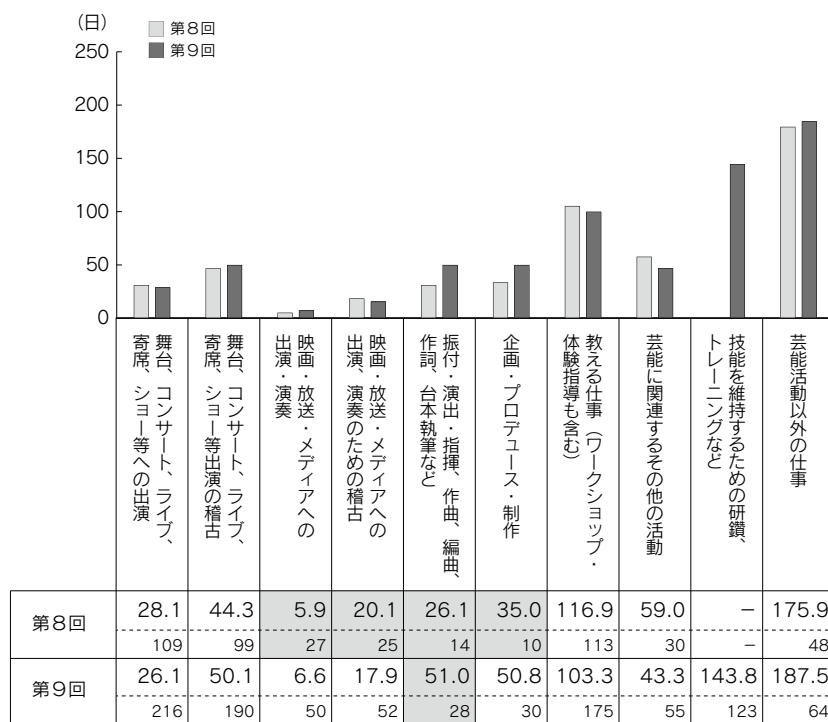


B-2 (b)

昨年1年間に費やした活動日数（ジャンル別）

【ベース：各活動にたずさわった人】

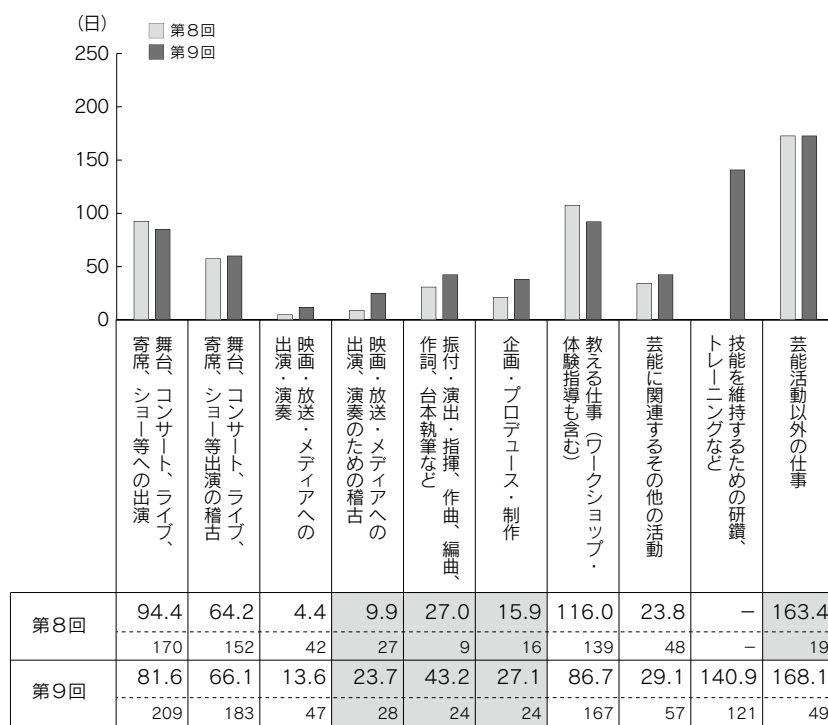
■ 邦楽



上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30s 未満で参考値扱いとする。

■ 伝統芸能

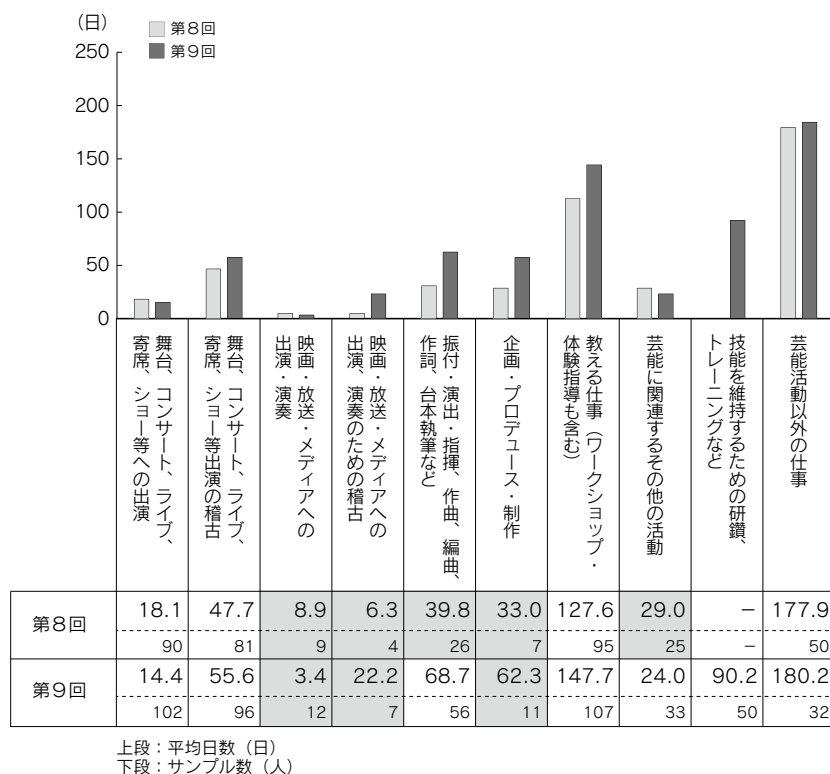


上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

【邦楽】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多い活動は「芸能活動以外の仕事」（187.5日）です。第8回調査結果と比べると、「企画・プロデュース・制作」の活動日数が増え、「教える仕事」が減っています。

【伝統演劇】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多い活動は「芸能活動以外の仕事」です（168.1日）。第8回調査結果と比べると、「伝統演劇」では、「映画・放送・メディアへの出演・演奏」が増えており、「舞台・コンサート、寄席・ショー、イベントなどへの出演」や「教える仕事」が減っています。

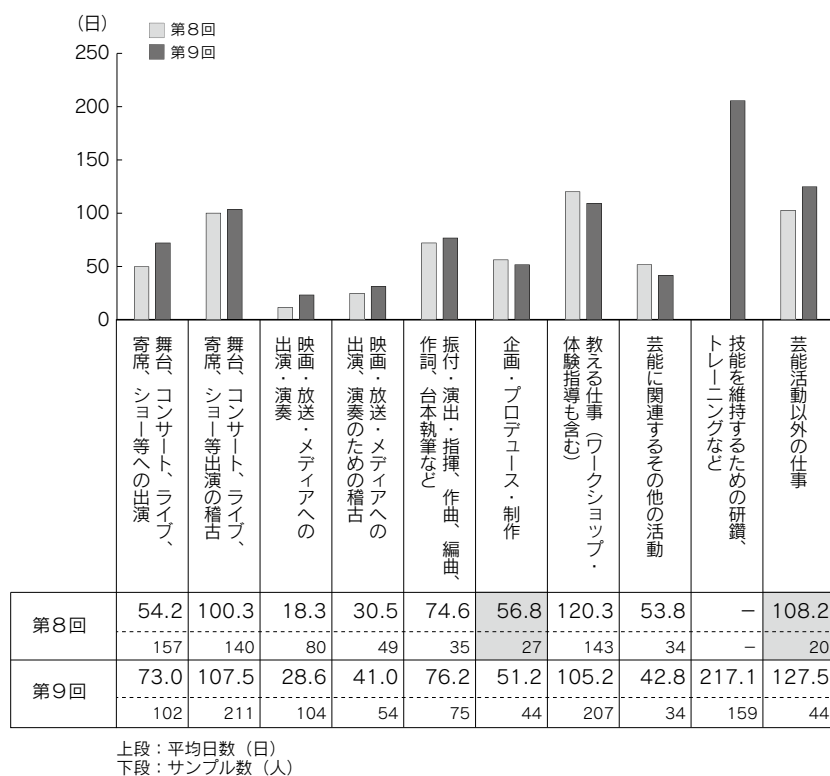
■ 邦舞



【邦舞】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは、「芸能活動以外の仕事」（180.2日）です。第8回調査結果と比べると、「邦舞」では、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古」「教える仕事」が増え、「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演」が減っています。

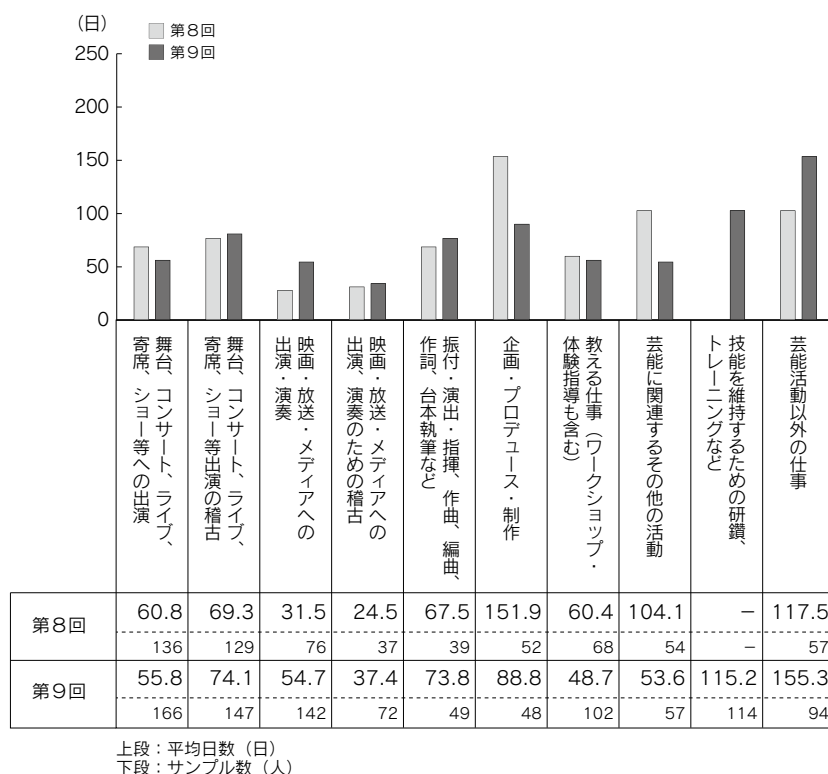
※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数30s未満で参考値扱いとする。

■ 洋楽



【洋楽】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」（217.1日）です。第8回調査結果と比べると「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」などが増え、「教える仕事」が減っています。

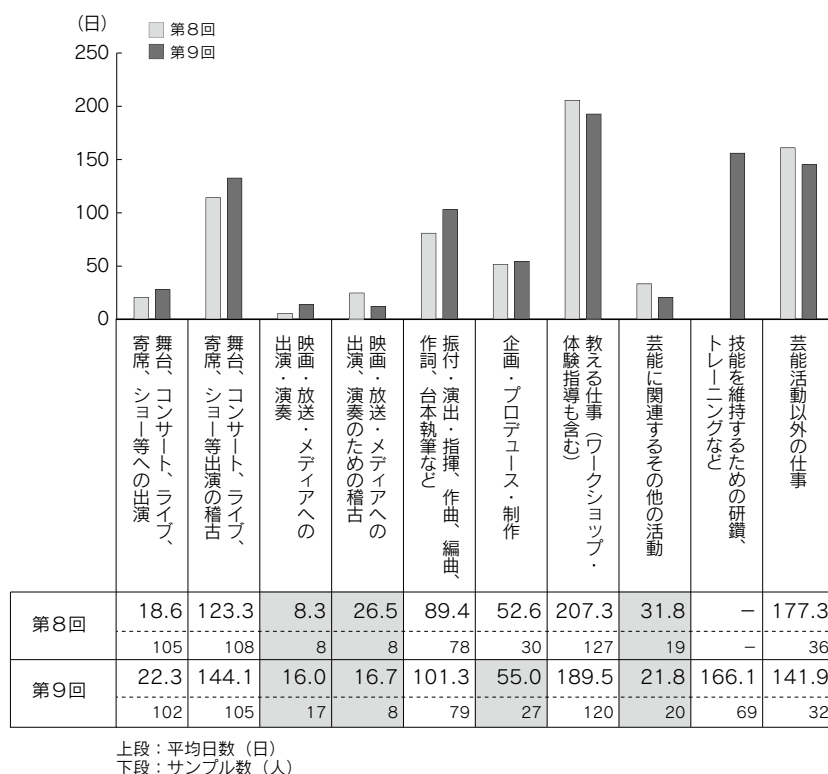
■ 現代演劇・メディア



【現代演劇・メディア】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは「芸能活動以外の仕事」（155.3日）です。第8回調査結果と比べると、「現代演劇」では「映画・放送・メディアへの出演、演奏」「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」が増え、「企画、プロデュース、制作」「教える仕事」で減っています。

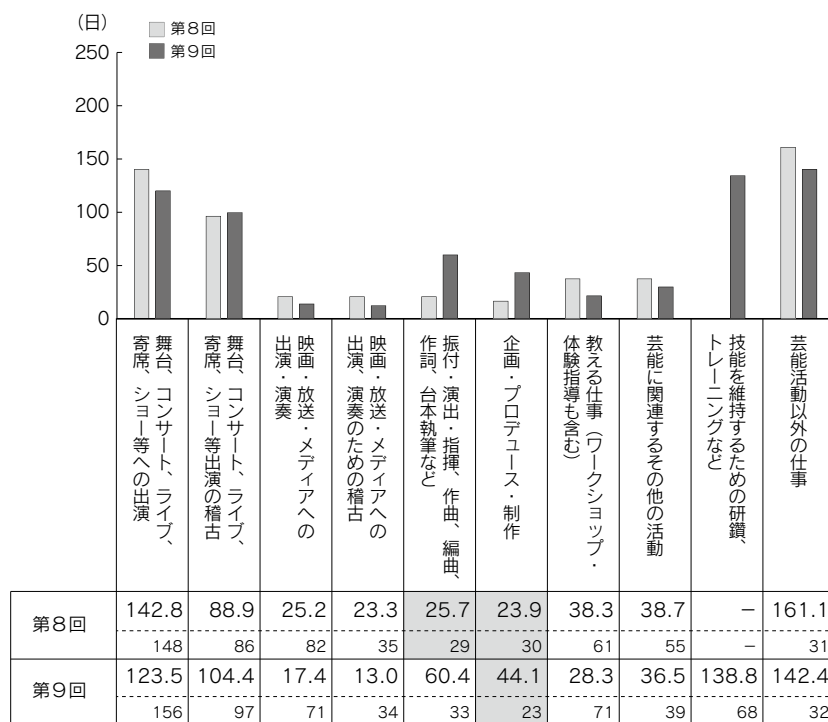
※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30s 未満で参考値扱いとする。

■ 洋舞



【洋舞】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは「教える仕事」（189.5日）です。第8回調査結果と比べると、「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演のための稽古」「振り付け、演出、指揮、作曲、編曲、作詞、台本書き」が増え、「教える仕事」で減っています。

■ 演芸

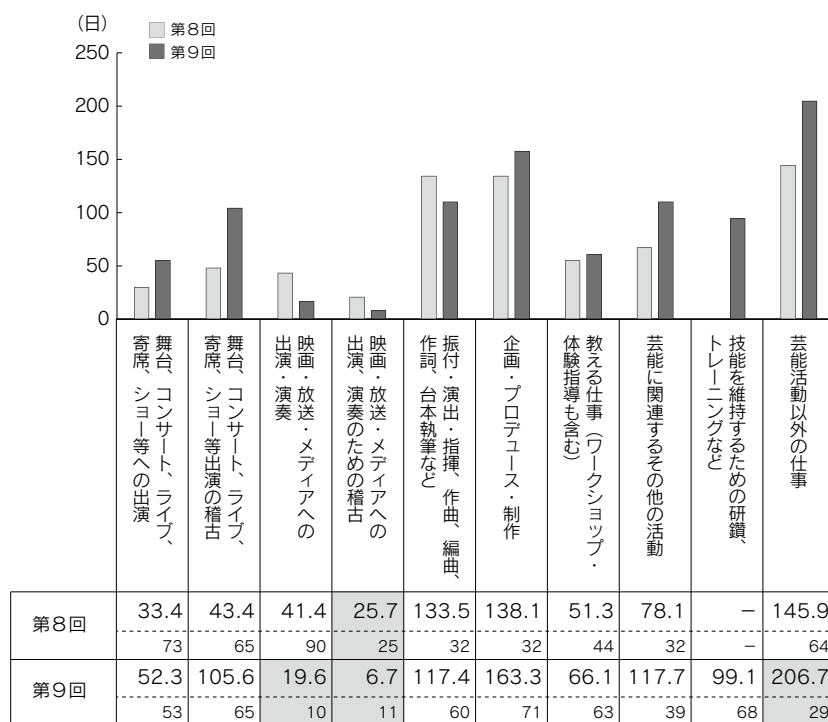


上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

【演芸】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは、「芸能活動以外の仕事」です（142.4日）。第8回調査結果と比べると、「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」「教える仕事」が減っています。

※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30s 未満で参考値扱いとする。

■ その他※



上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

【その他】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは、「芸能活動以外の仕事」です（206.7日）。

※第9回のこのカテゴリーは、「演出・制作等」の人々が主で第8回の対象とは異なるので比較は適切ではない。

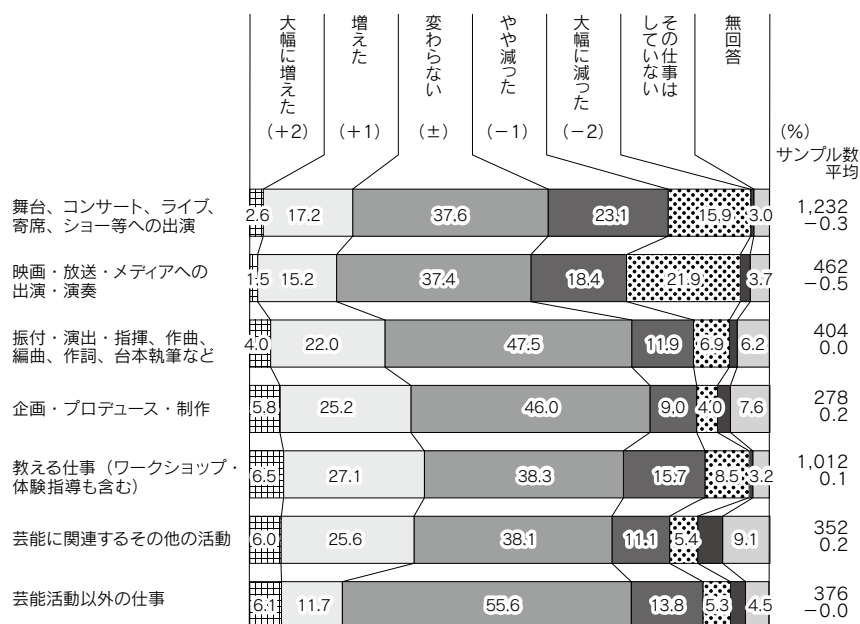
B-3

仕事の機会について2～3年前との比較

【ベース：各活動にたずさわった人】

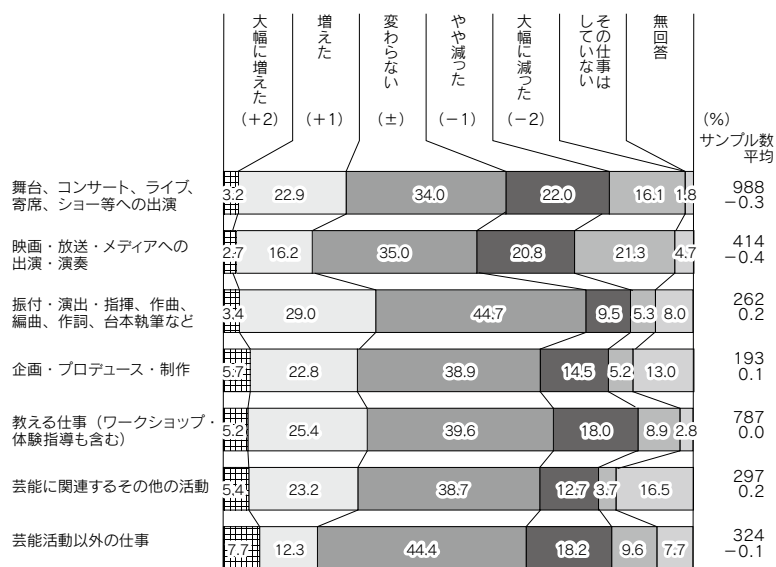
2～3年前と比べた昨年1年間の仕事の機会について、いずれの仕事でも「変わらない」と回答した人が最も割合が多くなっていますが、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」では「大幅に減った／やや減った」を合わせた割合が4割前後を占めています。「大幅に増えた／増えた」を合わせた割合が最も高いのは「教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）」（33.6%）です。

問B-3 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事を昨年1年間行った人】



< 参考 > 第8回調査 調査結果

問B-3 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事を昨年1年間行った人】



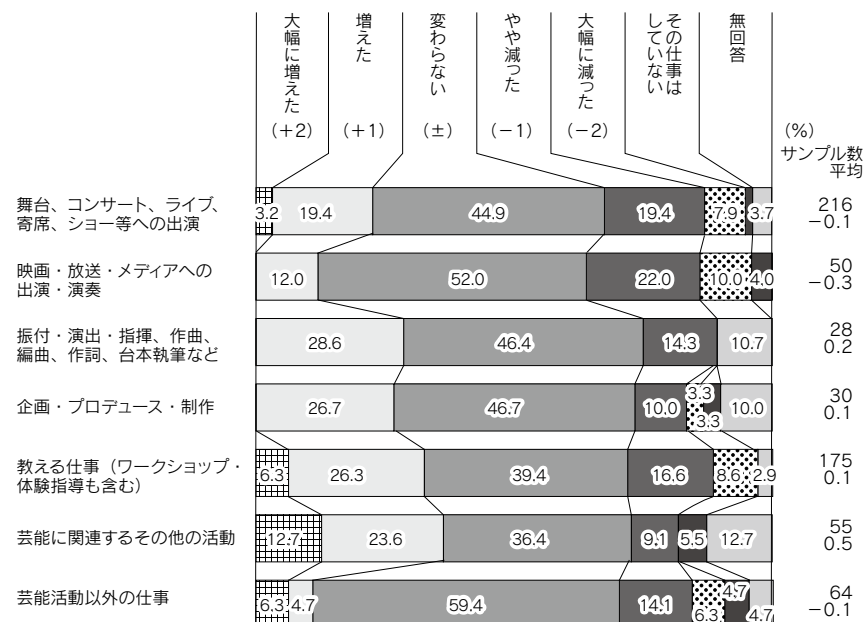
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

B-3

仕事の機会について2～3年前との比較(ジャンル別)

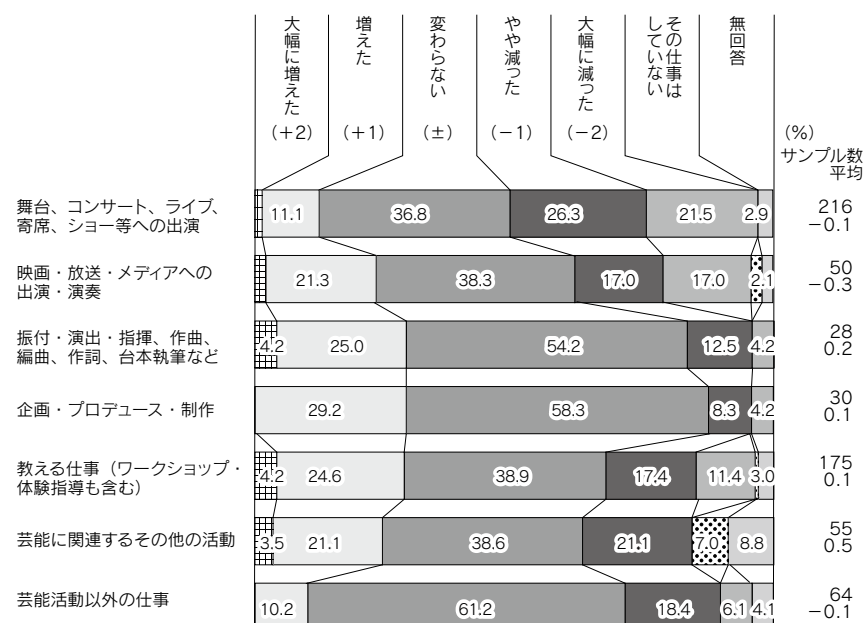
【ベース:各活動にたずさわった人】

■ 邦楽



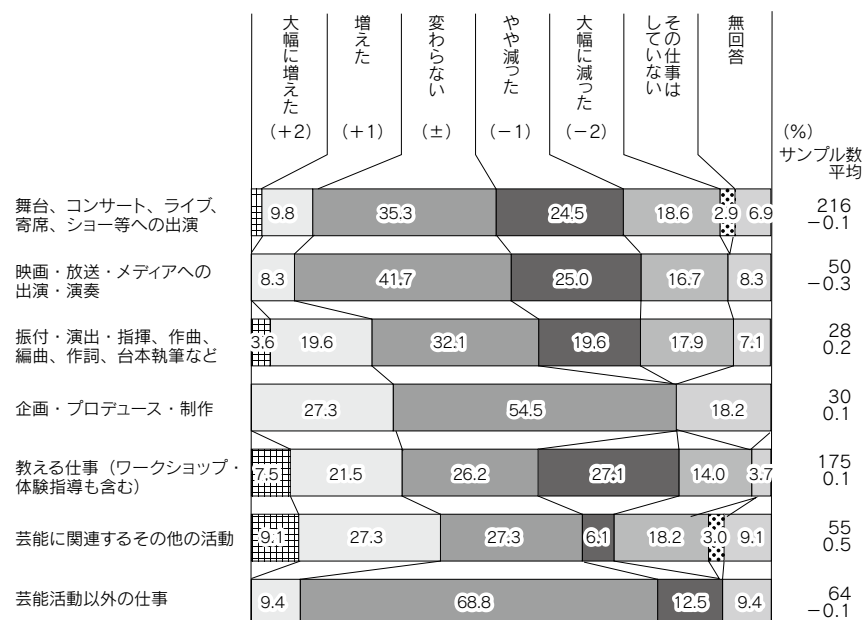
【邦楽】2～3年前と比べた昨年1年間の活動の機会をみると、「教える仕事」は、「大幅に増えた／増えた」を合わせると29.6%で、「やや減った／大幅に減った」の合計25.2%を上回っています。「舞台への出演」では、「大幅に増えた／増えた」が22.6%であるのに対し、「やや減った／大幅に減った」の合計は27.3%です。「芸能に関するその他の仕事」で「大幅に増えた」の割合が12.7%で高く、「増えた」と合わせると36.3%となっています。

■ 伝統演劇



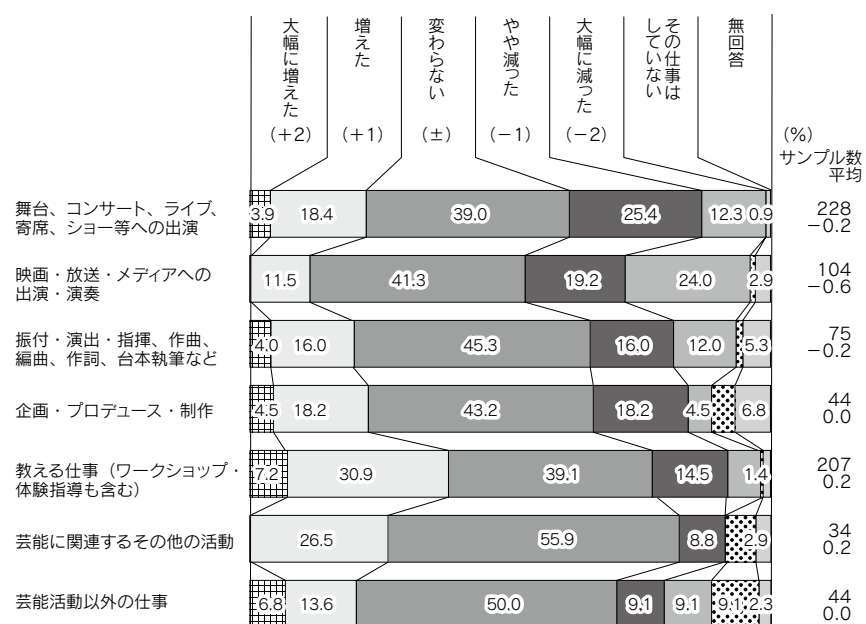
【伝統演劇】「舞台への出演」で「大幅に減った」の割合が21.5%と高く、「やや減った」と合わせると47.8%にのびります。「教える仕事」では、「減った」と感じている人の割合と「増えた」と感じている人の割合の合計は、いずれも28.8%です。

邦舞



【邦舞】「舞台への出演」は、「やや減った／大幅に減った」の合計は43.1%と、減少傾向を感じている人の割合が高いです。「教える仕事」で「大幅に増えた／増えた」が29.0%であるのに対し、「やや減った／大幅に減った」の合計が41.1%で、減ったと感じている人が多いです。

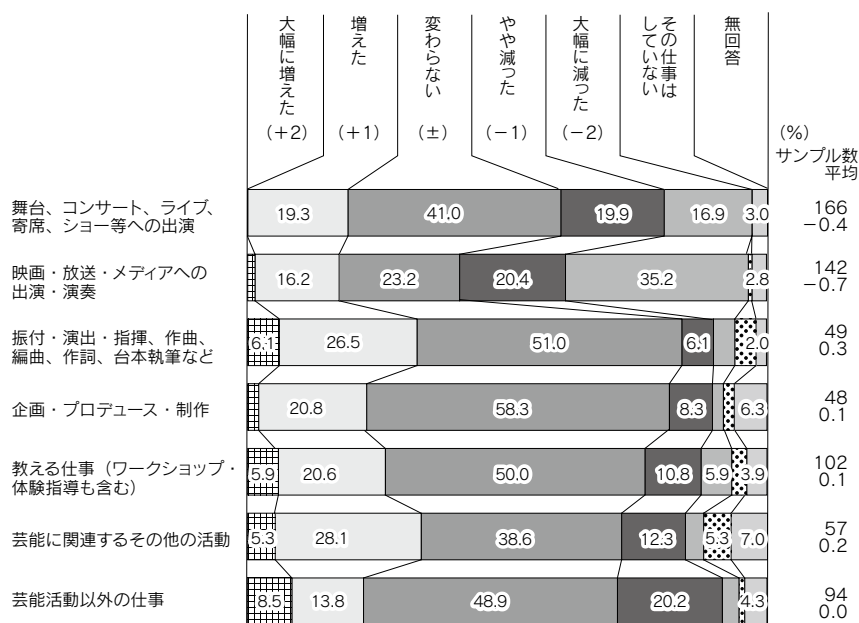
洋楽



【洋楽】「映画・放送・メディアへの出演・演奏」で「大幅に減った」の割合が24.0%で高く、「大幅に増えた／増えた」は11.5%と低い割合となっています。「舞台、コンサート、ライブ等への出演」では「やや減った／大幅に減った」の合計は37.7%で、「変わらない」(39.0%)の方が上回っています。「教える仕事」は、「大幅に増えた／増えた」の合計が38.1%です。

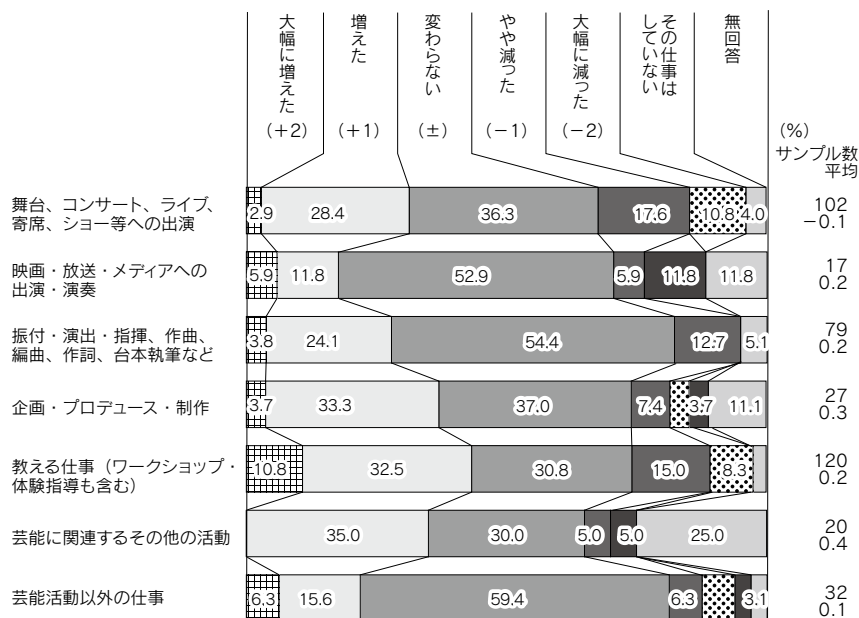
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 現代演劇・メディア



【現代演劇】「映画・放送・メディアへの出演、演奏」で「大幅に減った」が35.2%で他の仕事に比べて相当高い割合となっています。「舞台への出演」は「変わらない」が41.0%ですが、「やや減った／大幅に減った」の合計が36.8%で、「減った」と感じている人の方が増えたという人より多いです。

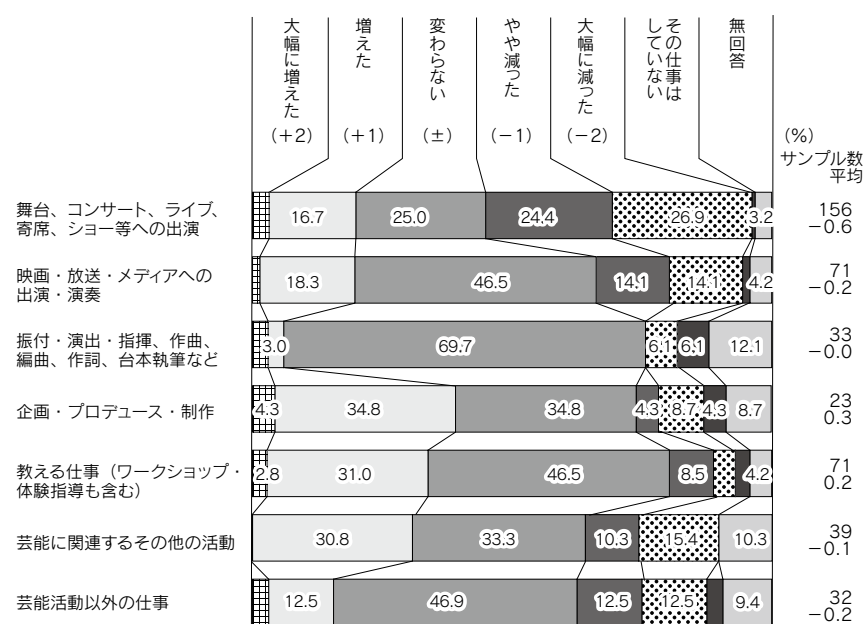
■ 洋舞



【洋舞】「舞台への出演」は「大幅に増えた／増えた」の合計が31.4%、「変わらない」が36.3%、「やや減った／大幅に減った」の合計が28.4%です。「教える仕事」は「増えた」が32.5%で「大幅に増えた」との合計は43.3%。「変わらない」の30.8%を上回っており増加感をもっている人の割合が高いです。「振付・演出など」と「芸能活動以外の仕事」で「変わらない」の割合がそれぞれ54.4%、59.4%で高くなっています。

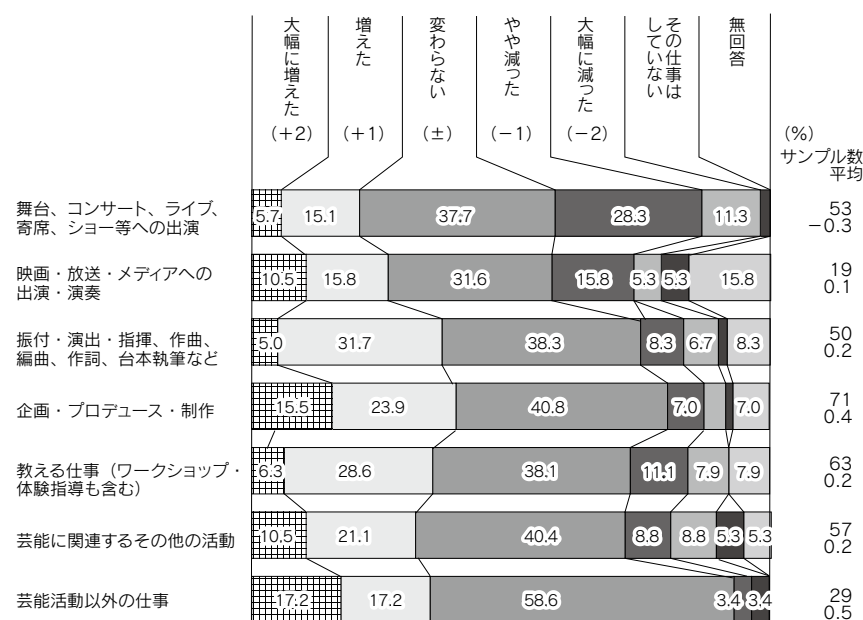
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 演芸



【演芸】「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」で「やや減った」(24.4%)と「大幅に減った」(26.9%)の割合が高く、両者を合わせると51.3%です。「教える仕事」では「変わらない」が46.5%ですが、次いで「増えた」の割合が31.0%となっています。

■ その他（演出・制作等）



【その他】「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」で「やや減った」が28.3%、「大幅に減った」が11.3%と、減ったと感じている人の割合が高くなっています。

※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

B-4

昨年1年間に行った芸能活動以外の仕事(MA)

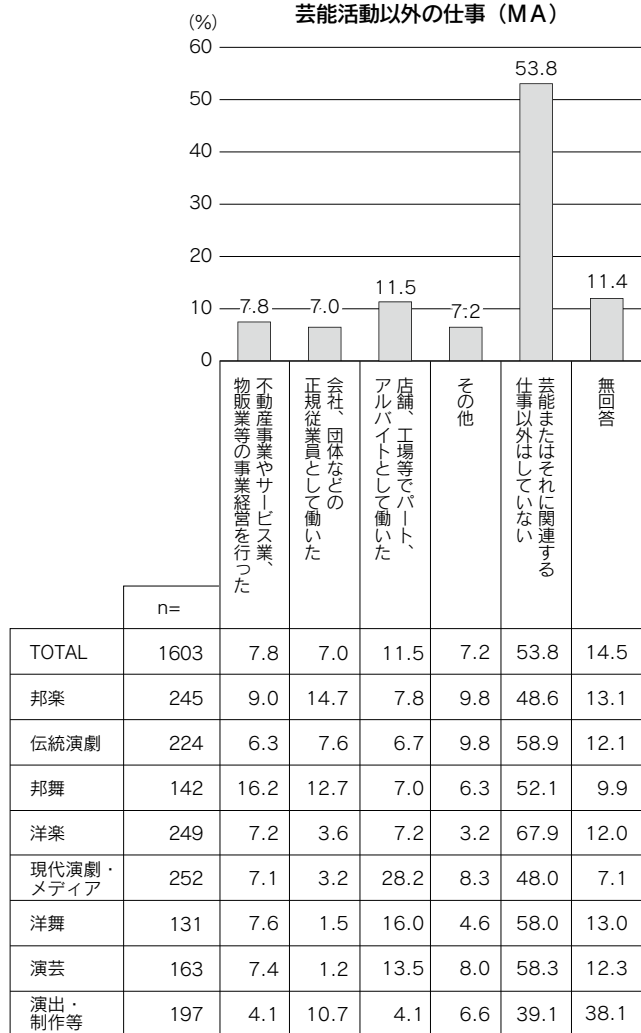
昨年1年間に行なった芸能以外の仕事を訊いたところ、「芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない」とする回答の割合が53.8%と過半数を超えています。無回答が14.5%ですので、残り31.7%の人は芸能活動以外の仕事をしたことになります。

ジャンル別でみると、その割合は「洋楽」が67.9%で特に高くなっています。

具体的な芸能活動以外の仕事では、「店舗、工場等でパート、アルバイトとして働いた」の割合が11.5%で、特に「現代演劇」で28.2%と高いのが目立ちます。

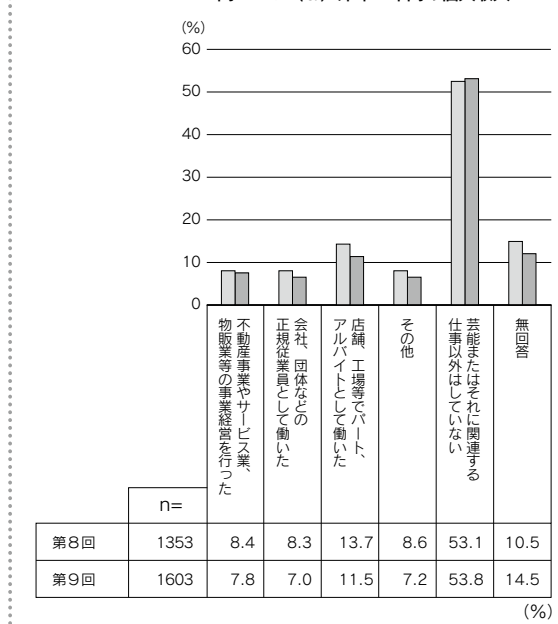
第8回調査結果と比較をすると、「芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない」の割合はほとんど変わっていません。

問B-4 昨年1年間に行った
芸能活動以外の仕事 (MA)



(%)

【参考】第8回 調査結果との比較
問B-7 (a) 昨年1年間の個人収入



(%)

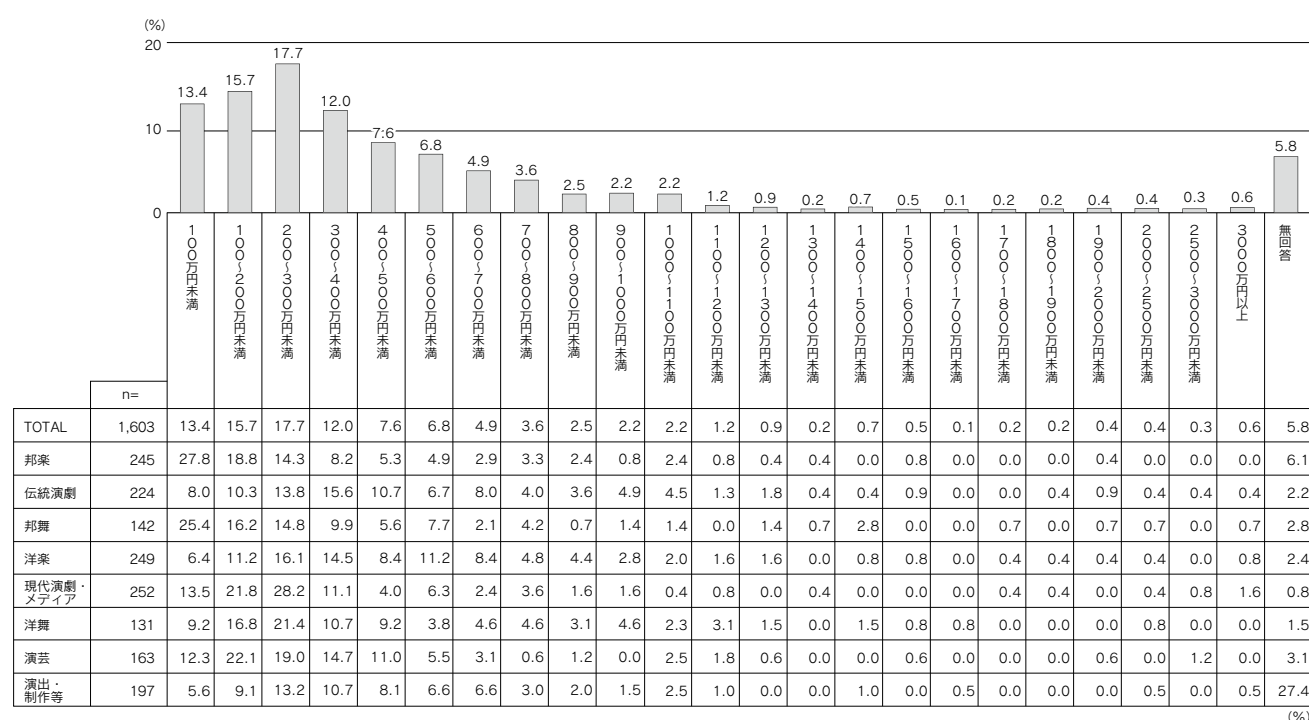
B-7 (a)

昨年1年間の個人収入(ジャンル別)

芸能実演家の昨年1年間の個人収入は、「300万円未満」までの所得層で全体の5割程度を占めています。特に「200～300万円未満」(17.7%)、「100～200万円未満」(15.7%)の割合が高くなっています。

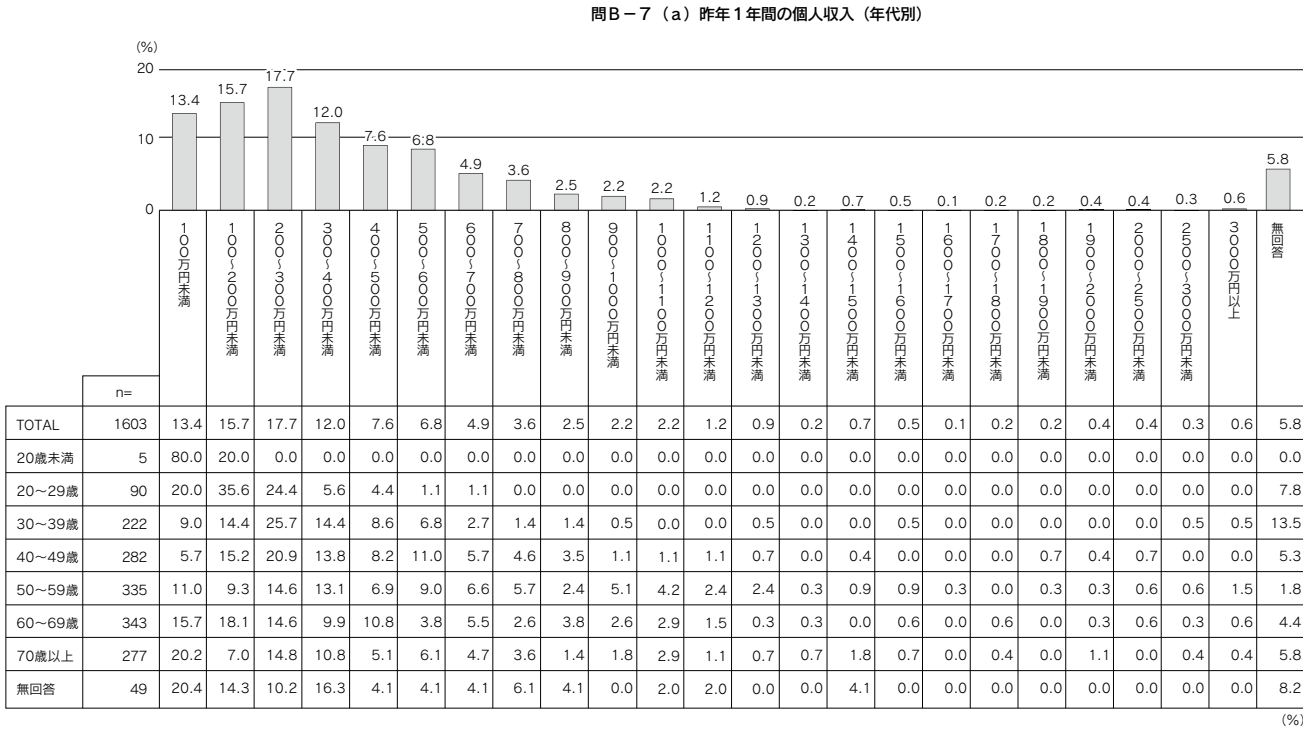
ジャンル別にみると、「100万円未満」の所得層では「邦楽」(27.8%)、「邦舞」(25.4%)の割合が高く、「100～200万円未満」の所得層では「演芸」(22.1%)、「現代演劇・メディア」(21.8%)が高いです。「200～300万円未満」でも「現代演劇・メディア」(28.2%)の割合が高くなっています。

問B-7 (a) 昨年1年間の個人収入(ジャンル別)



B-7 (a) 昨年1年間の個人収入(年代別)

年代別にみると、20～29歳は「100～200万円未満」で、30～39歳は「200～300万円未満」で、40～49歳は「500～600万円未満」でそれぞれ、他の年齢層よりも割合が高くなっています。

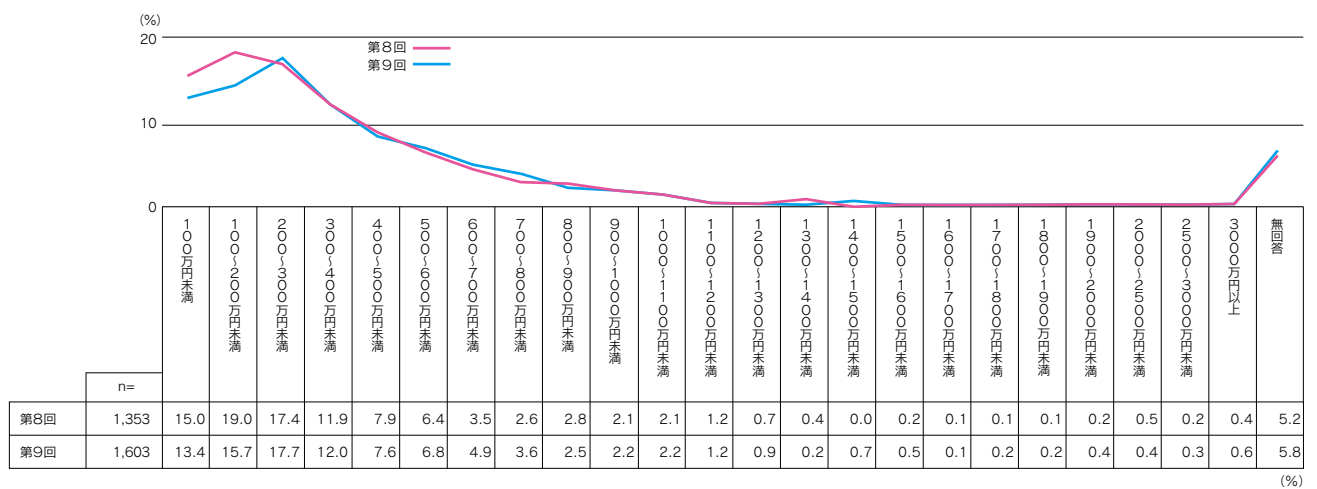


※ サンプル数 30s 未満の年代（20 歳未満）は参考値扱いとする。

B-7 (a)
昨年1年間の個人収入(第8回調査との比較)

「100万円未満」(第8回:15.0%、第9回:13.4%)、「100～200万円未満」(第8回:19.0%、第9回:15.7%)といった低所得層の割合が、第8回調査に比べて第9回調査で低くなっています。それよりも高い所得層では、第8回調査との割合の差はほとんど見られません。

問B-7 (a) 昨年1年間の個人収入 (年代別)



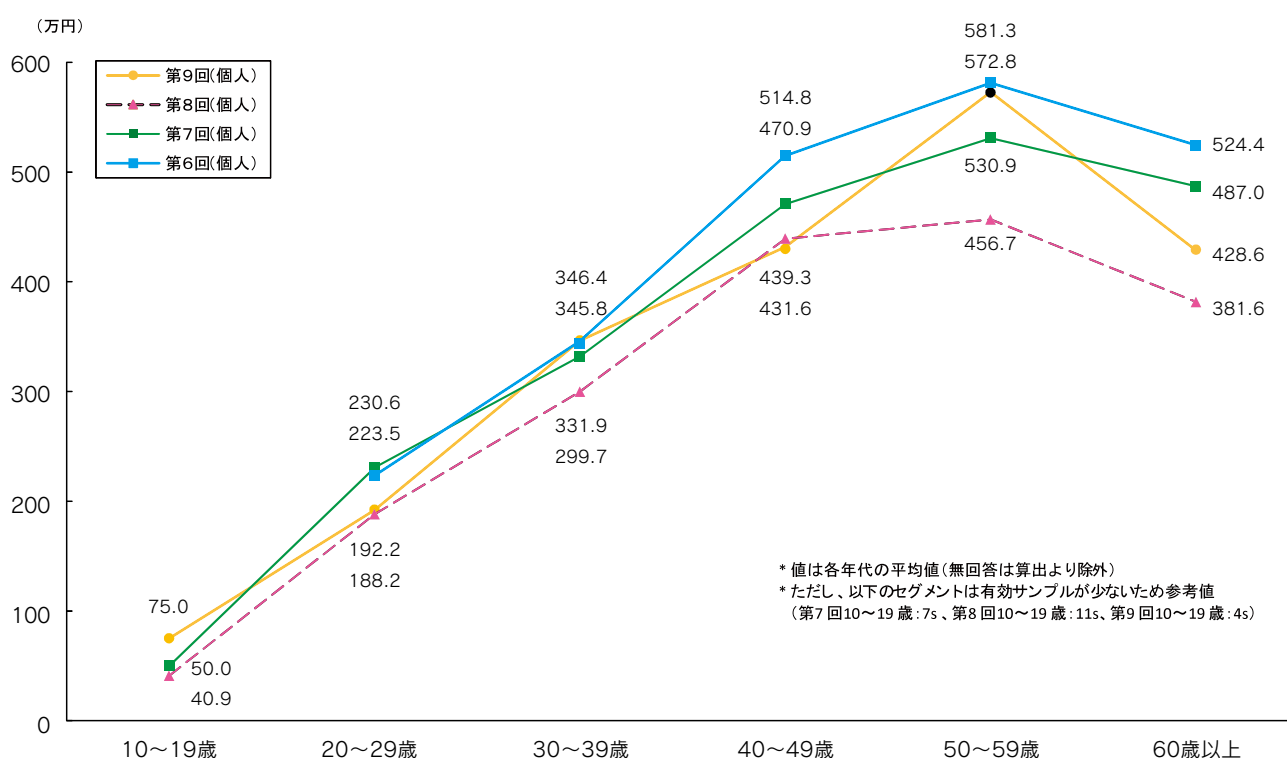
B-7 (a) 昨年1年間の個人収入

昨年1年間の個人収入を過去調査と比較すると、今回の第9回調査では「30～39歳」で、過去の平均収入を上回っていますが、「40～49歳」では逆に最も低くなっています。「50

～59歳」の平均収入がほかの年代の収入を上回るという傾向は過去3回の調査と同じですが、第9回の「50～59歳」の平均収入が4回の調査のうち第一位の第6回調査の値に近

いのに対し、「60～69歳」の平均収入の値の減少が大きく落ち込んでいるのが目立ちます。

〈参考〉過去調査との比較



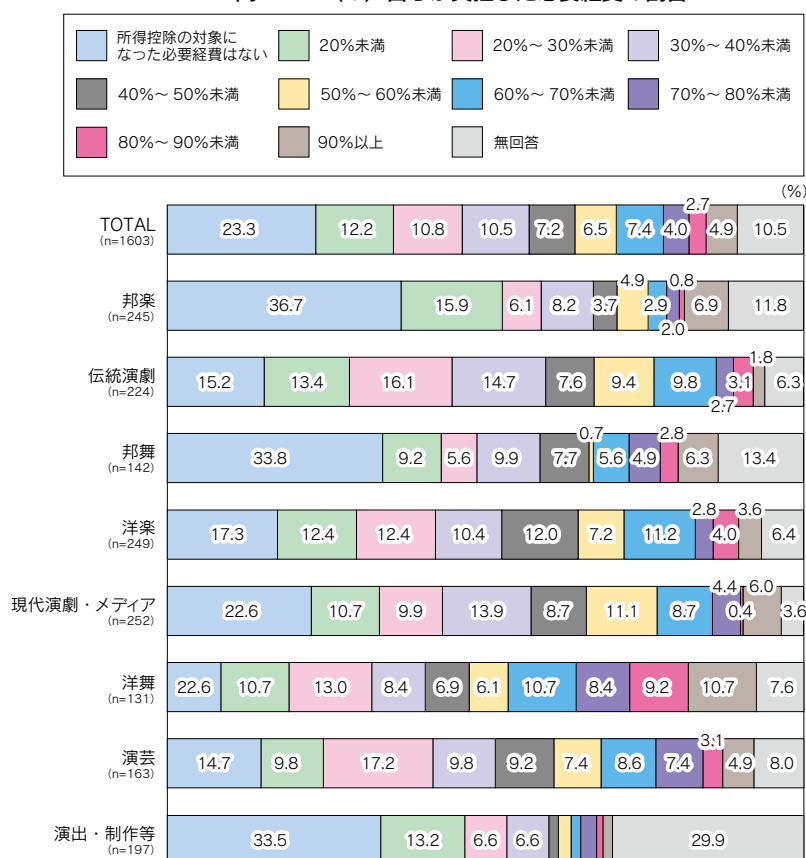
B-7 (b)

自らが負担した必要経費の割合

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費について、「給与所得だけで確定申告していないので、所得控除の対象になった必要経費はない」とする回答が23.3%を占めています。必要経費を負担している場合、総収入に占める割合は、「20%未満」が12.2%、「20%～30%未満」が10.8%、「30%～40%未満」が10.5%となっています。

ジャンル別にみると、「所得控除の対象となった必要経費はない」という回答が多かったのが「邦楽」(36.7%)、「邦舞」(33.8%)、「その他(演出・制作等)」(33.5%)のジャンルです。「洋舞」で「70%～80%未満」「80%～90%未満」「90%以上」の割合が他のジャンルに比べて高くなっています。

問B-7 (b) 自らが負担した必要経費の割合

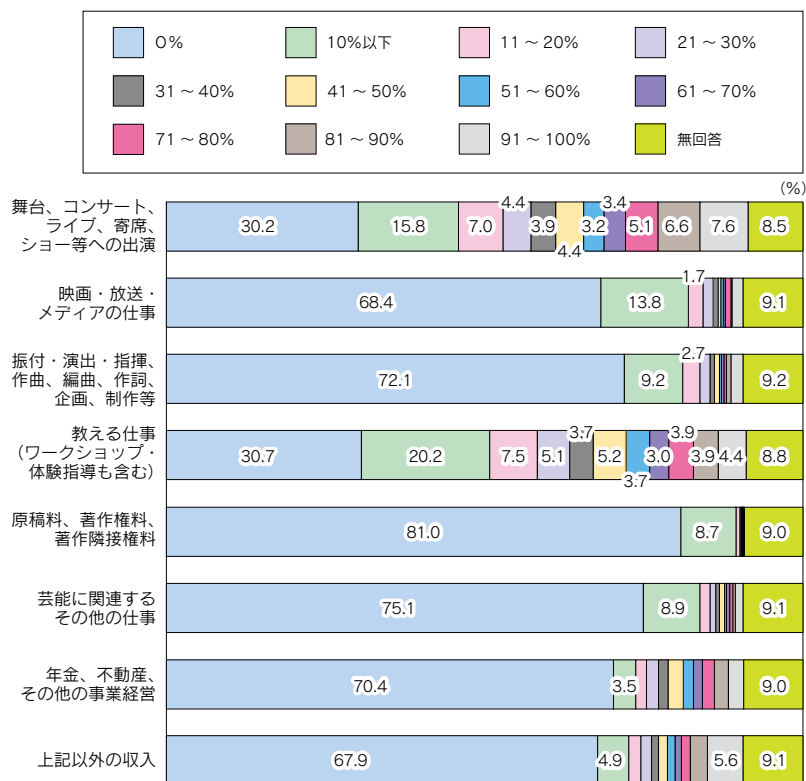


B-8

昨年1年間の活動別収入の割合

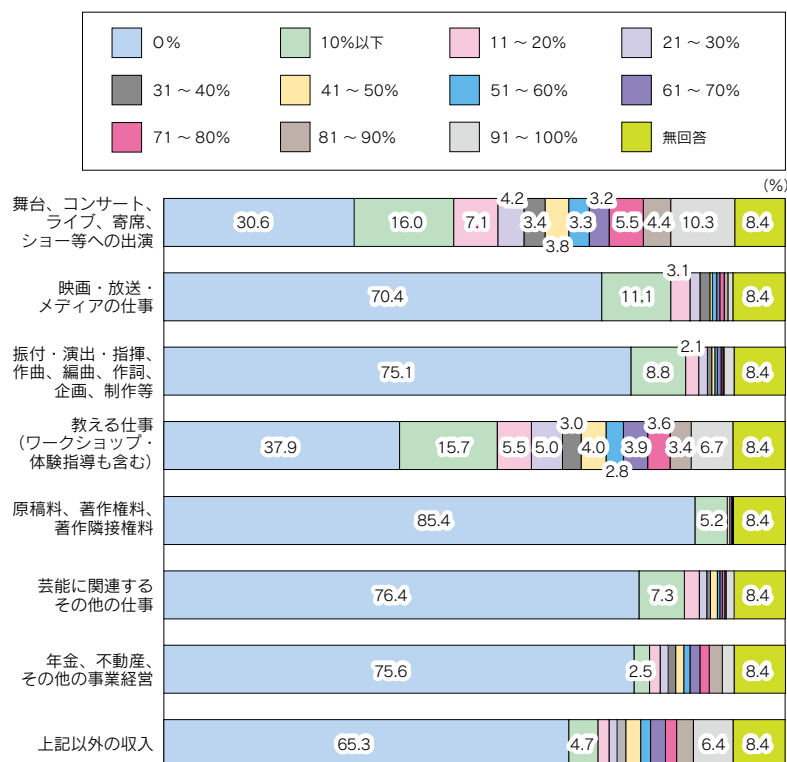
昨年1年間の活動別収入の割合の平均は、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」が31.6%で最も高く、次いで「教える仕事」が25.5%となっています。これらの割合は、第8回調査とほとんど変わっていません。

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合



【参考】第8回 調査結果

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合



B-8

昨年1年間の活動別収入の割合 (ジャンル別:邦楽／伝統演劇／邦舞／洋楽)

ジャンル別に昨年1年間の活動別収入の割合をみると、「教える仕事」の割合が高いのは「洋舞」(56.1%)、「邦舞」(50.1%)、「邦楽」(33.9%)です。

「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」の割合が高いジャンルは、「演芸」が67.4%と最も高く、次いで「洋楽」(48.7%)、「伝統演劇」(43.6%)、「現代演劇・メディア」(27.1%)です。「伝統演劇」「洋楽」は、「教える仕事」の割合も比較的多く、「洋楽」は29.9%、「伝統演劇」は24.0%を占めています。

「映画・放送・メディアの仕事」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で24.1%です。

「邦楽」では、「年金、不動産、その他の事業経営」からの収入が22.6%と、8ジャンルのうちで最も高い割合で、「邦舞」も21.2%と、他ジャンルより高い割合です。

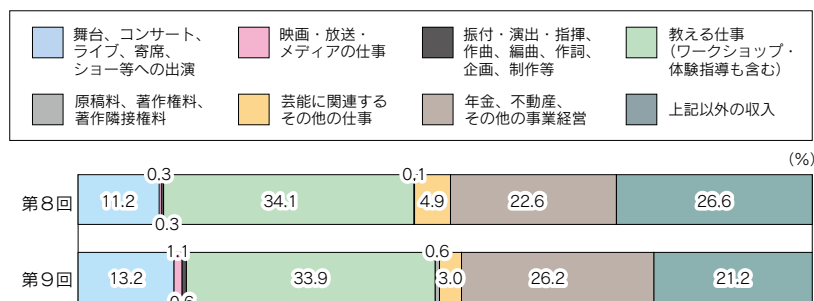
第8回調査と比較すると、「現代演劇」では、「映画・放送・メディアの仕事」の割合が13.0%から24.1%に増加し、「教える仕事」で低くなっています。これは調査対象の変更が影響していることが考えられます。

「洋舞」では「舞台等への出演」が14.3%から23.2%に増加しています。

「邦舞」で「教える仕事」の割合が41.3%から50.1%に上がっています。

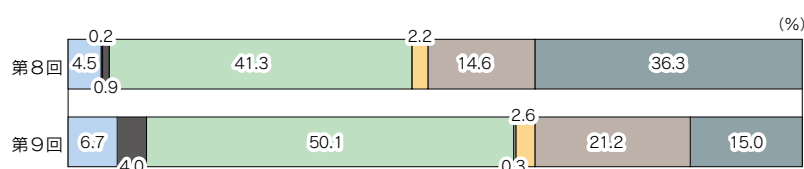
■ 邦楽 (第8回:n=154、第9回:n=245)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 邦楽



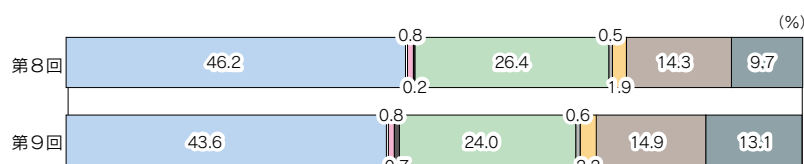
■ 邦舞 (第8回:n=137、第9回:n=142)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 邦舞



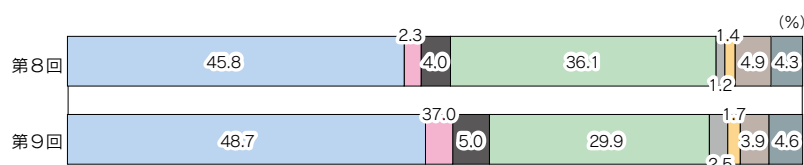
■ 伝統演劇 (第8回:n=200、第9回:n=224)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 伝統演劇



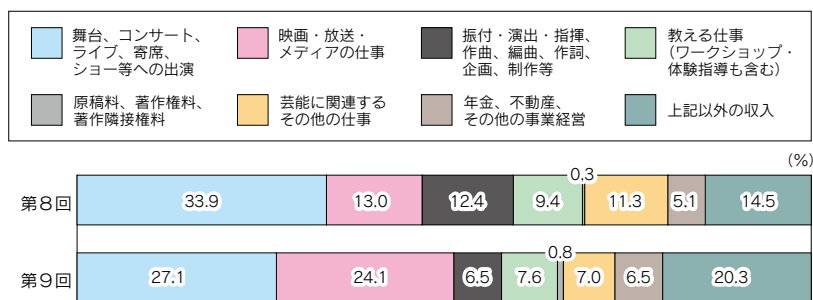
■ 洋楽 (第8回:n=176、第9回:n=249)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 洋楽



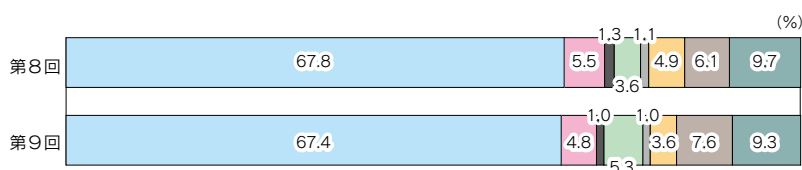
■ 現代演劇（第8回：n=205、第9回：n=252）

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 現代演劇



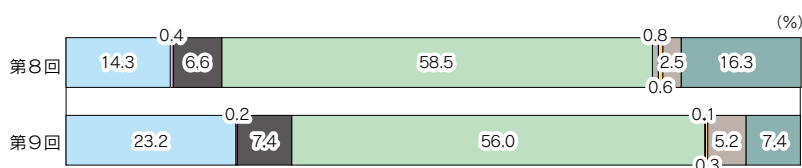
■ 演芸（第8回：n=162、第9回：n=163）

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 演芸



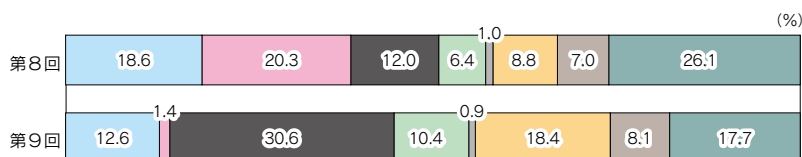
■ 洋舞（第8回：n=144、第9回：n=134）

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 洋舞



■ その他（第8回：n=175、第9回：n=197）※

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 その他



※第8回と第9回のこのカテゴリー対象が異なるので比較は適切ではない。

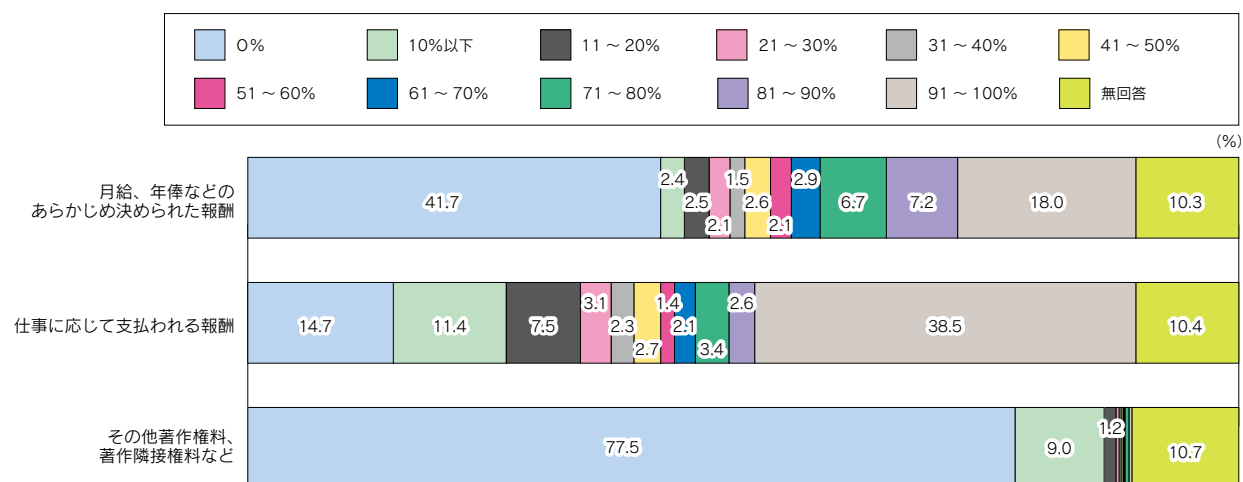
B-9

昨年1年間の収入形式

芸能実演家の昨年1年間の収入形式は、「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俸以外）」が最も高い割合となっており、平均で56.9%です。一方、「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」は40.1%で、月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬を得ていない人（「0%」の人）が41.7%を占めています。

報酬を「その他著作権料、著作隣接権料等」から得ている割合は少なく、そのような報酬を全く得ていない人が77.5%となっています。

問B-9 収入形式の割合 月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬



B-9

昨年1年間の収入形式(ジャンル別)

ジャンル別に昨年1年間の収入形式の割合をみると、「邦楽」「邦舞」「洋楽」は「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」と「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俵以外）」の割合がほぼ同率となっています。

「伝統演劇」「現代演劇」「洋舞」「演芸」は「月給、年俵などのあらかじめ決

め決められた報酬」に比べて「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俵以外）」の割合が高く、特に「演芸」では87.8%を占めています。

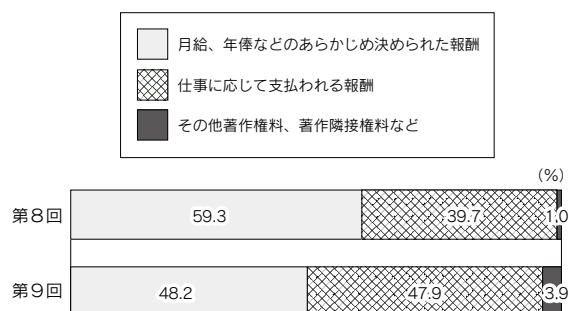
第8回調査と比較すると、「現代演劇」は「仕事に応じて支払われる報酬」が54.7%から69.6%に増えています。「洋舞」「邦楽」「邦舞」も、「月給、年俵などのあらかじめ決

められた報酬」の割合が低くなり、「仕事に応じて支払われる報酬」の割合が増加しています。

「洋楽」「伝統演劇」では逆に「月給、年俵などのあらかじめ決められた報酬」の割合の方が高くなっています。

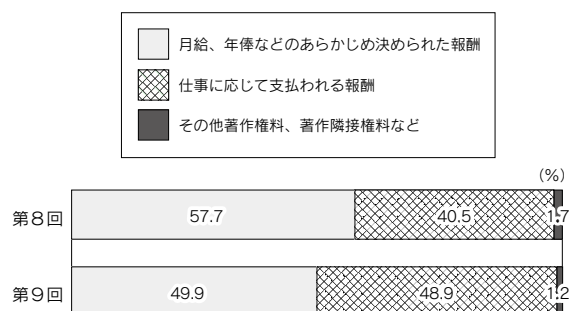
■ 邦楽（第8回：n=154、第9回：n=245）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）邦楽



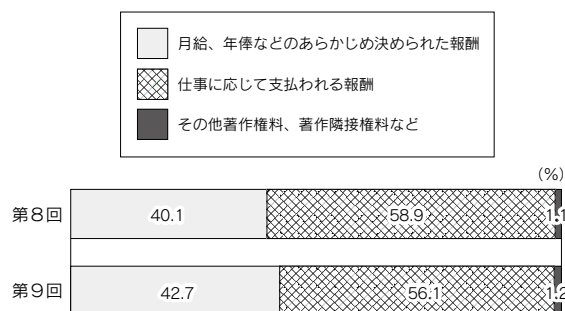
■ 邦舞（第8回：n=137、第9回：n=142）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）邦舞

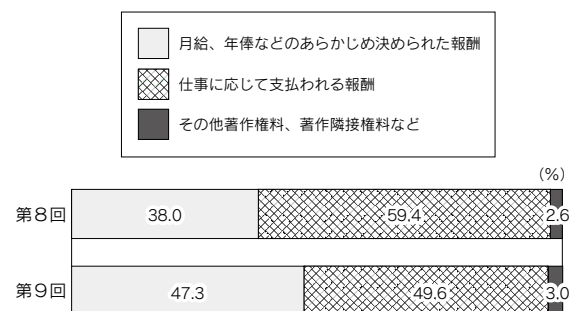


■ 伝統演劇（第8回：n=200、第9回：n=224） ■ 洋楽（第8回：n=176、第9回：n=249）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）伝統演劇

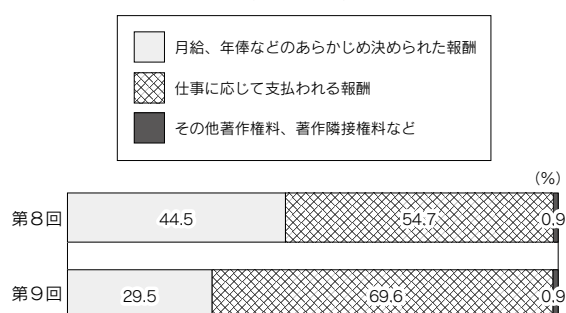


問B-9 収入形式の割合（平均値表）洋楽

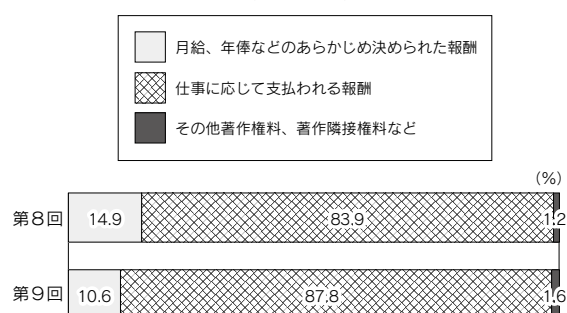


■ 現代演劇（第8回：n=205、第9回：n=252） ■ 演芸（第8回：n=162、第9回：n=163）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）現代演劇

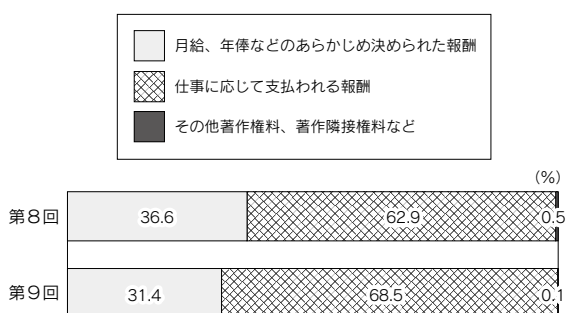


問B-9 収入形式の割合（平均値表）演芸



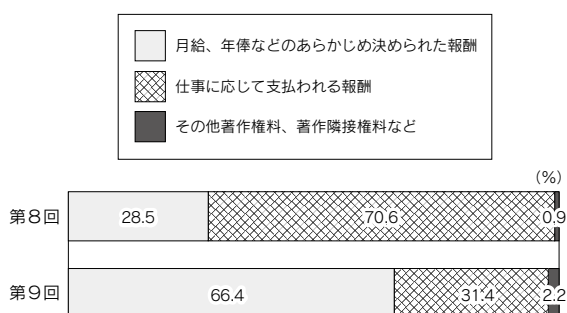
■ 洋舞（第8回：n=144、第9回：n=134）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）洋舞



■ その他（第8回：n=175、第9回：n=197）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）その他



※第8回と第9回のこのカテゴリー対象が異なるので比較は適切ではない。

C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)

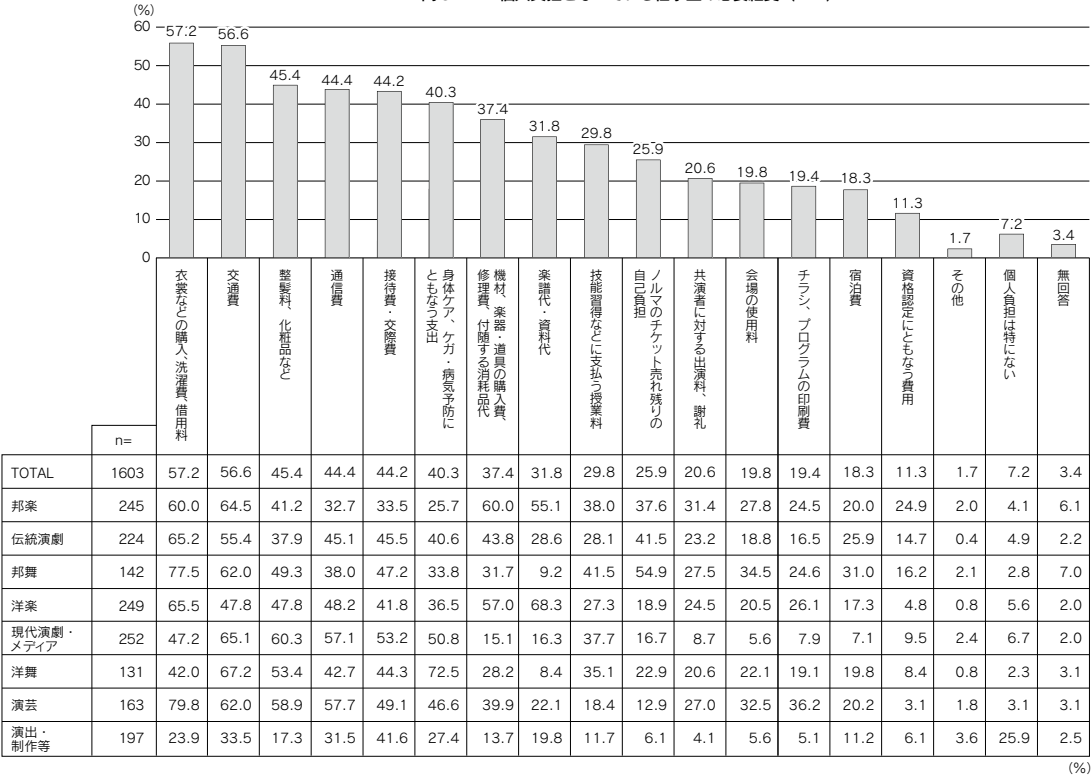
芸能実演家が仕事をするうえで個人負担となっている経費は、「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」が57.2%で最も高く、それに「交通費」(56.6%)、「整髪料、化粧品など」(45.4%)が続いています。

ジャンルによって、負担の大きい費用に特徴があります。「楽譜代・資料代」は「洋楽」が68.3%と最も高く、次いで「邦楽」も55.1%ですが、「邦楽」は「機材、楽器・道具

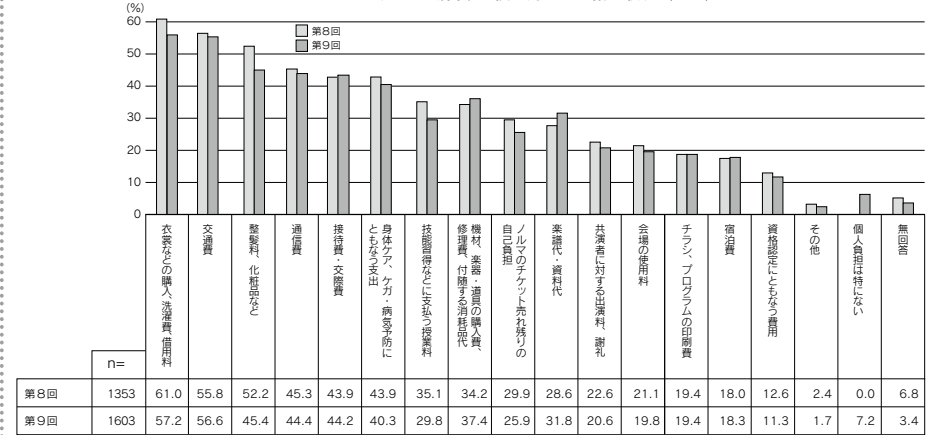
の購入費、修理費、付随する消耗品代」も60.0%と他のジャンルに比べて高い割合です。「身体ケア、けが、病気予防に伴う支出」が多いのは「洋舞」で72.5%と突出しており、次いで「現代演劇・メディア」の50.8%です。「ノルマのチケットの売れ残り自己負担」が多いのは「邦舞」(54.9%)で、「伝統演劇」(41.5%)、「邦楽」(37.6%)、「洋舞」(22.9%)と続きます。「共演者に対する出演料、

謝礼」で高いのは「邦楽」(31.4%)、「邦舞」(27.5%)、「演芸」(27.0%)です。「チラシ、プログラムの印刷費」で多いのが「演芸」(36.2%)で、「洋楽」「邦舞」「邦楽」も比較的高いです。一方、集団で創造する「現代演劇」では、「チラシ、プログラムの印刷費」「共演者に対する出演料、謝礼」などが他ジャンルより低くなっています。

問C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)



【参考】第8回 調査結果との比較
万一の場合や老後に対するの備え状況 (MA)



C-2

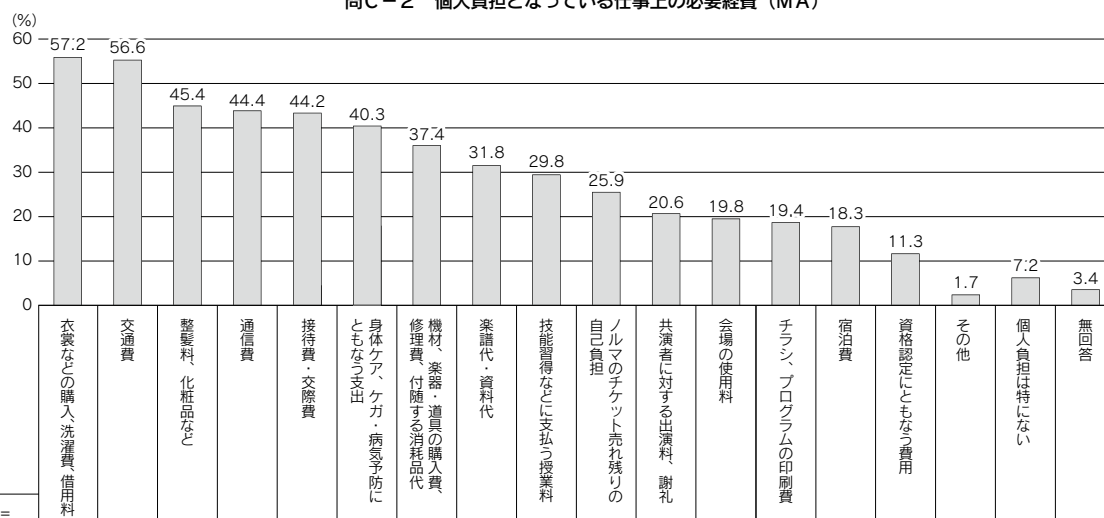
個人負担となっている仕事上の必要経費(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に、個人負担となっている仕事上の必要経費をみると、「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」は、「その他の舞踊」(88.9%)、「落語」(80.8%)、「ソロ(演奏)」(78.8%)などで高くなっています。「交通費」で高いのは、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」(91.9%)、「小劇場系演劇」(90.3%)です。同じ伝統演劇でも「能楽」と「歌舞伎」では

個人負担の費用の内訳がかなり異なっており、「歌舞伎」では「身体ケア・ケガ・病気予防にともなう支出」が80.6%、「整髪料、化粧品など」が83.9%と突出しています。「能楽」では「衣裳など」が66.3%、「ノルマのチケットの売れ残り」が49.4%と多い傾向にあります。

＊小ジャンル別の分析について
小ジャンル別の分析については、よりジャンル、分野ごとの特徴をみるため、問A-2(b)「あなた自身がたずさわっている活動分野のうち、最も比重の大きいものを選びください」という設問の回答結果を元に、30サンプル以上出現したジャンルのみ集計し分析を行っています。

問C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)



	n=	衣裳などの購入、洗濯費、借用料	交通費	整髪料、化粧品など	通信費	接待費・交際費	ともなう支出	身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出	機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代	楽譜代・資料代	技能習得などに支払う授業料	自己負担	ノルマのチケット売れ残りの自己負担	共演者に対する出演料、謝礼	会場の使用料	チラシ、プログラムの印刷費	宿泊費	資格認定にともなう費用	その他	個人負担は持たない	無回答
TOTAL	1603	57.2	56.6	45.4	44.4	44.2	40.3	37.4	31.8	29.8	25.9	20.6	19.8	19.4	18.3	11.3	1.7	7.2	3.4		
能楽	172	66.3	54.1	25.6	39.0	36.6	32.6	40.1	24.4	26.7	49.4	22.1	23.3	19.2	27.9	14.5	0.6	5.2	2.9		
歌舞伎	31	48.4	61.3	83.9	71.0	77.4	80.6	45.2	35.5	51.6	12.9	41.9	6.5	9.7	16.1	22.6	0.0	3.2	0.0		
現代演劇・新劇	113	31.9	63.7	49.6	49.6	53.1	40.7	10.6	17.7	31.0	22.1	4.4	2.7	2.7	8.8	1.8	0.9	9.7	3.5		
小劇場系演劇	31	48.4	90.3	45.2	71.0	64.5	48.4	25.8	29.0	25.8	25.8	25.8	35.5	29.0	29.0	3.2	6.5	0.0	0.0		
古曲	31	54.8	71.0	38.7	29.0	29.0	16.1	35.5	35.5	38.7	38.7	22.6	22.6	19.4	16.1	32.3	6.5	3.2	12.9		
三曲	94	64.9	62.8	48.9	33.0	35.1	29.8	68.1	70.2	45.7	45.7	39.4	36.2	33.0	21.3	25.5	1.1	2.1	5.3		
オーケストラ	173	44.5	29.5	29.5	33.5	39.3	26.6	43.4	49.7	19.1	5.2	8.7	6.4	6.4	11.0	3.5	2.3	19.7	1.2		
ソロ(演奏)	33	78.8	66.7	48.5	63.6	42.4	42.4	39.4	87.9	48.5	45.5	36.4	48.5	57.6	21.2	12.1	0.0	0.0	0.0		
日本舞踊	110	73.6	63.6	48.2	42.7	47.3	39.1	30.9	10.9	44.5	50.0	28.2	37.3	30.9	34.5	10.9	2.7	2.7	8.2		
バレエ	92	31.5	65.2	51.1	39.1	41.3	70.7	27.2	5.4	28.3	14.1	14.1	17.4	10.9	16.3	10.9	1.1	1.1	3.3		
その他の舞踊	36	88.9	63.9	55.6	27.8	44.4	25.0	41.7	5.6	36.1	69.4	27.8	30.6	13.9	22.2	30.6	0.0	2.8	2.8		
落語	78	80.8	65.4	55.1	64.1	52.6	56.4	35.9	23.1	21.8	9.0	42.3	48.7	51.3	23.1	1.3	1.3	3.8	1.3		
放送(テレビ、ラジオ)・スタジオ録音・スタジオ録画	45	57.8	68.9	51.1	64.4	46.7	46.7	28.9	20.0	31.1	11.1	6.7	4.4	6.7	20.0	11.1	2.2	4.4	0.0		
外画・アニメ吹き替え、ナレーション	37	70.3	91.9	67.6	67.6	75.7	64.9	21.6	35.1	45.9	10.8	13.5	8.1	10.8	5.4	13.5	0.0	2.7	2.7		
その他・無回答	527	56.7	51.8	47.6	43.3	42.1	38.9	39.8	33.4	25.0	19.9	19.0	15.6	19.0	15.2	11.0	2.1	8.7	3.6		

(%)

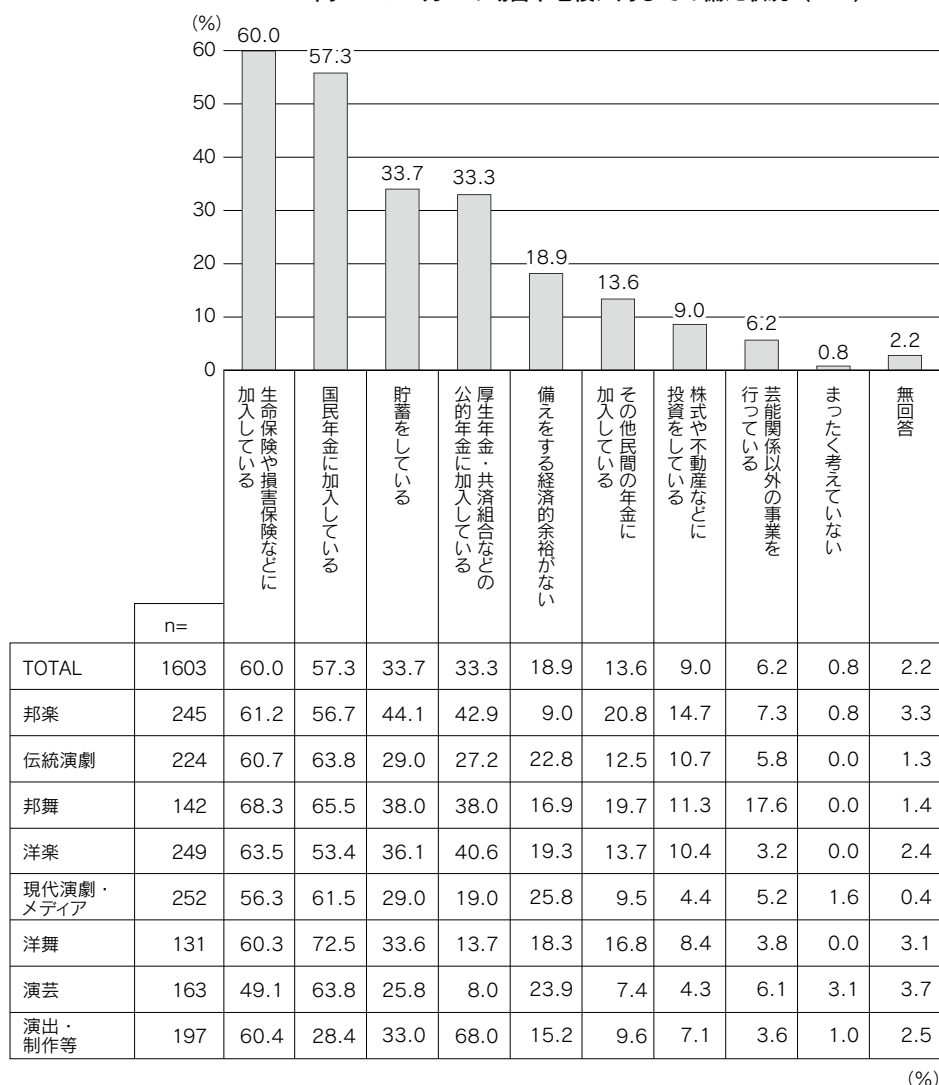
E-7

万一の場合や老後に対しての備え(MA)

万一の場合や老後に対しての備えとして、「生命保険や損害保険などに加入している」(60.0%)、「国民年金に加入している」(57.3%)の割合が6割前後を占めています。「国民年金に加入している」は「洋舞」の割合が他のジャンルに比べて高く、「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」は「邦楽」(42.9%)、「洋楽」(40.6%)でそれぞれ高くなっています。

第8回調査と比較すると、「生命保険や損害保険などに加入している」(第8回：54.4%、第9回：60.0%)、「貯蓄をしている」(同29.3%、33.7%)、「公的年金に加入している」(同30.2%、33.3%)の割合が第9回調査でそれぞれ高くなっています。

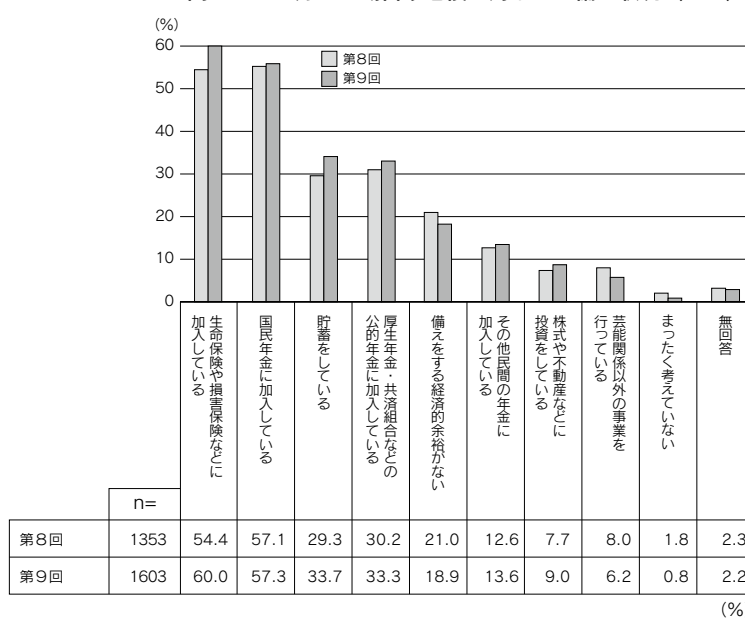
問E-7 万一の場合や老後に対しての備え状況(MA)



(%)

【参考】第8回 調査結果との比較

問E-7 万一の場合や老後に対しての備え状況(MA)



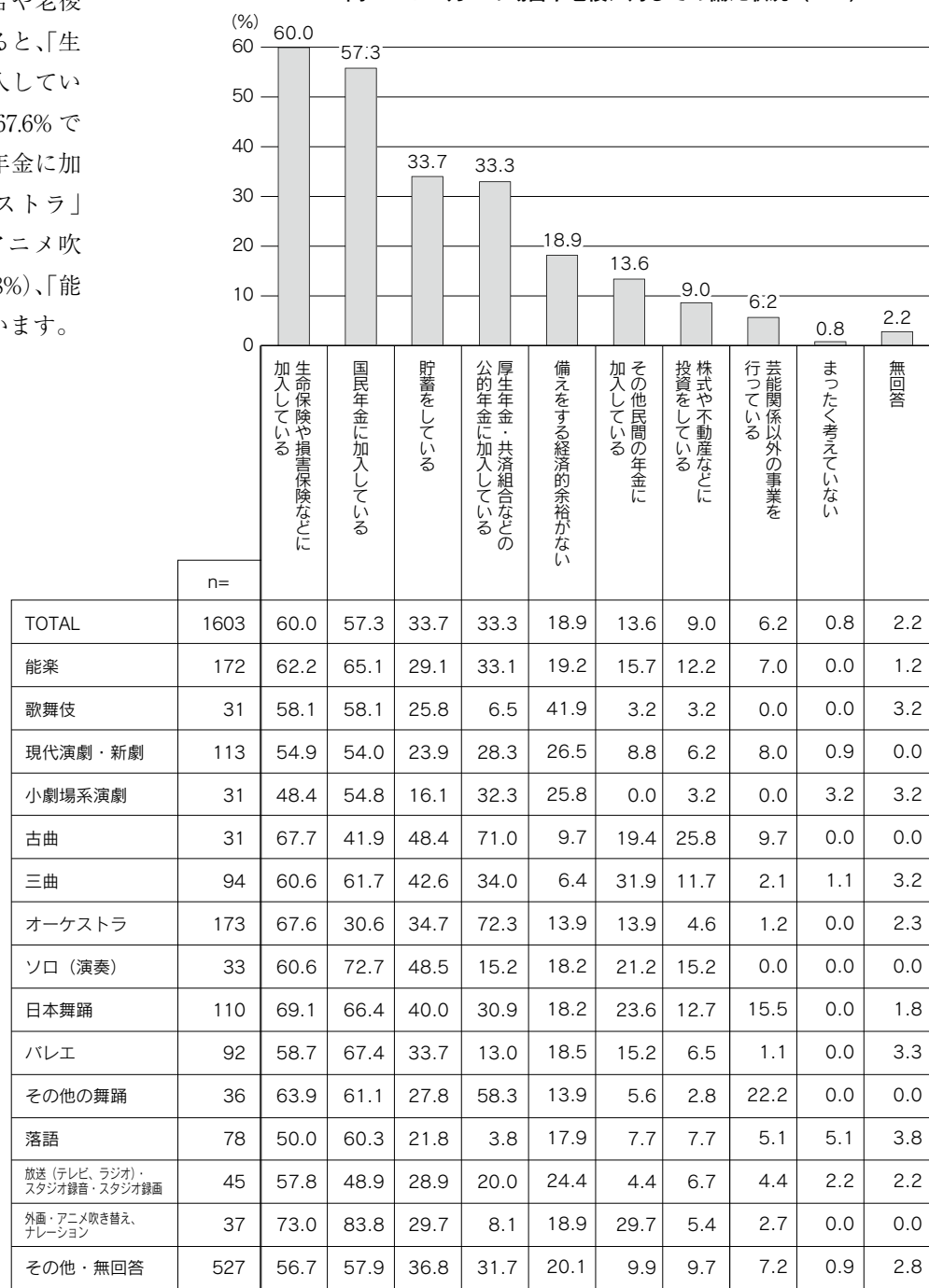
(%)

E-7

万一の場合や老後に対するの備え(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に万一の場合や老後に対するの備えの状況をみると、「生命保険や損害保険などに加入している」は「オーケストラ」が67.6%で最も高いです。逆に「国民年金に加入している」は、「オーケストラ」は30.6%で低く、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」(83.8%)、「能楽」(65.1%)で高くなっています。

問E-7 万一の場合や老後に対するの備え状況 (MA)



(%)

(2) 仕事環境について

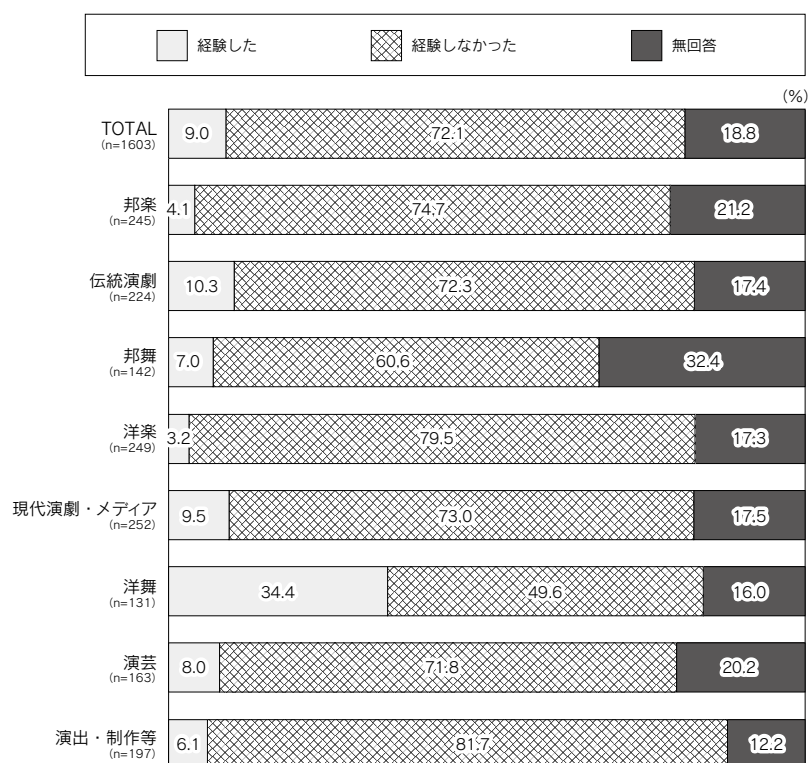
■ 傷害(ケガ)の状況

C-3 (a)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験(傷害(ケガ))

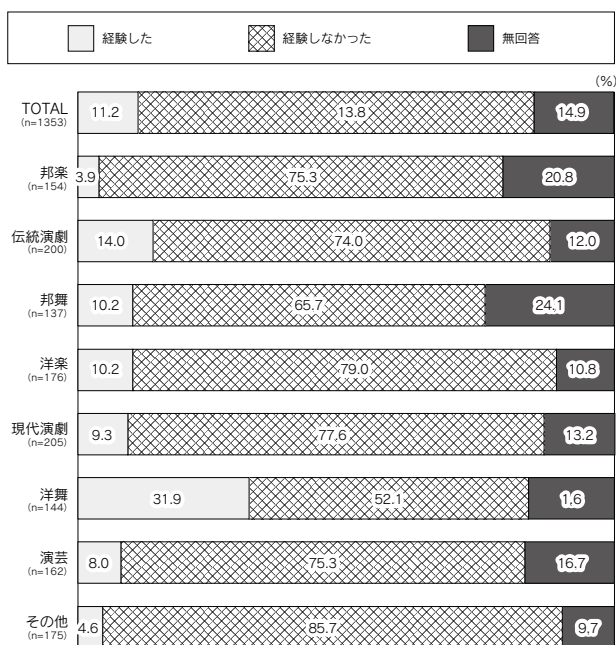
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)を経験した割合は9.0%でした。ジャンル別にみると、「洋舞」が34.4%で、他のジャンルに比べて突出して高いです。

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a) 仕事上の傷害(ケガ)



【参考】第8回 調査結果

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a) 仕事上の傷害(ケガ)

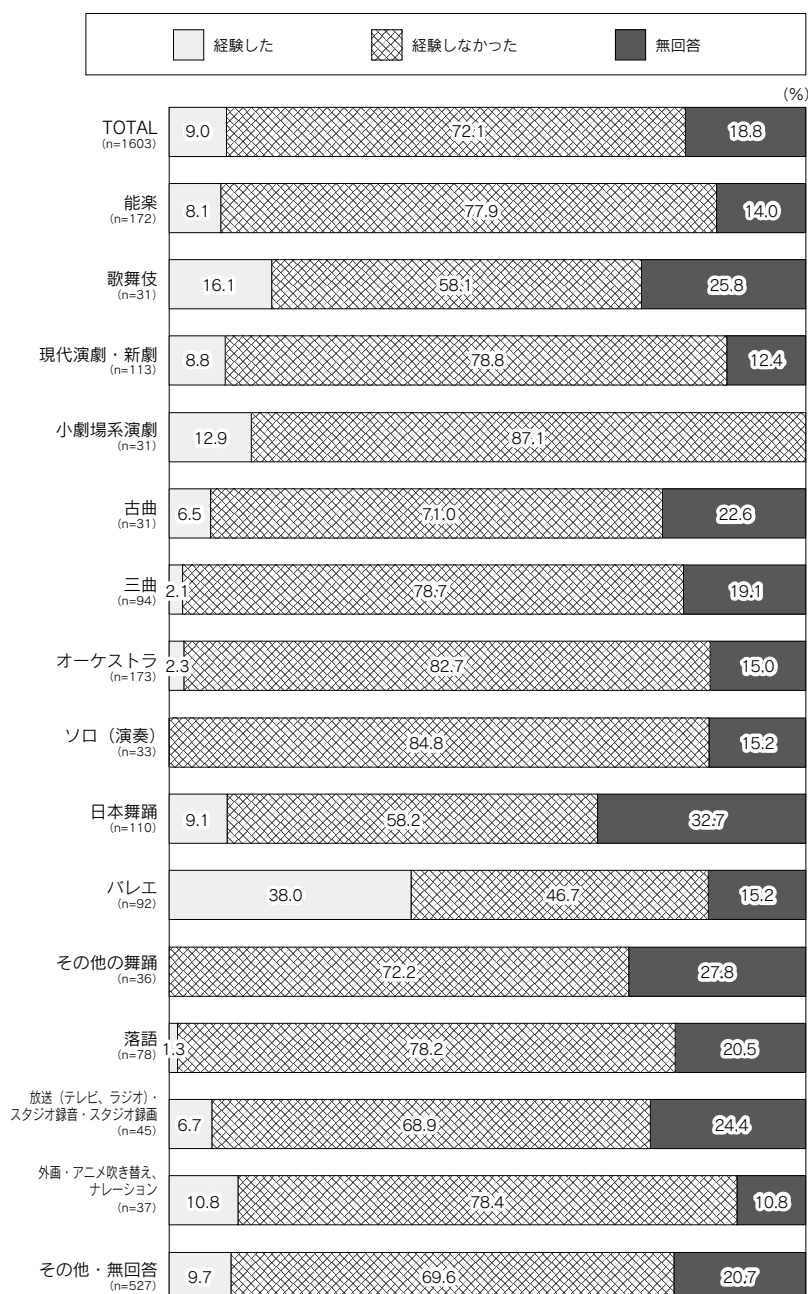


C-3 (a)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (小ジャンル別)(傷害(ケガ))

小ジャンル別に昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)の経験をみると、「バレエ」が38.0%で他の小ジャンルに比べて傷害(ケガ)の経験率が高く、「歌舞伎」も16.1%と高めとなっています。

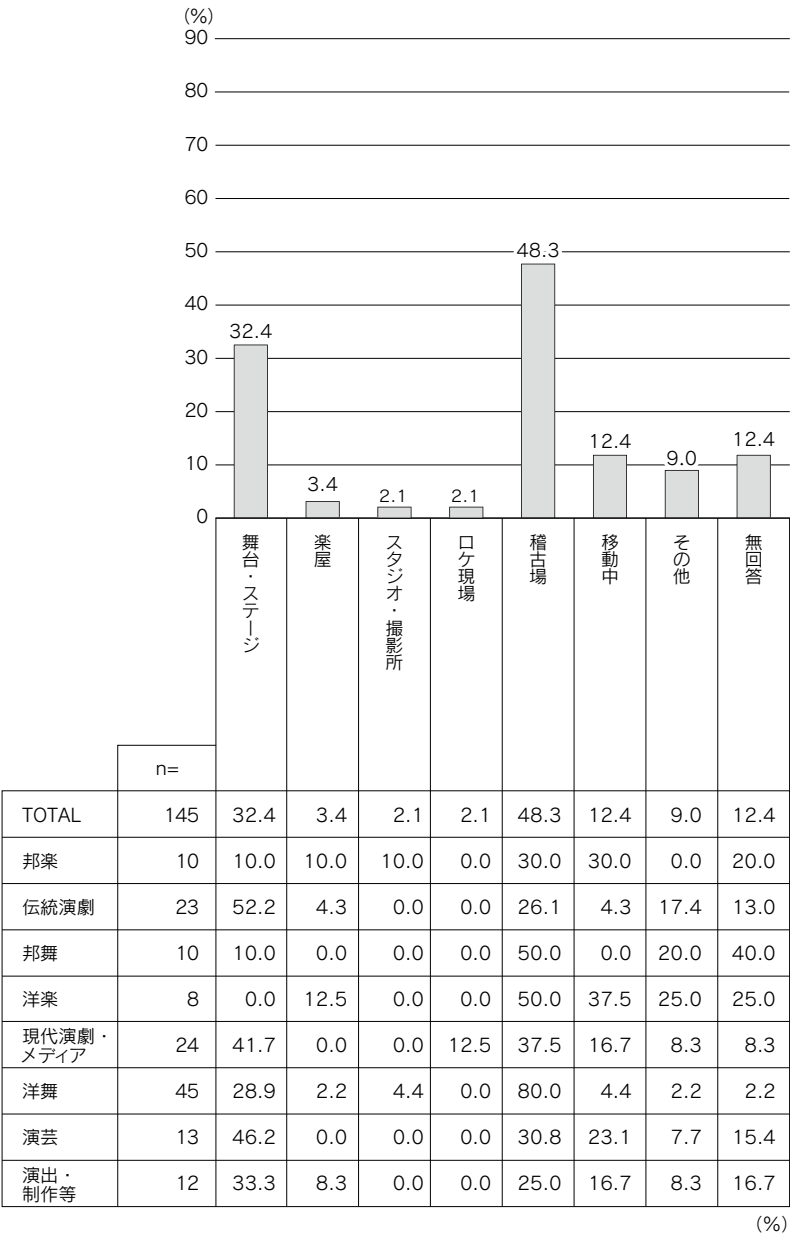
問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(a) 仕事上の傷害(ケガ)



C-4 (a)
昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)の発生場所

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)が発生した場所は、「稽古場」が48.3%で最も高く、それに「舞台・ステージ」が32.4%、「移動中」が12.4%が続いています。「洋舞」は「稽古場」の割合が80.0%で最も高くなっています。

問C-4 (a) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害発生場所 (MA)
【ベース：傷害経験有り】



※「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇」「演芸」「その他」は
サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

C-4 (b)

昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)治療費等の負担状況

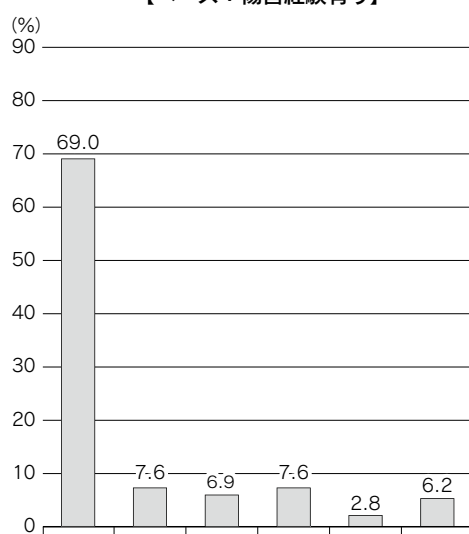
C-4 (c)

昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)に対する治療費以外の補償状況

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)に対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く69.0%、その他、「労災保険が適用された」「自分が加入している傷害保険などの給付があった」がともに7.6%でした。

治療費等以外の補償では、「何もない」が77.9%、「見舞い金程度」は5.5%となっています。

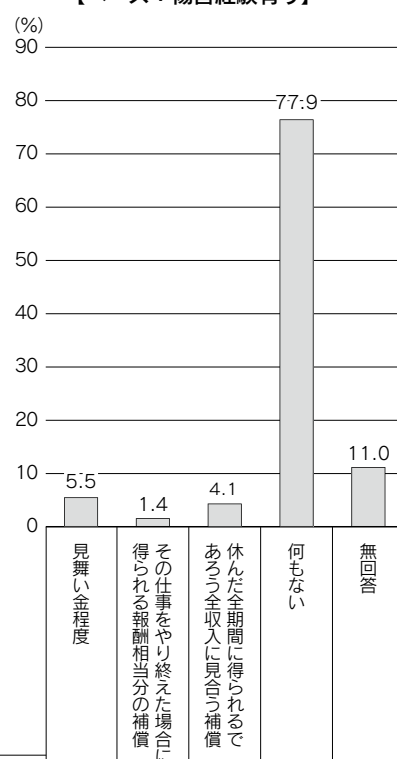
問C-4 (b) 昨年1年間に経験した
仕事上の傷害治療費等の負担状況
【ベース：傷害経験有り】



	n=	自分で負担した	労災保険が適用された	仕事の依頼主等が負担した	自分が加入している傷害保険などの給付があった	その他	無回答
TOTAL	145	69.0	7.6	6.9	7.6	2.8	6.2
邦楽	10	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
伝統演劇	23	65.2	8.7	8.7	8.7	4.3	4.3
邦舞	10	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
洋楽	8	62.5	12.5	0.0	12.5	0.0	12.5
現代演劇・メディア	24	50.0	12.5	20.8	12.5	4.2	0.0
洋舞	45	82.2	4.4	6.7	4.4	0.0	2.2
演芸	13	69.2	0.0	0.0	15.4	7.7	7.7
演出・制作等	12	50.0	25.0	0.0	8.3	8.3	8.3

(%)

問C-4 (c) 昨年1年間に経験した
仕事上の傷害に対する治療費以外の補償状況
【ベース：傷害経験有り】



	n=	見舞い金程度	得られる報酬相当分の補償	その仕事をやり終えた場合に休んだ全期間に得られるであろう全収入に見合う補償	何もない	無回答
TOTAL	145	5.5	1.4	4.1	77.9	11.0
邦楽	10	0.0	0.0	0.0	80.0	20.0
伝統演劇	23	17.4	0.0	4.3	56.5	21.7
邦舞	10	20.0	0.0	0.0	60.0	20.0
洋楽	8	0.0	0.0	12.5	75.0	12.5
現代演劇・メディア	24	0.0	0.0	4.2	91.7	4.2
洋舞	45	2.2	2.2	0.0	88.9	6.7
演芸	13	7.7	7.7	7.7	69.2	7.7
演出・制作等	12	0.0	0.0	16.7	75.0	8.3

(%)

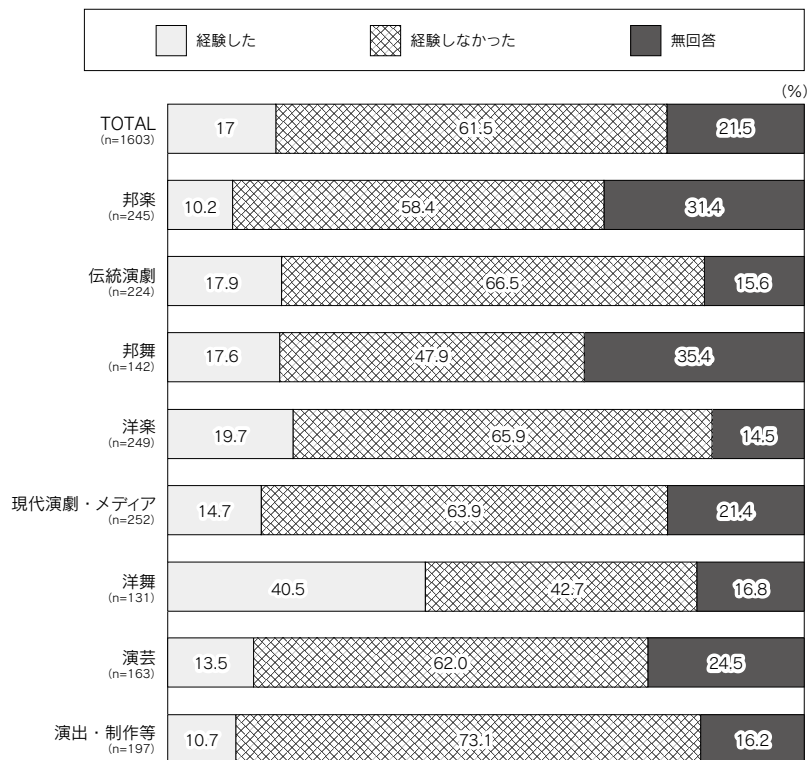
■ 病気・症状の状況

C-3 (b)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験(病気・症状)

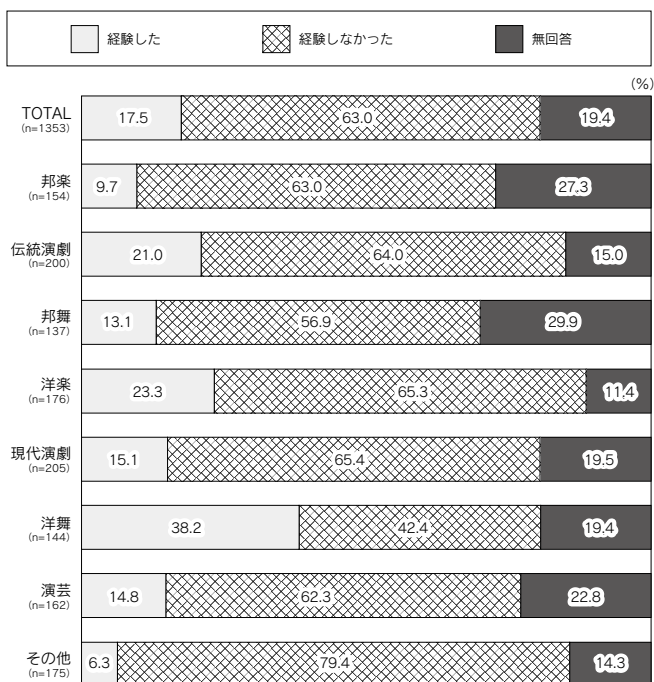
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状などを経験した割合は17.0%です。ジャンル別でみると、傷害(ケガ)と同様に「洋舞」が40.5%で特に割合が高くなっています。

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など



【参考】第8回 調査結果

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など

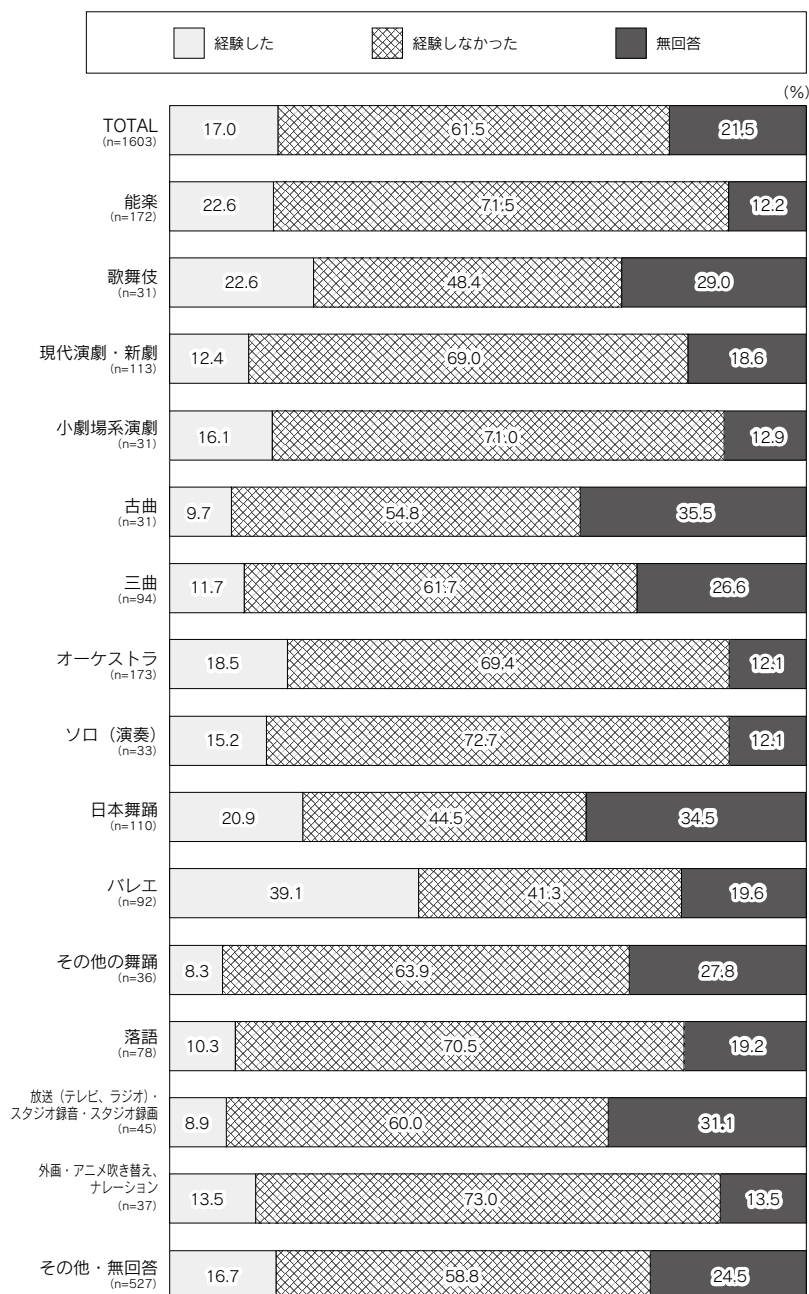


C-3 (b)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(小ジャンル別)(病気・症状)

小ジャンル別に昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状の経験をみると、「バレエ」が39.1%で他の小ジャンルに比べ病気・症状の経験率が高くなっています。

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など



C-5 (a)

仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況(MA)

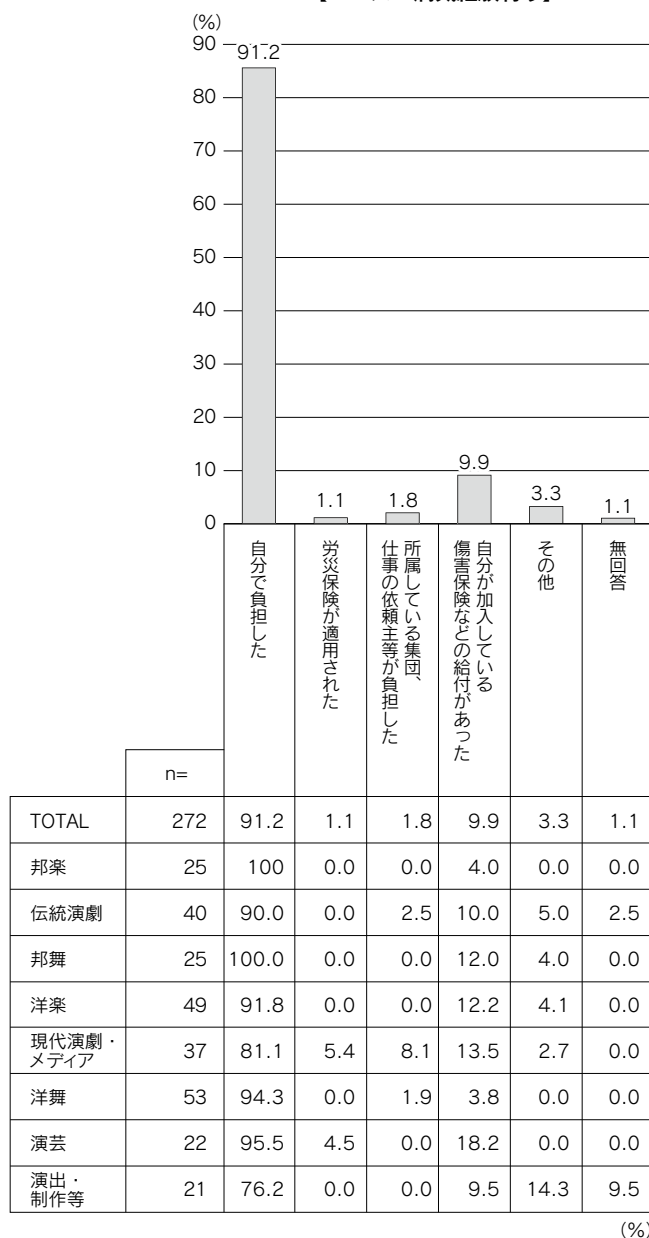
C-5 (b)

仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費以外の補償状況(MA)

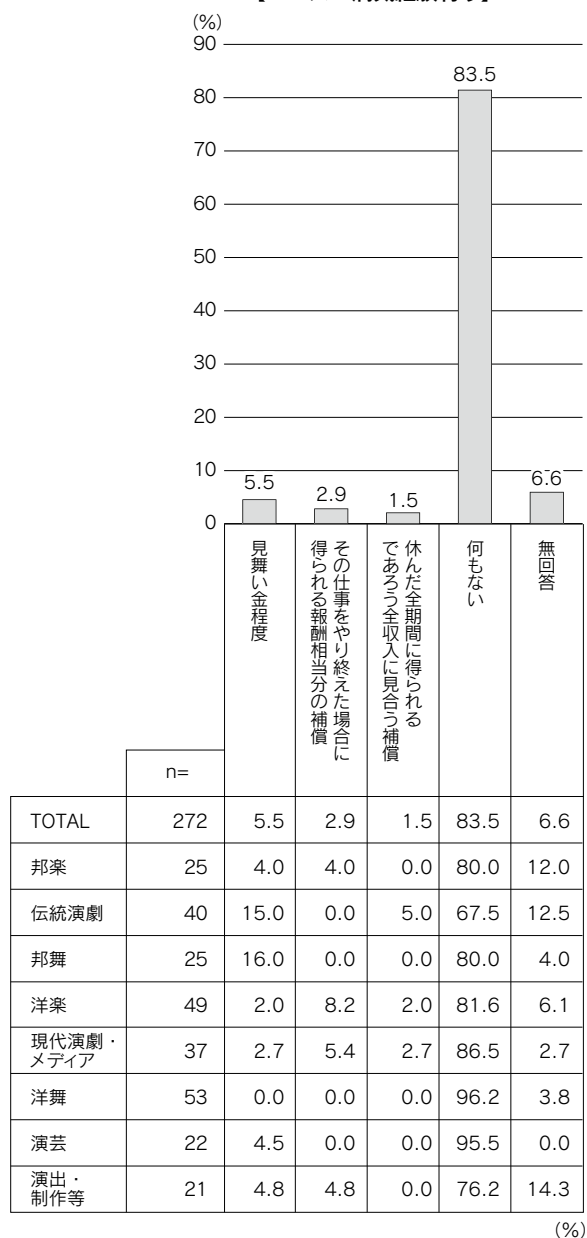
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状などに対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く91.2%、「自分が加入している傷害保険などの給付があった」が9.9%となっていました。

治療費等以外の補償では、「何もない」が83.5%、「見舞い金程度」は5.5%です。

問C-5 (a) 仕事の原因と考えられる
病気・症状の治療費の負担状況 (MA)
【ベース：病気経験有り】



問C-5 (a) 仕事の原因と考えられる
病気・症状の治療費以外の補償状況 (MA)
【ベース：病気経験有り】



※「邦楽」「邦舞」「演芸」「その他」はサンプル数30s未満のため参考値扱いとする。

(3) 仕事や生活に対する考え方

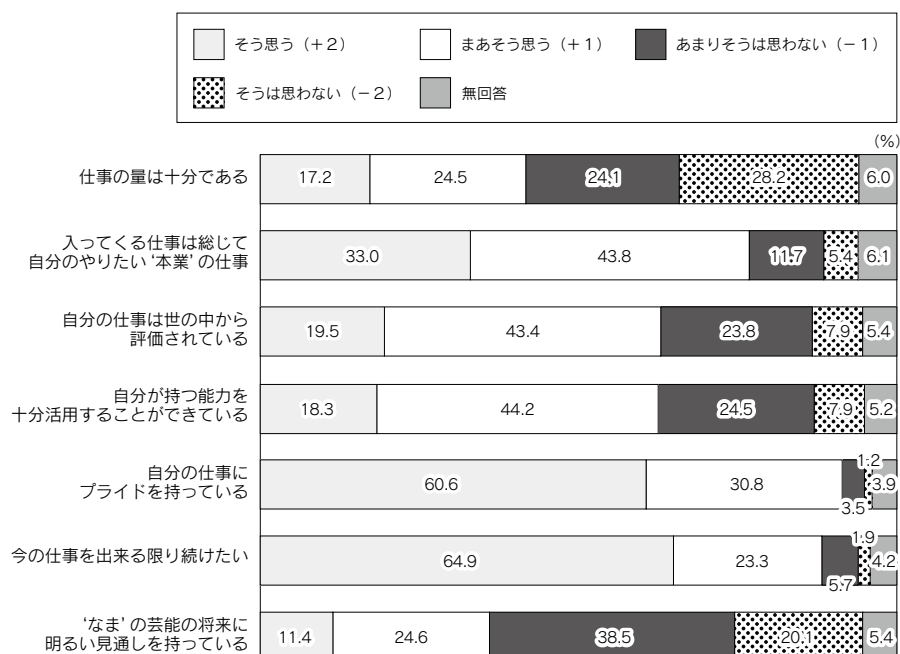
D-1 (a)

仕事に対する考え方について

「自分の仕事にプライドを持っている」「いまの仕事をできるかぎり続けたい」は、「そう思う／まあそう思う」の割合は9割前後となり、他の項目に比べて肯定する割合が高いです。同じく「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている『本業』の仕事である」は8割弱、「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができる」も6割の人が「そう思う／まあそう思う」と回答しています。

その一方で、「仕事の量は十分である」「ライブ、舞台公演など『なま』の芸能の将来に明るい見通しを持っている」「『なま』の芸能の将来に明るい見通しを持っている」は、「そうは思わない／あまりそうは思わない」は過半数を占め、否定する割合が高くなっています。

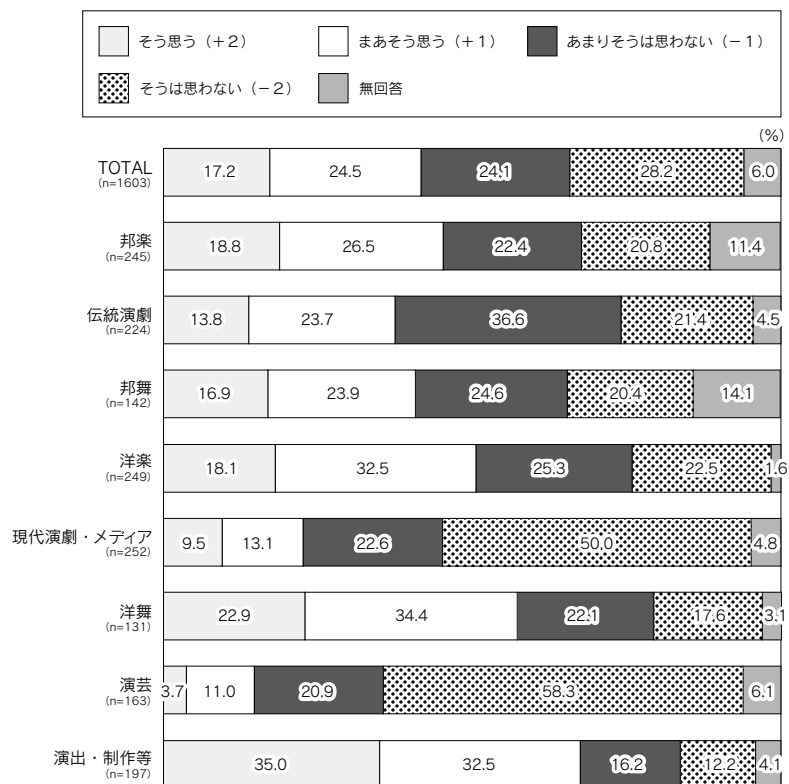
問D-1 (a) 仕事に対する考え方



D-1 (a)

仕事に対する考え方について(1)(ジャンル別)

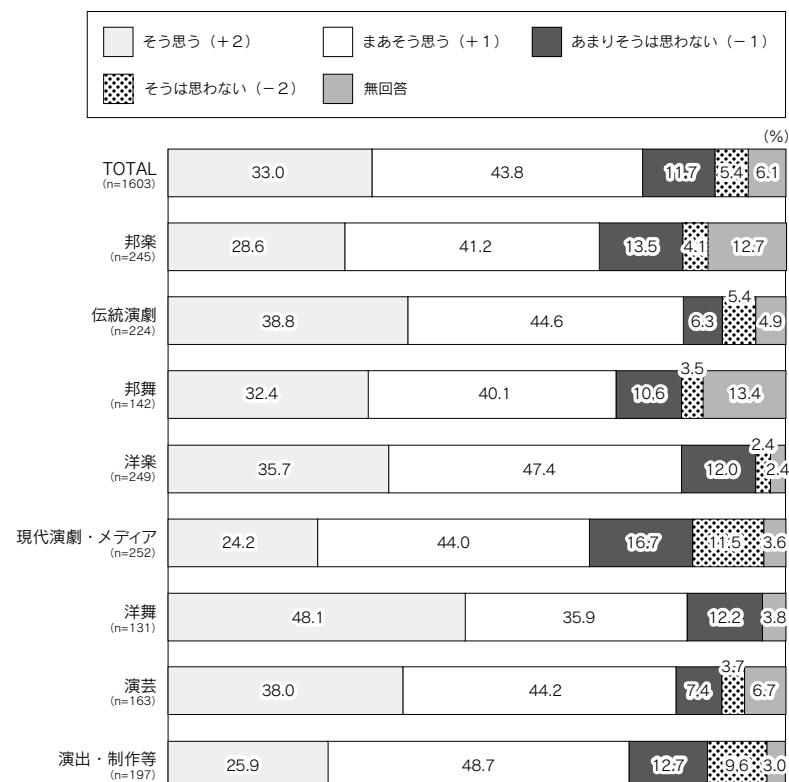
「仕事の量は十分である」は「演芸」と「現代演劇・メディア」で「そうは思わない」の割合が約半数を占めて高く、「あまりそうは思わない」を加えると7割を超えます。「洋舞」は「そう思う」と「まあそう思う」で6割弱となり高くなっています。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
仕事の量は十分である

D-1 (a)

仕事に対する考え方について(2)(ジャンル別)

「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている『本業』の仕事である」で、「そう思う」「まあそう思う」の回答の合計をみると、「洋舞」が84%と最も高く、次いで「伝統演劇」の83.4%です。最も少ない「現代演劇・メディア」でも68.2%、「邦楽」で69.8%となっていて、自分のやりたい『本業』の仕事をしていると肯定的に受け止めている人が大半を占めています。

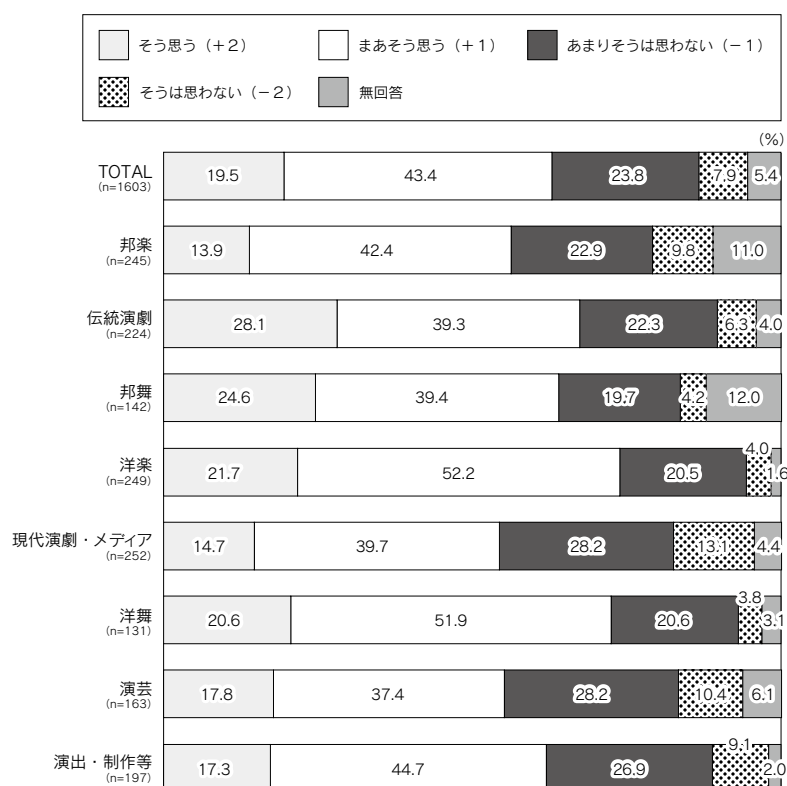
問D-1 (a) 仕事に対する考え方
入ってくる仕事は総じて自分のやりたい『本業』の仕事

D-1 (a)

仕事に対する考え方について(3)(ジャンル別)

「自分の仕事は世の中から評価されている」はすべてのジャンルで「そう思う」「まあそう思う」を合わせた割合が過半数を占めています。合計の割合が最も高いのは「洋楽」で73.9%、次いで「洋舞」の72.5%。最も低いのが「現代演劇・メディア」で54.4%、次いで「演芸」の55.2%でした。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
自分の仕事は世の中から評価されている

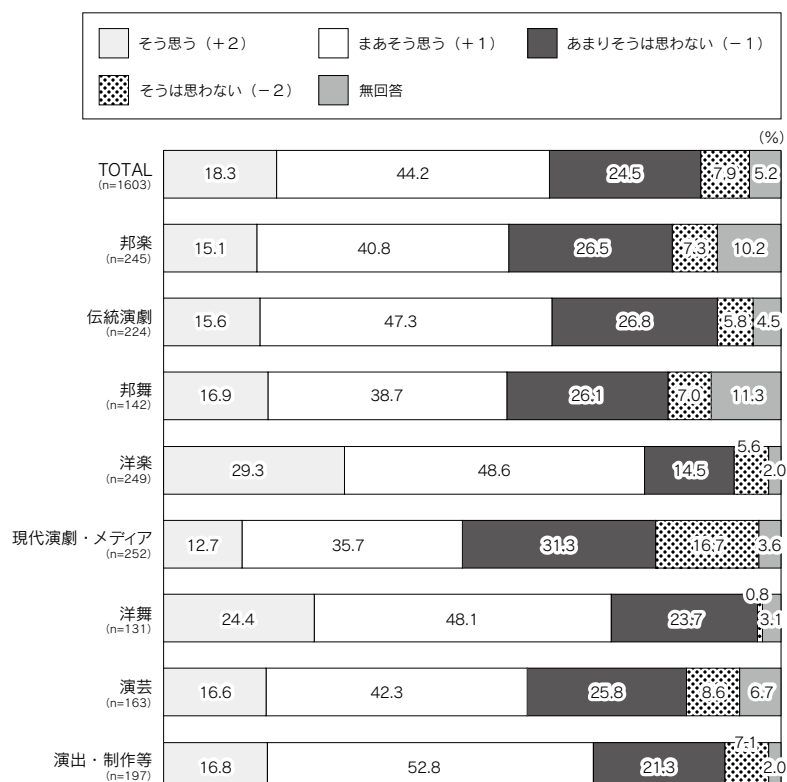


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(4)(ジャンル別)

「自分が持つ能力を十分活用することができる」は、「現代演劇・メディア」を除くジャンルでは、「そう思う」「まあそう思う」の合計が過半数を超えています。最も肯定的なのは「洋楽」で77.9%にのぼるのに対し、「現代演劇・メディア」では「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の合計の割合が48.0%と、他のジャンルに比べて不満感が高くなっています。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
自分が持つ能力を十分活用することができる

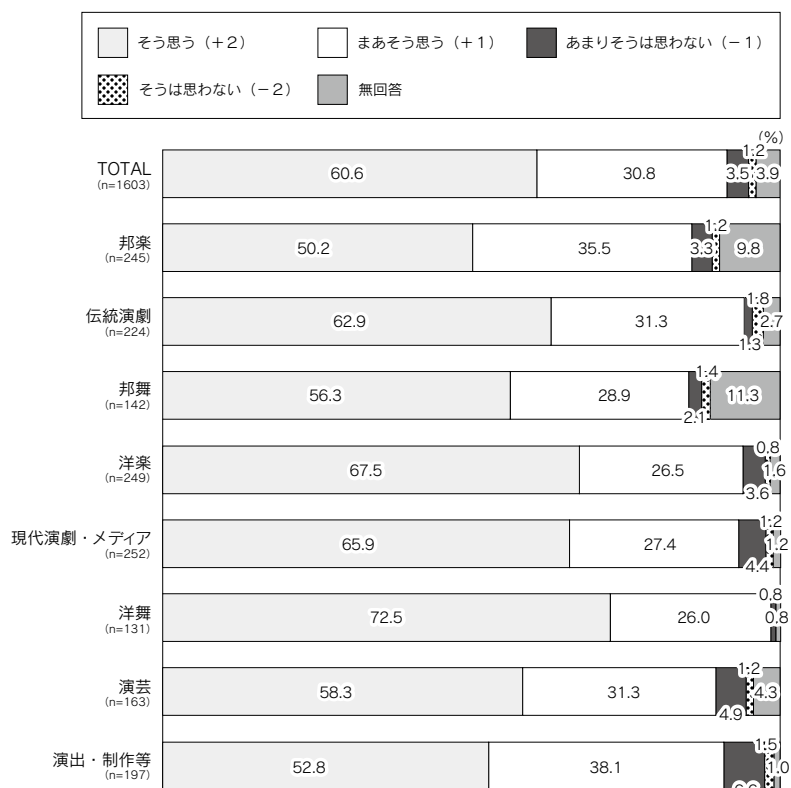


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(5)(ジャンル別)

「自分の仕事にプライドを持っている」は、「洋舞」「洋楽」で「そう思う」の割合が72.5%、67.5%で他に比べて高く、最も低い「邦楽」でも50.2%と過半数を超えています。「まあそう思う」も合計すると圧倒的に「プライドを持っている」という人たちの割合が高いです。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
自分の仕事にプライドを持っている

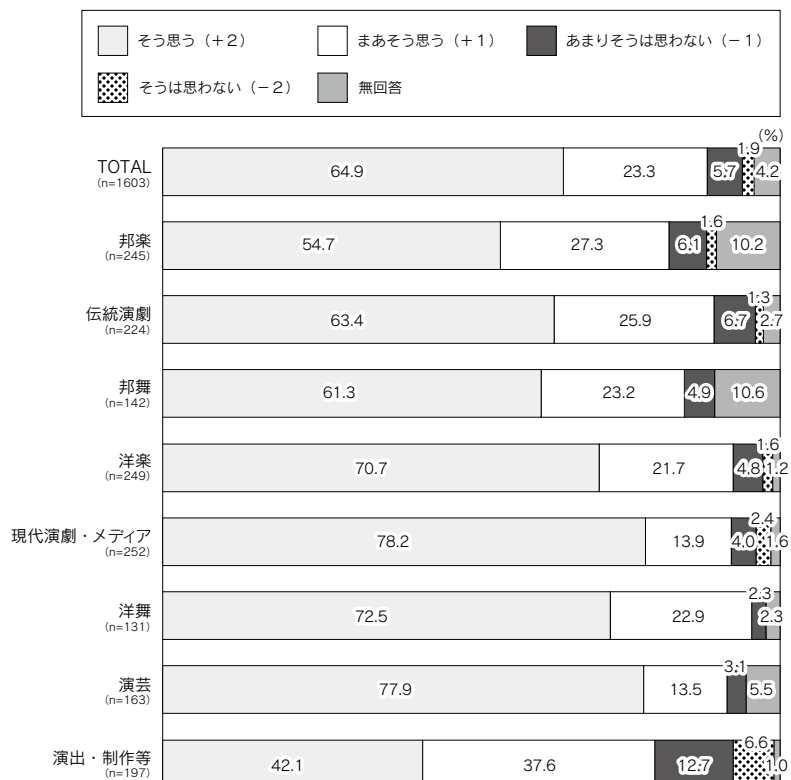


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(6)(ジャンル別)

「いまの仕事をできるかぎり続けたい」では、「現代演劇・メディア」「演芸」で「そう思う」の割合が78.2%、77.9%で高くなっています。「まあそう思う」も合計すると、「その他（演出・制作等）」以外は8割を超えています。「その他（演出・制作等）」は、実演家以外も含むジャンルですが、「そうは思わない」「あまりそうは思わない」が他ジャンルに比べて高く、それぞれ12.7%、6.6%です。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
今の仕事を出来る限り続けたい

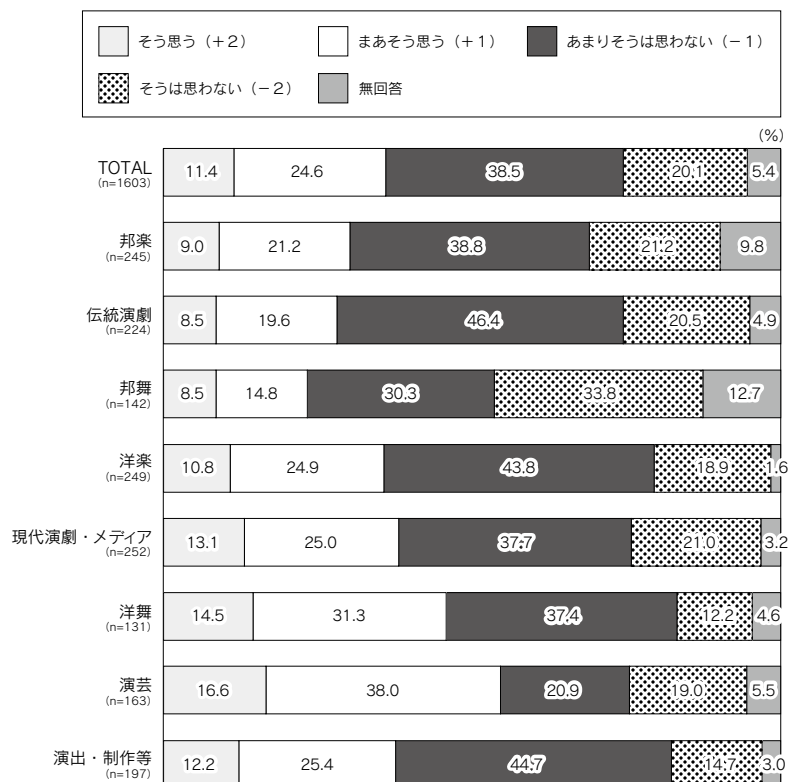


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(7)(ジャンル別)

「ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている」は、「演芸」で「そう思う」に「まあそう思う」を加えた割合が過半数を占めて最も高くなっていますが、それ以外のジャンルでは「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の割合の方が高くなっています。「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の合計が高いのは「伝統演劇」66.9%、「邦舞」64.1%で、将来に危機感を多く感じているようです。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている



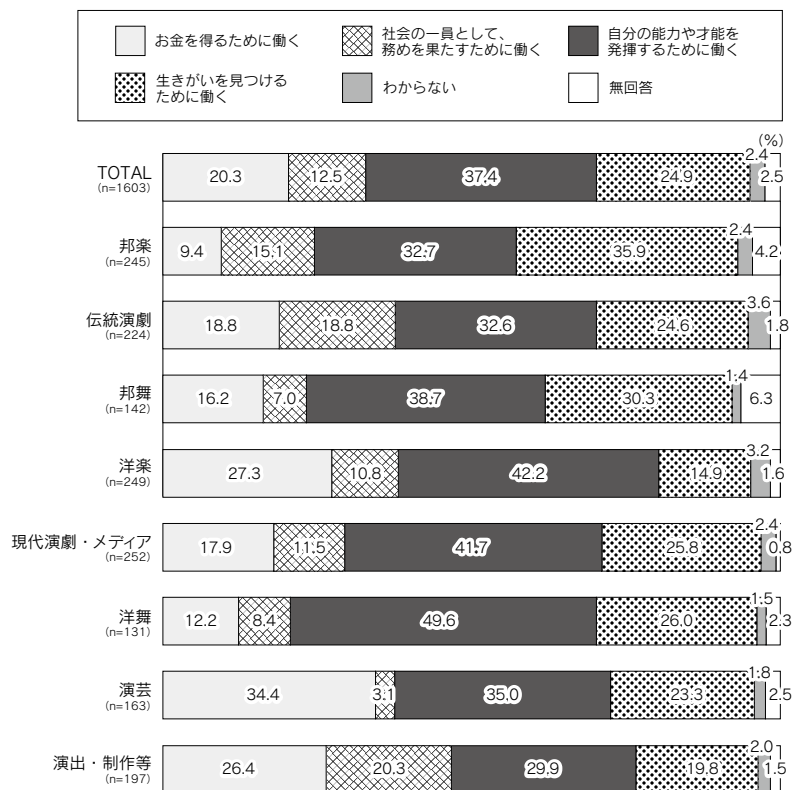
D-1 (b) 働く目的

働く目的は「自分の能力や才能を発揮するために働く」が37.4%で最も高く、「生きがいを見つけるために働く」が24.9%、「お金を得るために働く」が20.3%でそれに続いています。

ジャンル別では、ほとんどのジャンルで「自分の能力や才能を発揮するために働く」が最も多く、「洋舞」では49.6%を占めています。「邦楽」のみ、「生きがいを見つけるために働く」の方が35.9%と最も多くなっています。

「お金を得るために働く」は「演芸」が34.4%と最も高く、次いで「洋楽」が27.3%です。「社会の一員として、務めを果たすために働く」の回答は「演出・制作等」で最も高く20.3%であるのに対し、「演芸」で3.1%と最も低くなっています。

問D-1 (b) 働く目的



(4) より良い活動が続けていくために

C-1

仕事上の問題点(MA)

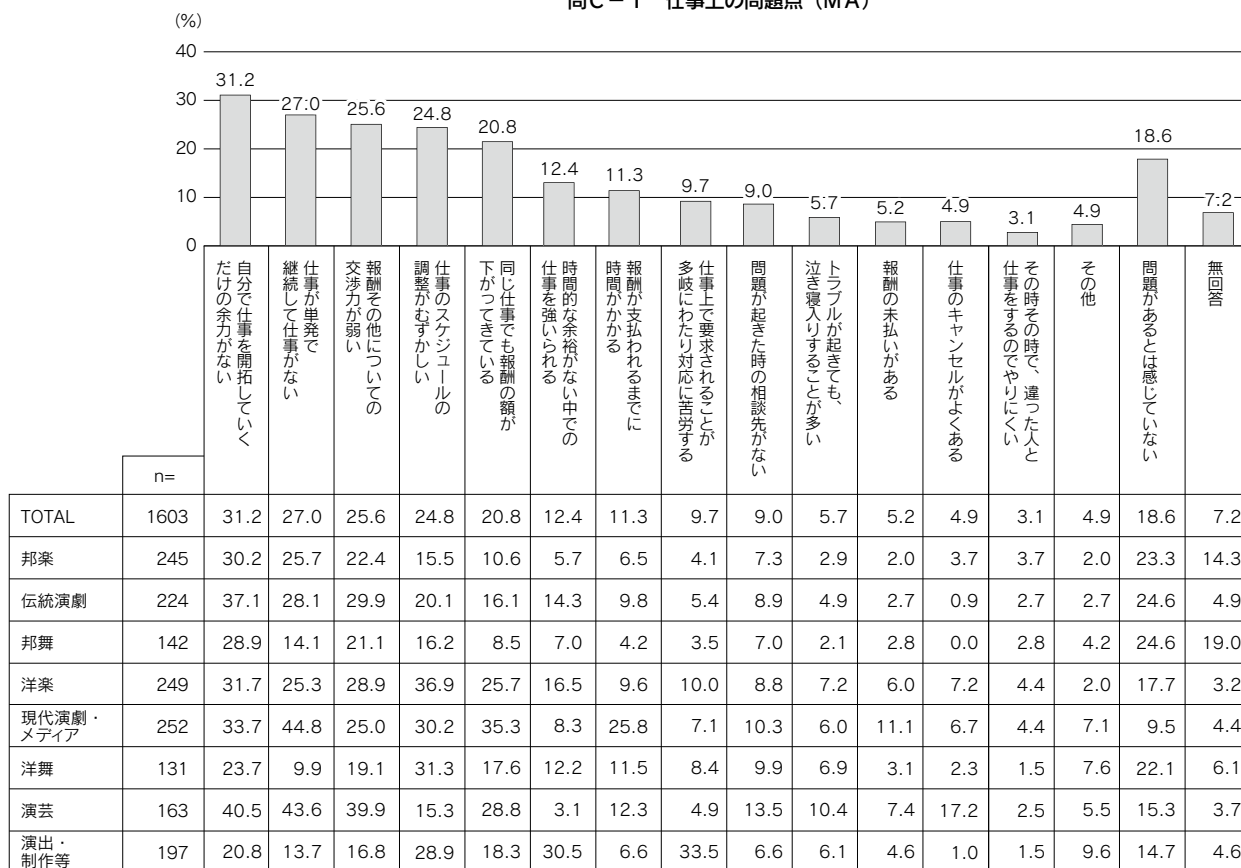
現在、芸能実演家が抱えている仕事上の問題点として、「自分で仕事を開拓していきただけの余力がない」が31.2%で最も高く、「仕事が単発で継続して仕事がない」が27.0%、「報酬その他についての交渉力が弱い」が25.6%、「報酬その他についての交渉力が弱い」が24.8%、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が20.8%、「同じ仕事でも報酬の額が下がっている」が12.4%、「時間的な余裕がない中での仕事を強いられる」が11.3%、「報酬が支払われるまでに時間がかかる」が9.7%、「多岐にわたる対応に追いつかない」が9.0%、「問題が起きた時の相談先がない」が5.7%、「泣き寝入りすることが多い」が5.2%、「トラブルが起きて、トランプルが起きても、泣き寝入りすることが多い」が4.9%、「報酬の未払いがある」が3.1%、「仕事のキャンセルがよくある」が4.9%、「その時その時で、違った人と仕事をするのでやりにくい」が3.1%、「その他」が4.9%、「問題があるとは思っていない」が18.6%、「無回答」が7.2%。

い」が25.6%でそれに続いています。

ジャンル別にみると、「自分で仕事を開拓していきただけの余力がない」は「演芸」が40.5%で他のジャンルに比べて高いです。「仕事が単発で継続して仕事がない」は「現代

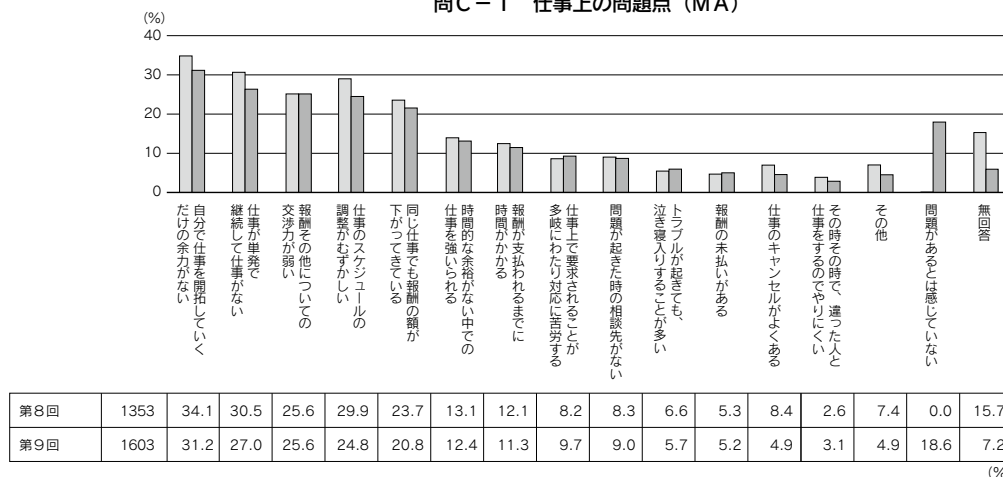
演劇・メディア」と「演芸」がそれぞれ44.8%、43.6%で高く、「洋舞」(9.9%)、「邦舞」(14.1%)で低くなっています。「報酬その他についての交渉力が弱い」でも「演芸」で高く、39.9%です。

問C-1 仕事上の問題点 (MA)



(%)

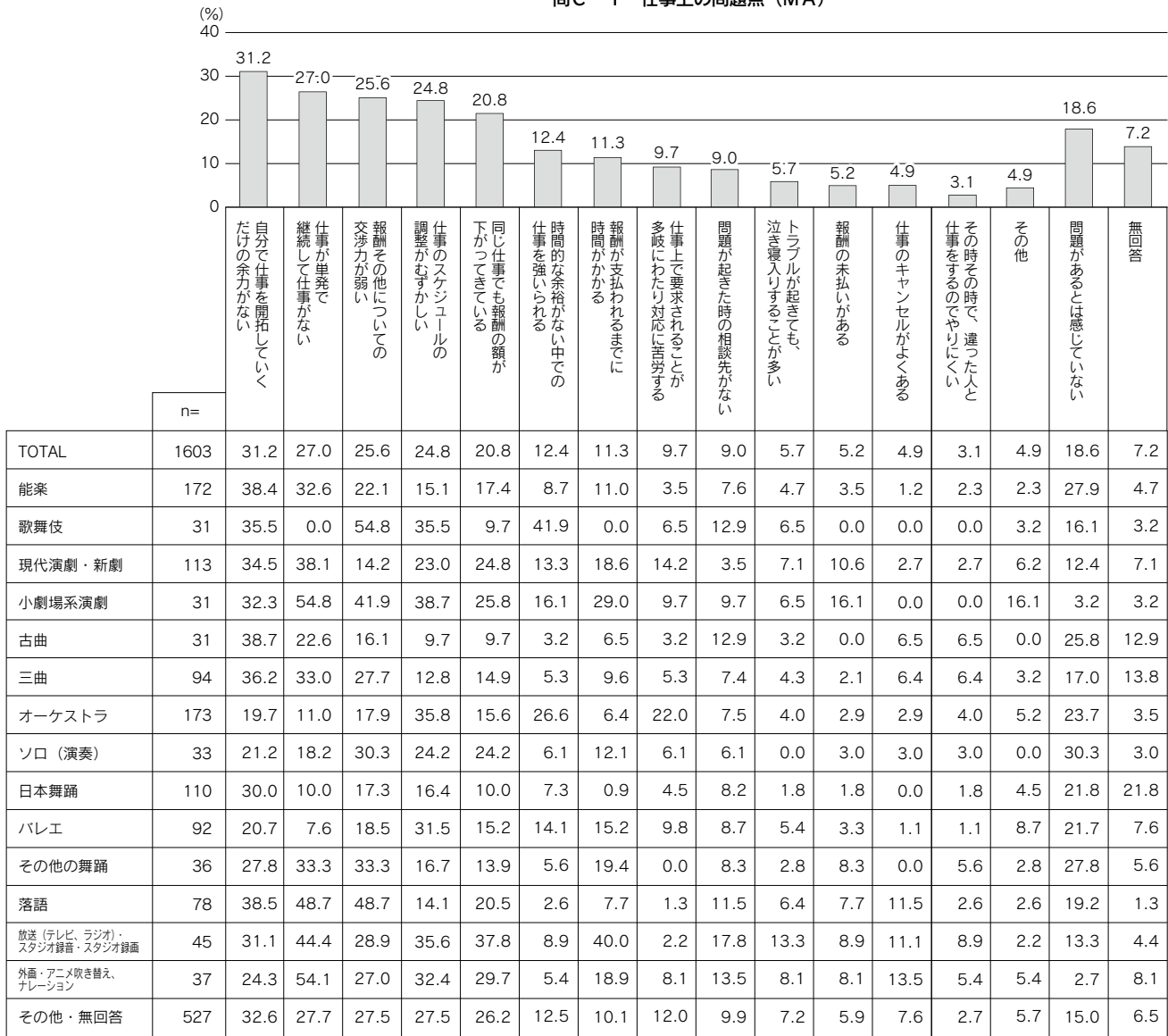
【参考】第8回 調査結果との比較
問C-1 仕事上の問題点 (MA)



C-1 仕事上の問題点(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に仕事上の問題点をみると、「仕事が単発で継続して仕事がない」は「小劇場系演劇」(54.8%)、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」(54.1%)、「落語」(48.7%)などで他の小ジャンルに比べて高くなっています。「報酬その他についての交渉力が弱い」では、「歌舞伎」(54.8%)、「落語」(48.7%)、「小劇場系演劇」(41.9%)で高くなっています。

問C-1 仕事上の問題点 (MA)



(%)

D-2

技術・技能を向上させるための必要条件(3L A)

技術・技能を向上させるための必要条件として特に必要と思う選択肢3つまで選ぶ設問では、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」が最も高く35.7%、次いで「芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること」が34.6%、「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあるこ

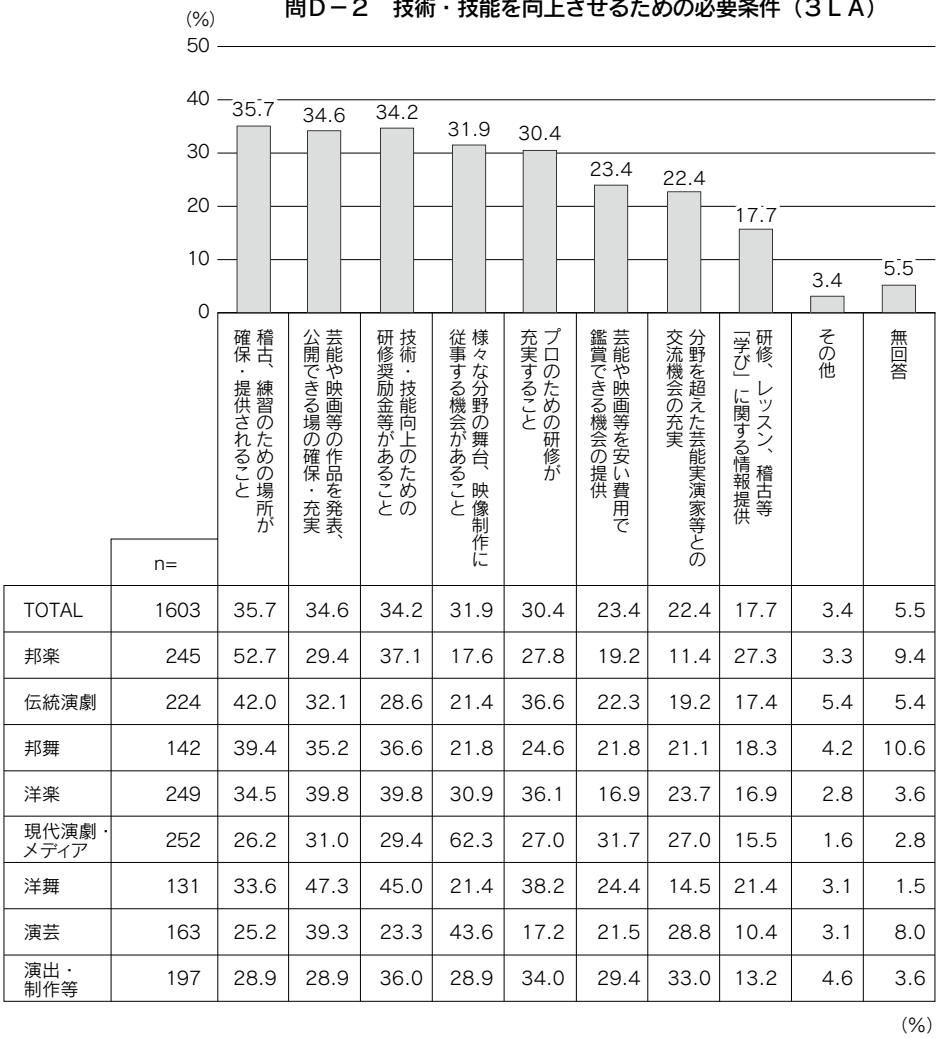
と」が34.2%で続いています。

ジャンル別にみると、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」は「邦楽」(52.7%)「伝統演劇」(42.0%)で高く、「演芸」(25.2%)、「現代演劇・メディア」(26.2%)で低くなっています。

「芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実される

こと」は、各ジャンルとも高い割合で回答していますが、「洋舞」が47.3%と、突出しており、とりわけ公演機会の確保・充実に困難を感じていることが伺われます。「洋舞」では、「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること」も45.0%と、他ジャンルより高い割合になっています。

問D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3L A)

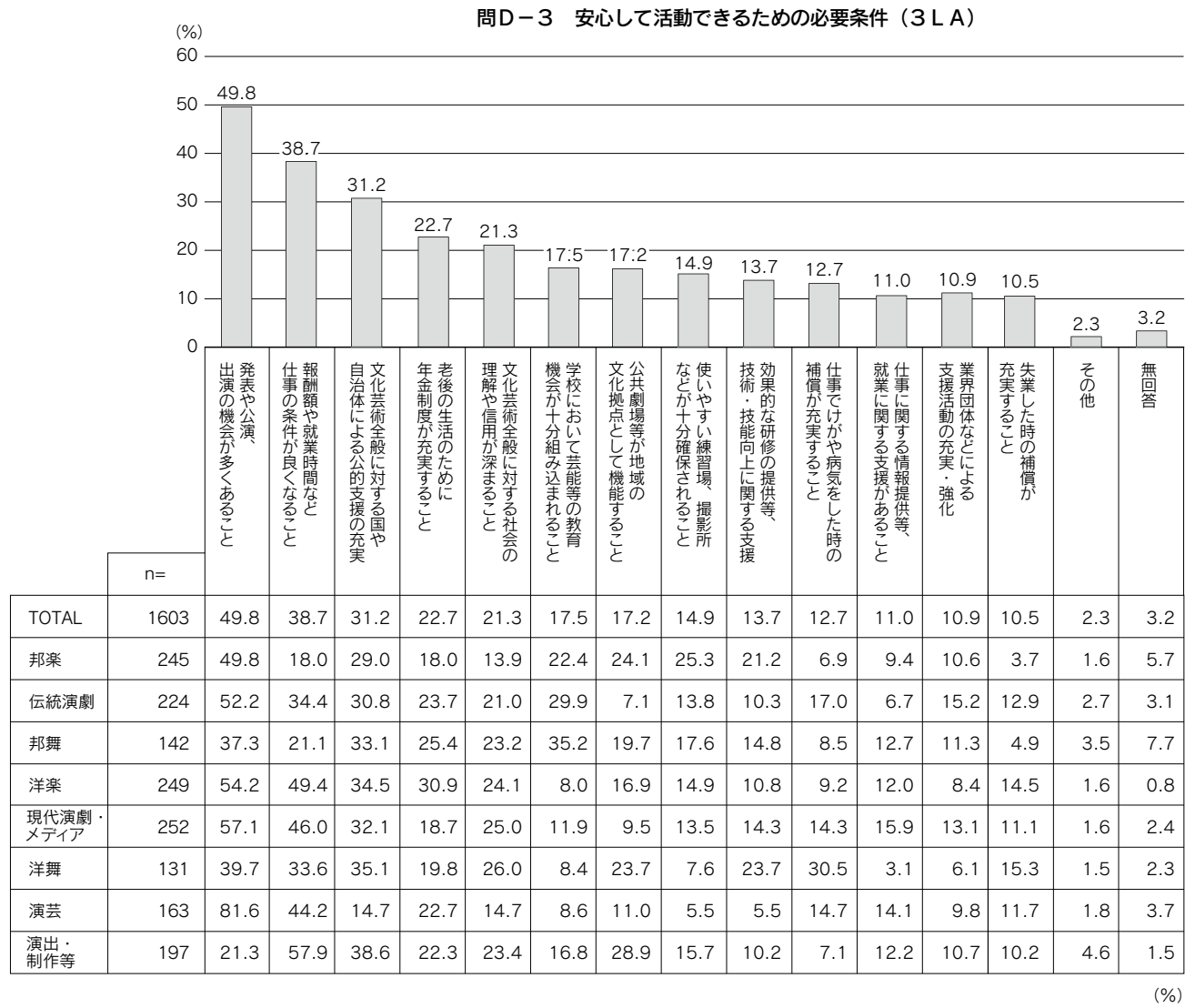


(%)

D-3 安心して活動していくための必要条件(3L A)

安心して活動していくための必要条件を3つまで選ぶ設問では、「発表や公演、出演の機会が多くあること」が49.8%で最も高く、以下、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」(38.7%)、「芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること」(31.2%)となっています。

ジャンル別では、「発表や公演、出演の機会が多くあること」は「演芸」(81.6%)、「現代演劇」(57.1%)で高く、「邦舞」(37.3%)、「洋舞」(39.7%)で低くなっています。

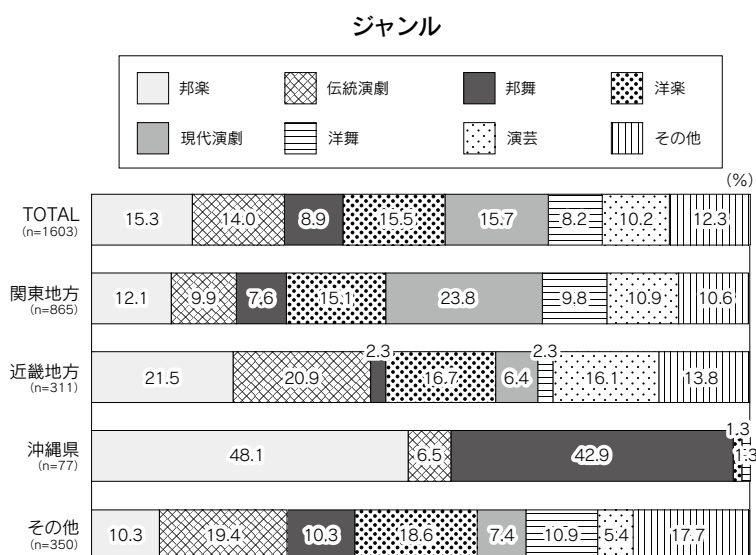


(5) 地域別集計結果

第9回では、居住都道府県の回答を求めており、その結果を4つの地域区分にわけて分析してみました。「関東地方」(n=865)、「近畿地方」(n=311)、「沖縄県」(n=77)、「その他の地方」(n=350)と「関東地方」が約半数を占め、「近畿地方」と「その他の地方」が同程度となっています。地域ごとに特色のある回答が出た項目を中心に示します。

■ 回答者の属性—ジャンルと所属団体

地域ごとの回答者のジャンル構成をみると、沖縄県では「邦楽」と「邦舞」がそれぞれ半数近くを占めています。「現代演劇・メディア」の回答者は関東に多く分布しています。「近畿地方」では「邦楽」、「伝統芸能」、「演芸」に従事している割合が「関東地方」より高くなっています(回答数では、「演芸」は「関東地方」94人、「近畿地方」50人)。

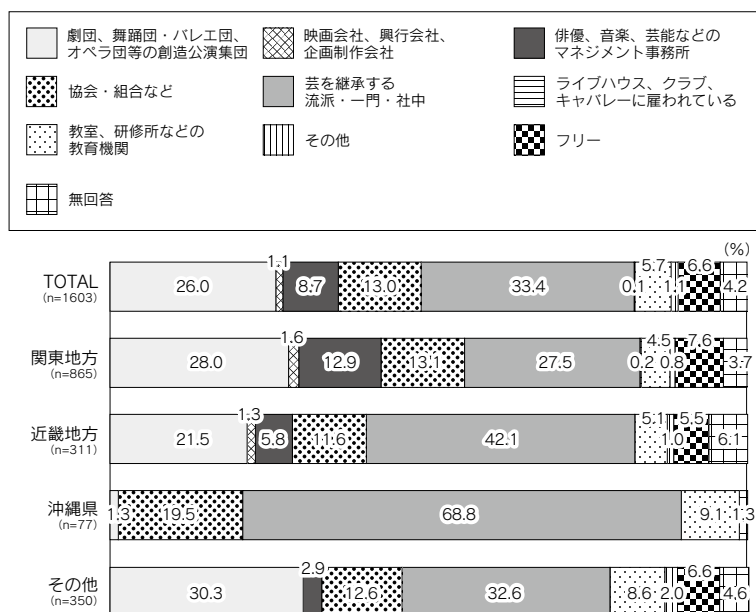


B-1 (b)

もっとも関係が深い所属している集団・流派・組織

所属している団体については、ジャンルの特性もあり、「芸を継承する流派・一門・社中」が「近畿地方」では42.1%、「沖縄県」では68.8%と大半を占めています。「劇団、舞踊団等の創造公演集団」は関東地方や「その他の地方」で割合が高くなっています。

問B-1 (b) もっとも関係が深い所属している集団・流派・組織



■ 仕事の状況—昨年 1 年間の活動

B-2 (a)

昨年 1 年間に行った行動(MA)

昨年 1 年間に行った行動では、「映画・放送・メディアへの出演・演奏」が「関東地方」で他地域よりも高いです。「その他の地方」では、「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆」などと「企画プロデュース・制作」、「教える仕事」の割合が他地域よりも高いです。

問B-2 (a) 昨年 1 年間に行った行動 (MA)

	n=	映画・放送・メディアへの出演・演奏	舞台・コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演の稽古	映画・放送・メディアへの出演・演奏	映画・放送・メディアへの出演・演奏のための稽古	振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など	企画・プロデュース・制作	教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）	芸能に関連するその他の活動	技能を維持するための研鑽・トレーニングなど	芸能活動以外の仕事	無回答
TOTAL	1,603	76.9	68.2	28.8	16.6	25.2	17.3	63.1	22.0	46.0	23.5	5.6
関東地方	865	75.5	67.7	36.0	20.7	27.2	17.9	60.6	21.4	46.5	23.6	5.1
近畿地方	311	81.4	67.8	25.7	14.1	19.0	14.5	64.3	22.5	49.8	20.9	6.8
沖縄県	77	83.1	76.6	9.1	9.1	14.3	6.5	51.9	27.3	37.7	31.2	3.9
その他	350	74.9	68.0	18.3	10.3	28.3	20.9	70.9	21.7	43.1	23.7	6.0

(%)

B-5 (a)

教える(指導・教授)仕事の状況(MA)

【ベース:指導者・教授】

「教える（指導・教授）仕事」の状況については、「関東地方」と「近畿地方」では傾向は同程度ですが、「沖縄県」では雇われるよりも自ら教室を主催している割合が他地域よりも高く、不定期の仕事としての依頼は少なくなっています。

問B-5 (a) 教える（指導・教授）仕事の状況 (MA)
【ベース：指導者・教授】

	n=	学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている	自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている	不定期の仕事として、ときどき体験指導など依頼される	無回答
TOTAL	936	51.7	67.0	36.9	4.3
関東地方	480	51.5	64.6	40.0	3.8
近畿地方	174	55.2	64.4	37.9	4.6
沖縄県	46	34.8	80.4	15.2	4.3
その他	236	53.0	71.2	33.9	5.1

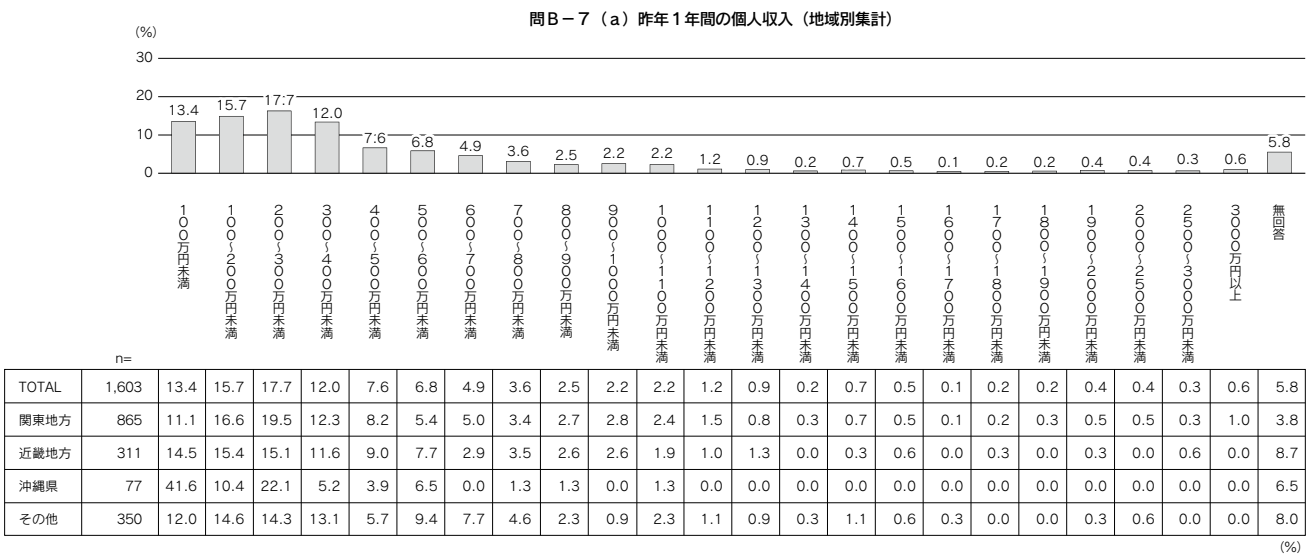
(%)

■ 収入について

B-7 (a)

昨年1年間の個人収入

関東と近畿を比べると、「近畿地方」で100万円未満の割合が高く200～300万円未満の割合が低くなっています。一方「沖縄県」では、100万円未満が41.6%を占めています。



C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)

個人負担となっている仕事上の必要経費について、「関東地方」と「近畿地方」を比べてみると、交通費、通信費、ケガ、病気予防などで「関東地方」の方が10ポイント前後高くなっています。

また、「沖縄県」ではノルマチケットの売れ残り自己負担が、全体の倍の割合で高くなっているのが目立ちます。

問C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)

	回答数	洗濯費、借用料	衣裳などの購入、整髪料、化粧品など	機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代	楽譜代・資料代	チラシ、プログラムの印刷費	共演者に対する出演料、謝礼	ノルマのチケット売れ残りの自己負担	会場の使用料	技能習得などに支払う授業料	資格認定にともなう費用	交通費	宿泊費	通信費	接待費・交際費	身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出	その他	個人負担は特にならない	無回答
TOTAL	1,603	57.2	45.4	37.4	31.8	19.4	20.6	25.9	19.8	29.8	11.3	56.6	18.3	44.4	44.2	40.3	1.7	7.2	3.4
関東地方	865	57.3	51.2	36.1	29.4	20.0	21.5	23.0	19.2	29.4	8.6	62.3	14.8	49.9	48.0	46.9	2.1	6.6	2.1
近畿地方	311	60.8	46.3	40.8	41.2	21.9	22.2	27.3	22.2	33.4	14.5	49.8	19.9	41.8	44.7	34.1	1.3	6.1	6.1
沖縄県	77	75.3	40.3	46.8	27.3	10.4	16.9	54.5	16.9	24.7	29.9	71.4	19.5	27.3	33.8	18.2	1.3	5.2	1.3
その他	350	49.7	31.1	35.4	30.3	17.7	17.7	25.4	19.7	28.6	11.1	45.4	25.1	36.6	36.9	34.3	1.4	10.0	4.6

(%)

■ よりよい仕事を続けるために

C-1

仕事上の問題点(MA)

仕事上の問題点では、「仕事を開拓していくだけの余力がない」と感じているのは「関東地方」では3人に1人の割合ですが、「沖縄県」では5人に1人となっています。逆に、「問題があるとは思っていない」の割合が「沖縄県」で高くなっています。

問C-1 仕事上の問題点 (MA)

	回答数	仕事のキャンセルがよくある	仕事のスケジュールの調整がむずかしい	自分で仕事を開拓していくだけの余力がない	その時その時で、違った人と仕事をするのでやりにくい	仕事が単発で継続して仕事がない	報酬その他についての交渉力が弱い	報酬が支払われるまでに時間がかかる	報酬の未払いがある	トラブルが起きても、泣き寝入りすることが多い	問題が起きた時の相談先がない	時間的な余裕がない中で仕事を強いられる	仕事上で要求されることが多岐にわたりに対応に苦労する	同じ仕事でも報酬の額が下がってきている	その他	問題があるとは思っていない	無回答
TOTAL	1,603	4.9	24.8	31.2	3.1	27.0	25.6	11.3	5.2	5.7	9.0	12.4	9.7	20.8	4.9	18.6	7.2
関東地方	865	5.9	26.5	33.6	2.7	30.2	26.9	13.4	7.3	6.5	9.8	12.3	9.1	22.8	5.0	16.0	6.6
近畿地方	311	5.8	27.0	28.9	4.8	27.0	27.7	8.7	1.6	6.8	9.0	14.1	11.6	22.8	4.2	17.7	8.0
沖縄県	77	0.0	19.5	20.8	6.5	28.6	26.0	16.9	5.2	2.6	6.5	6.5	2.6	10.4	1.3	29.9	9.1
その他	350	2.9	19.7	29.4	2.0	18.9	20.3	7.1	3.1	3.7	7.4	12.6	10.9	16.3	6.0	23.4	7.4

(%)

■ 仕事上のケガや病気

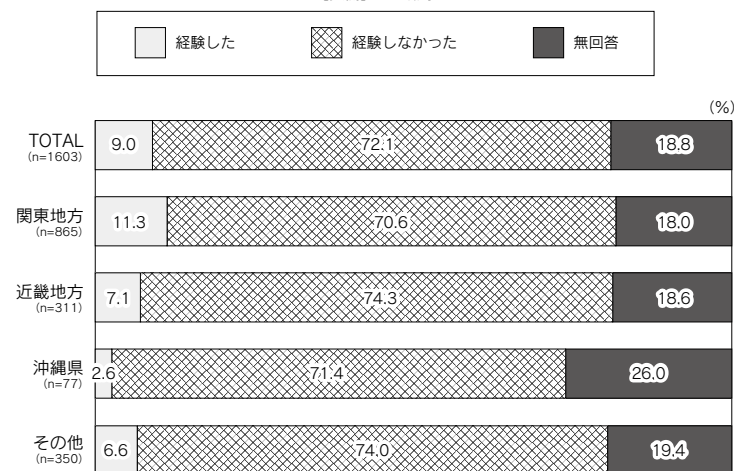
仕事上の傷害は、「関東地方」で割合が若干高くなっています。「沖縄県」では仕事上のケガ、仕事が原因と考えられる病気・症状ともに無回答の割合が高いです。

C-3

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a) 仕事上の傷害(ケガ)

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a)
仕事上の傷害(ケガ)

【表側】*地域別

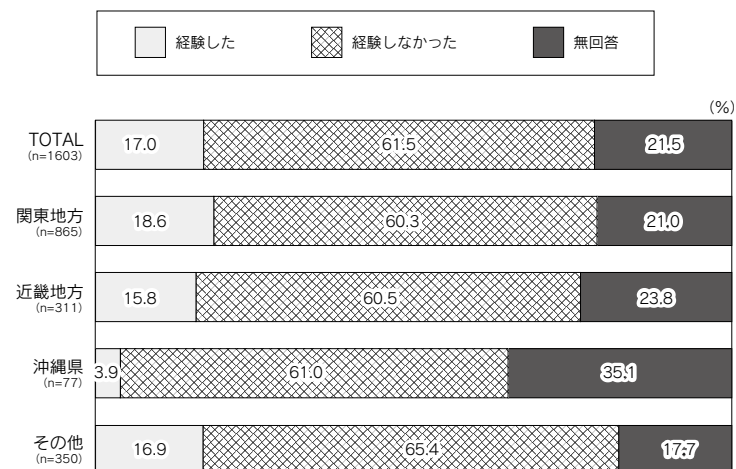


C-3

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (b) 仕事原因と考えられる病気・症状など

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (b)
仕事原因と考えられる病気・症状など

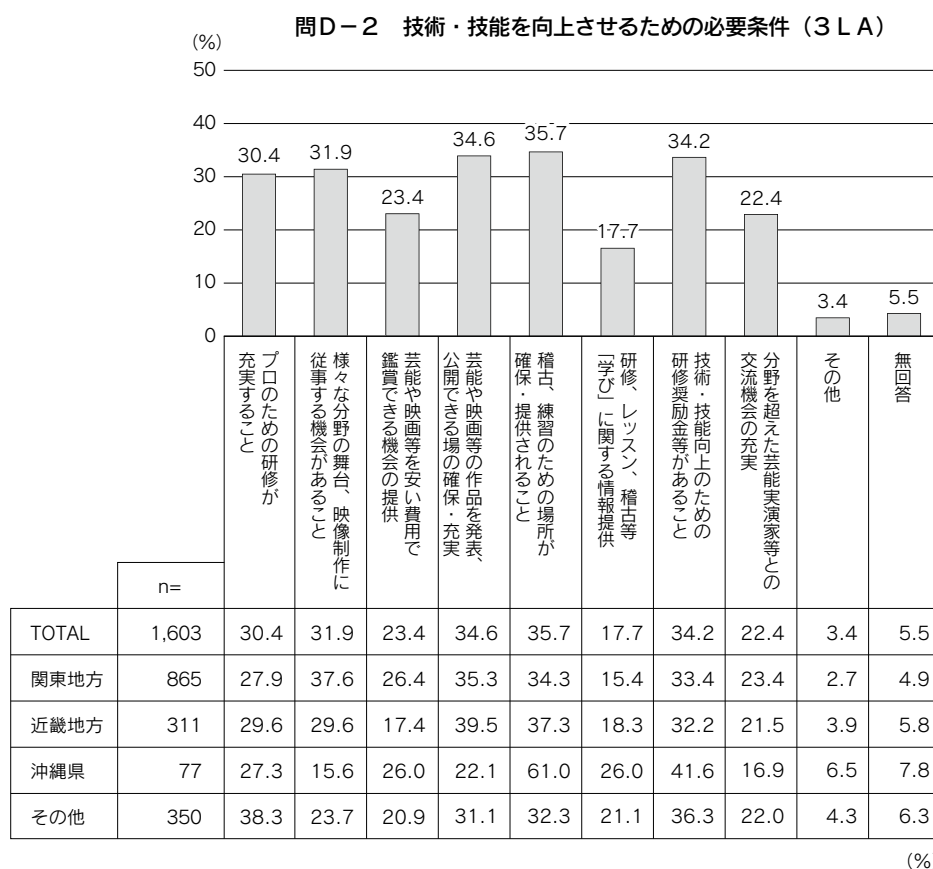
【表側】*地域別



D-2

技術・技能を向上させるための必要条件(3 L A)

技術・技能を向上させるための必要条件では、「沖縄県」で稽古、練習のための場所の確保が61.0%、研修奨励金が41.6%と高くなっています。「関東地方」と「近畿地方」では「稽古、練習のための場所が確保・提供されること」については「近畿地方」が37.3%、「関東地方」が34.3%、「芸能や映画等の作品を発表、公開できる場の確保・充実」が「近畿地方」で39.5%、「関東地方」で35.3%と、「場所」、「場」については「近畿地方」で要望が高いです。「様々な分野の舞台、映像制作に従事する機会があること」では、「関東地方」が37.6%、「近畿地方」が29.6%と、「関東地方」の要望が高くなっています。



■ 仕事に対する考え方と目的

仕事に対する見方は、「関東地方」「近畿地方」は、全国の集計結果の傾向とほとんど変わりませんが、「沖縄県」と「その他の地方」では若干特徴が出ています。

「仕事の量は十分である」については、「その他の地方」は肯定的に捉えている割合がやや高くなっています。「沖縄県」では「そうは思わない」の回答が少ないですが、無回答が多くなっていて、やや否定的な

方に傾いています。

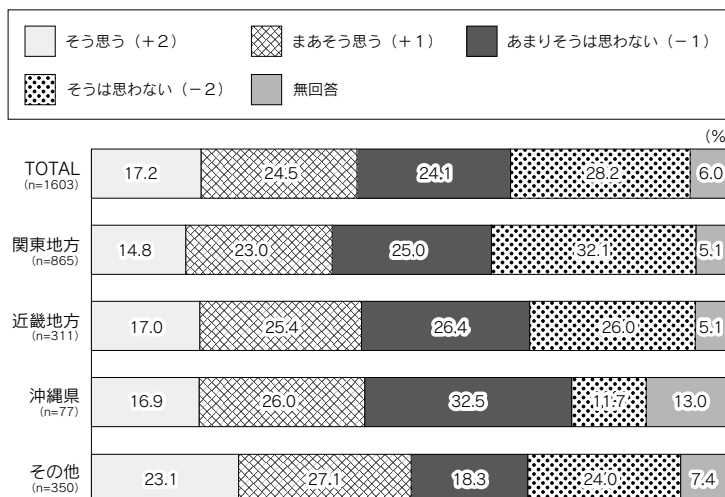
「入ってくる仕事は総じて自分のやりたい『本業』の仕事か」「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができている」「自分の仕事にプライドを持っている」「今の仕事を出来る限り続けたい」については、いずれも地域差はほとんど見られませんでした。

働く目的については、「自分の能

力や才能を発揮するために働く」は「関東地方」で高く、「近畿地方」「沖縄県」と6ポイント程度の差があります。「沖縄県」では「生きがいをを見つけるために働く」が他地域より10ポイント以上高く、「社会の一員として務めを果たすために働く」は他地域の半分程度となっています。

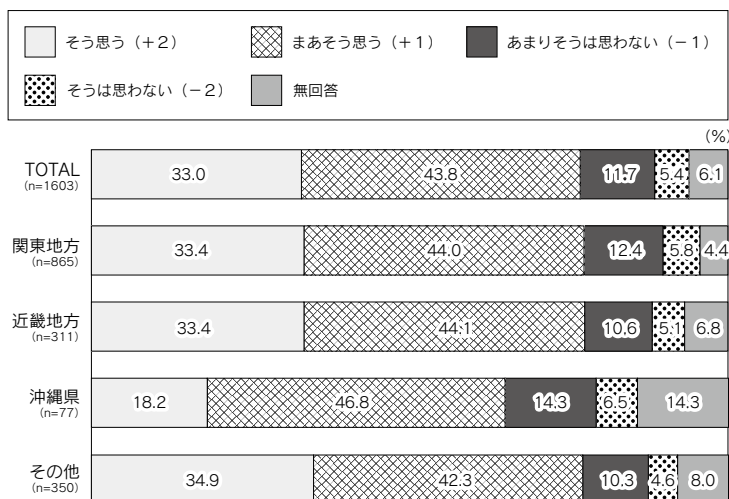
D-1 (a)

仕事に対する考え方
仕事の量は十分である



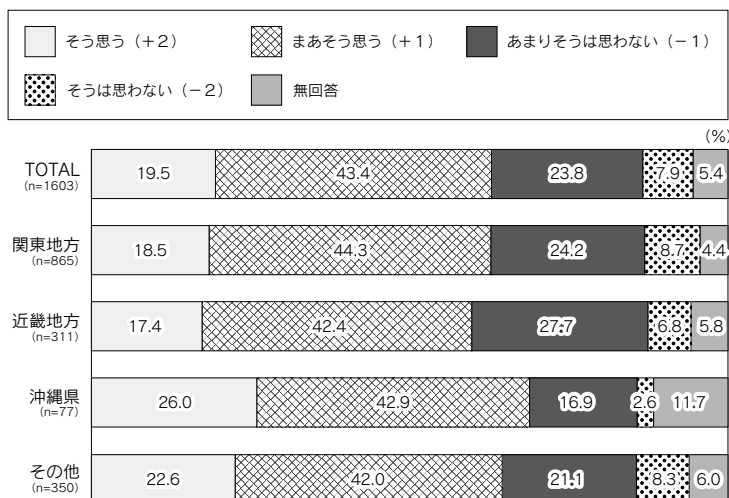
D-1 (a)

仕事に対する考え方
入ってくる仕事は総じて
自分のやりたい
‘本業’の仕事



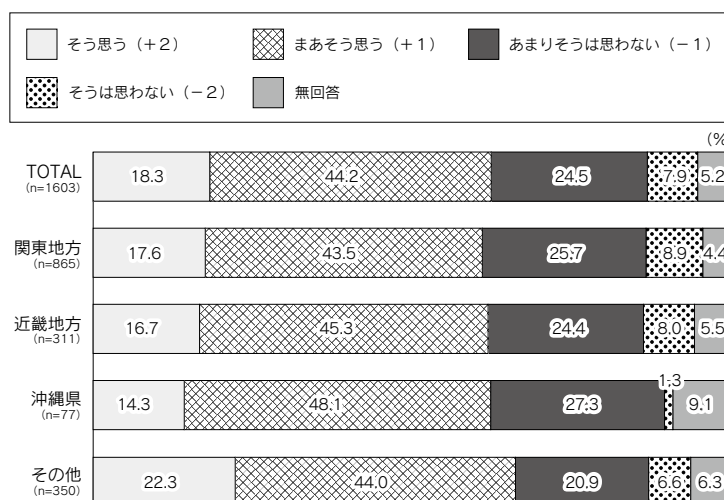
D-1 (a)

仕事に対する考え方
自分の仕事は世の中から
評価されている



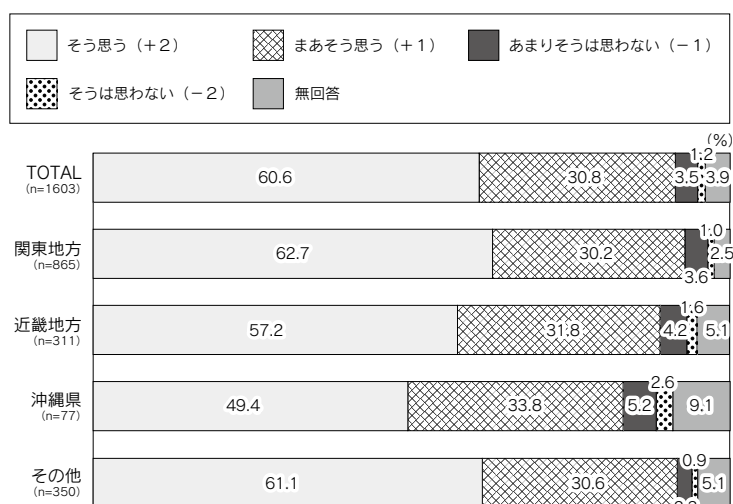
D-1 (a)

仕事に対する考え方
自分が持つ能力を
十分活用することが
できている



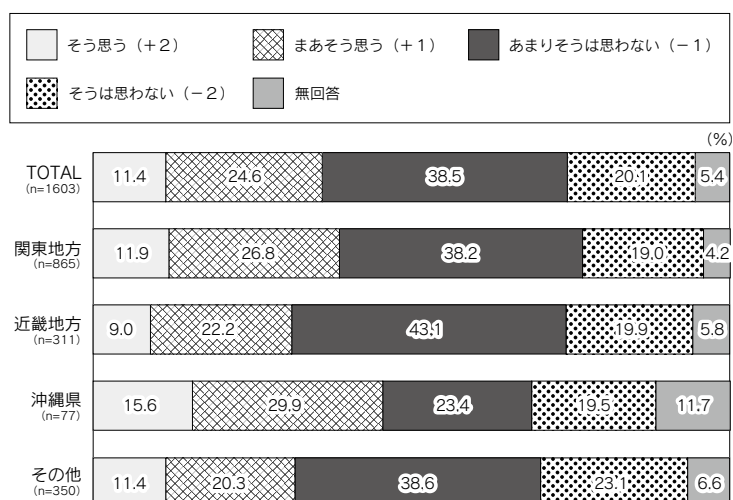
D-1 (a)

仕事に対する考え方
自分の仕事に
プライドを持っている

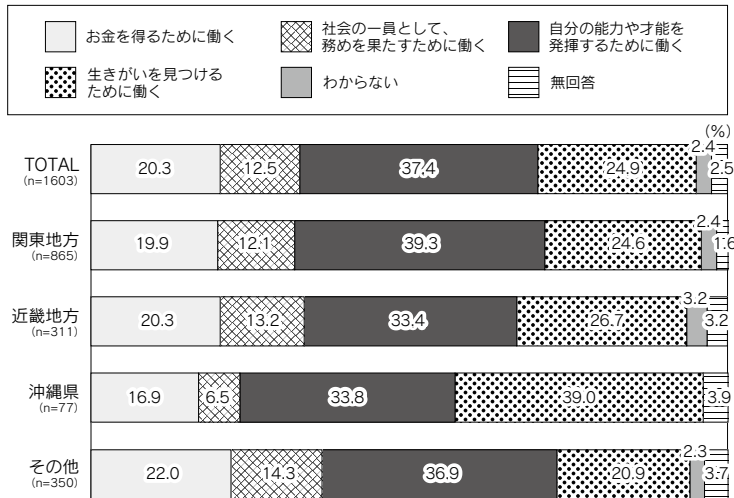


D-1 (a)

仕事に対する考え方
今の仕事を
出来る限り続けたい



D-1 (b) 働く目的



D-3 安心して活動できるための必要条件(3 L A)

安心して活動できるための必要条件については、「関東地方」で文化芸術にたいする社会の理解や公的支援の充実、また、けがや病気の補償や老後の年金制度の充実の割合が他

地域よりも高くなっています。「近畿地方」と「その他の地方」では、公共劇場等が文化拠点として機能することの必要性をあげる人の割合が高くなっています。「沖縄県」では、

研修への支援、練習場の確保、学校での芸能の教育の機会が十分に組み込まれることを要望する人の割合が他地域よりも高く、地域ごとに異なった傾向があります。

問D-3 安心して活動できるための必要条件(3 L A)

	回答数	発表や公演、出演の機会が多くあること	仕事に関する情報提供等、就業に関する支援があること	報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること	報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること	効果的な研修の提供等、技術・技能向上に関する支援	使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること	失業した時の補償が充実すること	仕事でけがや病気をした時の補償が充実すること	老後の生活のために年金制度が充実すること	公共劇場等が地域の文化拠点として機能すること	学校において芸能等の教育機会が十分組み込まれること	文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること	文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること	自治体による公的支援の充実	業界団体などによる支援活動の充実・強化	その他	無回答
TOTAL	1,603	49.8	11.0	38.7	13.7	14.9	10.5	12.7	22.7	17.2	17.5	21.3	31.2	10.9	2.3	3.2		
関東地方	865	50.8	11.7	41.3	12.7	12.6	12.5	14.5	25.0	13.3	15.7	24.9	32.6	10.2	1.7	2.1		
近畿地方	311	55.6	10.3	38.3	9.6	16.7	9.3	11.6	22.5	22.8	18.6	16.7	25.4	11.3	1.6	3.9		
沖縄県	77	51.9	10.4	36.4	20.8	28.6	6.5	7.8	18.2	15.6	24.7	6.5	27.3	9.1	1.3	5.2		
その他	350	41.7	10.3	33.1	18.0	16.0	7.4	10.6	18.3	22.0	19.1	19.7	33.7	12.9	4.6	5.1		

(%)